佐久市埋蔵文化財調査報告書　第49集

宮の上遺跡群

根々井芝宮遺跡

NENEI SIBAMIYA
長野県佐久市根々井・横和
宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡発掘調査報告書

本文遺構編

1998.3

佐久市教育委員会
佐久市土地開発公社

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第49集

宮の上遺跡群

根々井芝宮遺跡

NENEI SIBAMIYA
長野県佐久市根々井・横和
宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡発掘調査報告書

本文遺構編

1998.3

佐久市教育委員会
佐久市土地開発公社

例　　言

1　本書は、平成３年度から平成９年度（平成５年度を除く）にわたって調査した、長野県佐久市大字根々井（ねねい）および横和（よこわ）に所在する宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡の調査報告書である。

遺跡名　　宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡

所在地　　長野県佐久市大字横和字湯の上327、328、330-1・3、331-12・13

長野県佐久市大字根々井字芝宮219、220、221、223、224、225-2、226、227、229、231-1・2・3、232-1・2、233、234、235、236、237、238、317-1、318-1、319-1、320、321、322、323、324、325-1、326-1、328、329、334、335

調査面積　18,642㎡

開発主体者　佐久市土地開発公社

開発事業名　宅地造成事業

2　本調査は、佐久市土地開発公社の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。

3　本調査は、林幸彦（試掘）、羽毛田卓也（試掘・本調査）を担当者とし、地元の皆様をはじめ多数の方の協力を得て実施した。

4　本遺跡に関わるすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

5　本書作成の主たる作業分担は、以下のとおりである。

遺物・遺構実測　羽毛田卓也、堺益子、浅沼ノブ江、江原富子、木内明美、神津ツネヨ、花岡美津子、橋詰信子、橋詰勝子、細萱ミスズ、依田みち、小林よしみ

遺物・遺構トレス　羽毛田卓也

遺物・遺構写真　羽毛田卓也

執筆・編集　羽毛田卓也

6　調査にあたり、ご指導・ご協力を賜いた方々に記して厚くお礼申しあげます。

伊藤淳史、伊藤肇、上村安生、宇賀神誠司、臼田武正、岡村渉、小野和之、児玉卓文、小山岳夫、坂井隆、笹沢浩、助川朋広、竹原学、堤隆、寺島俊郎、田村孝、花岡弘、福島邦男、藤沢平治、丸山敏一郎、翠川泰弘、宮下健司、碓水孝之、（株）協同測量社、（有）浅間エンジニアリング、（株）パリノ・サーヴェイ、（有）仙縁総業

凡　　例

1　遺跡の略称　　宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡

Miyanoue Nenei Sibamiya　→　MNS

2　遺構の略称　　H→古墳時代・平安時代の竪穴住居址

Y→弥生時代の住居址

F→掘立柱建物址　　D→土坑

M→溝・溝状遺構、道路状遺構

S→調査区域外の遺構・試掘調査時にプランを検出した遺構

3　遺構の縮尺は図中にスケールを付したので参照されたい。

4　遺構図中におけるスクリーン・トーンは以下のものを表す。

遺構の土層断面図の地山　→　斜線

遺構の横断図の地山　　→　斜線

炉の焦土範囲　　→　網点

斜線上面は、地山あるいは使用面の境界を表す。

5　遺構の海抜標高は、各遺構ごとに統一し、測量基準ライン上に明記した。

6　住居址の規模は、確認面での規模で、古墳時代と平安時代の住居址はカマドの煙道突出部を含めない数値である。

7　写真図版・表中の番号（例22－3）は挿図番号（例第22図3番）と対応する。

8　土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修1987年度版『新版標準土色』の表示に基づいた。

9　遺構図中、ピット（柱穴）付近の数値（例－12cm）はピットの深さを示す。

10　遺物に関わる凡例は、遺物編において遺物凡例として示した。

11　遺構に関わる凡例は、上記説明の他に、Y1号住居址および炉実測図・H8・9号住居址およびカマド実測図中において説明を加えた。また初出事項は初出した図面中に説明を加えた。

目　　次

本文遺構編

例　言

凡　例

目　次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機……1

2　調査の概要……5

3　調査の体制……6

4　調査日誌……8

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の自然的環境……10

2　遺跡の歴史的環境……11

第Ⅲ章　層序……16

第Ⅳ章　遺構

1　弥生時代の中期の竪穴住居址

Y1号住居址(実測図内に凡例有り)……17

Y2号住居址……19

Y3号住居址……21

Y4号住居址……22

Y5号住居址……23

Y6号住居址……25

Y7号住居址……27

Y8号住居址……28

Y10号住居址……30

Y11号住居址……32

Y12号住居址……33

Y13号住居址……35

Y14号住居址……36

Y15号住居址……39

Y16号住居址 ……41
Y17号住居址 ……43
Y18号住居址 ……44
Y19号住居址 ……46
Y20号住居址 ……48
Y21号住居址 ……50
Y22号住居址 ……52
Y23号住居址 ……54
Y24号住居址 ……56
Y25号住居址 ……57
Y26号住居址 ……60
Y27号住居址 ……62
Y28号住居址 ……64
Y29号住居址 ……67
Y30号住居址 ……68
Y31号住居址 ……69
Y32号住居址 ……71
Y33号住居址 ……73
Y34号住居址 ……74
Y35号住居址 ……76
Y36号住居址 ……77
Y37号住居址 ……80
Y38号住居址 ……81
Y39号住居址 ……82
Y40号住居址 ……84
Y41号住居址 ……86
Y42号住居址 ……87
Y43号住居址 ……89
Y 9 号住居址 ……91
S 1 号住居址 ……91
S 2 号住居址 ……91
S 3 号住居址 ……92

S4号住居址 ……92
S6号住居址 ……92
S7号住居址 ……92
S9号住居址 ……93
S10号住居址 ……93
S11号住居址 ……93
S13号住居址 ……93
S15号住居址 ……94
S17号住居址 ……94
S18号住居址 ……94
S19号住居址 ……95
S20号住居址 ……95
S22号住居址 ……95
S23号住居址 ……95
S24号住居址 ……96
S26号住居址 ……96
2　古墳時代の後期の竪穴住居址
H8号住居址(実測図内に凡例有り) ……97
H9号住居址(実測図内に凡例有り) ……99
H10号住居址 ……103
3　平安時代の竪穴住居址
H1号住居址 ……106
H2号住居址 ……108
H3号住居址 ……110
H4号住居址 ……111
H5号住居址 ……114
H6号住居址 ……117
H7号住居址 ……119
H11号住居址 ……121
H12号住居址 ……123
H13号住居址 ……124
H14号住居址 ……126

4　掘立柱建物址

F1号掘立柱建物址 ……128

F2号掘立柱建物址 ……129

S28号掘立柱建物址 ……129

F29号掘立柱建物址 ……130

5　土　坑

D1号土坑 ……131

D2号土坑 ……131

D3号土坑 ……132

D4号土坑 ……132

D5号土坑 ……133

D7号土坑 ……134

D8号土坑 ……134

D9号土坑 ……135

D10号土坑 ……135

S5号土坑 ……136

S8号土坑 ……136

S12号土坑 ……136

S14号土坑 ……137

S16号土坑 ……137

S21号土坑 ……137

S25号土坑 ……137

S27号土坑 ……138

6　溝状遺構

M1号溝状遺構 ……139

M2号溝状遺構 ……141

M3号溝状遺構 ……141

M4号溝状遺構 ……141

M5号溝状遺構 ……143

本文遺物編

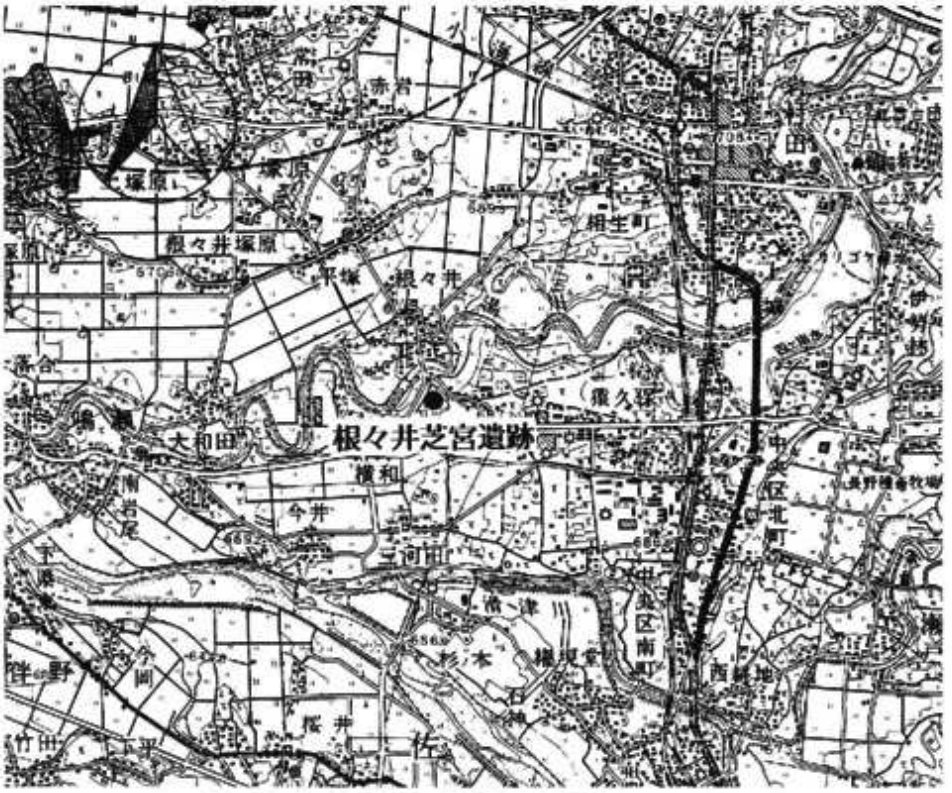
写真図版編

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

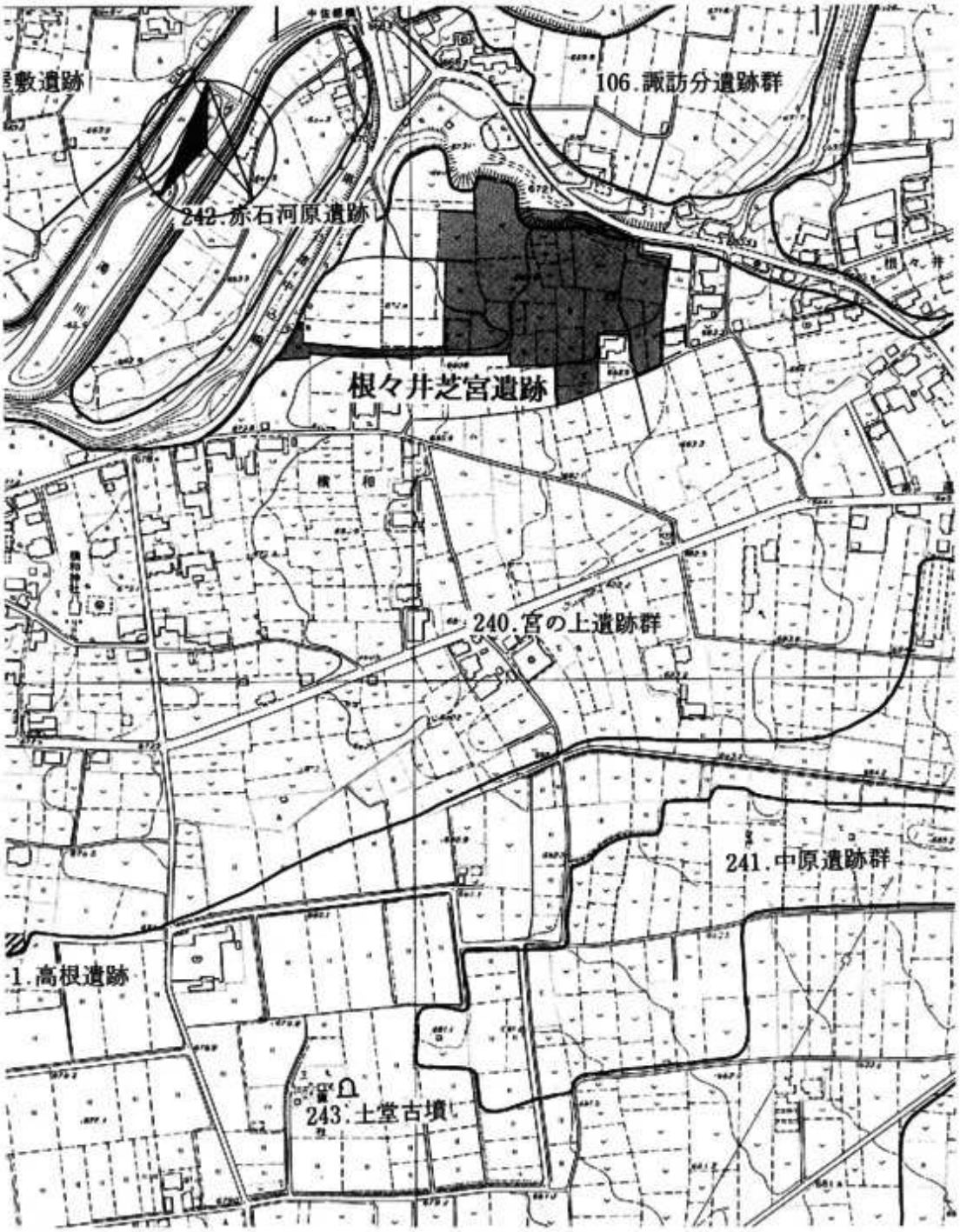
1　調査に至る動機

宮の上遺跡群は、佐久市大字根々井（ねねい）・横和（よこわ）に所在し、浅間山に源を発する湯川の浸食により形成された段丘の最上段の標高676mから688mに展開する弥生時代から平安時代にかけての遺跡群である。今回調査した根々井芝宮遺跡は、本遺跡群の北端で湯川側に舌状にせり出した台地状の標高680m内外を測る河岸段丘最上段に位置する。

今回、佐久市土地開発公社が行う宅地造成事業に伴い、佐久市土地開発公社と佐久市教育委員会とで協議の結果、試掘調査による遺構の確認作業を行うこととなった。試掘調査により対象地全体に弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構が広がっていることが判明し、再度両者で協議を行った。その結果、宅地については住宅の基礎工事が遺構の検出面を破壊しない高さまで盛り上をすることとし、永久構造物である道路部分と削平部分については佐久市土地開発公社より委託を受けた佐久市教育委員会が主体となって発掘調査を行う運びとなった。



第1図　宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡位置図（1：50,000）



第2図　根々井芝宮遺跡位置図（1：5,000）

第３図　根々井芝宮遺跡調査区・試掘トレンチ設定図（網点内対象地、数字は地番、１：2,000）

2　調査の概要

平成３年度	試掘調査		
	調査面積	945㎡	
	調査期間	平成３年12月14・16・17日	
	検出遺構	平安時代の竪穴住居址	２軒
		平安時代以降の道路跡	１条
		時代不明の土坑	１基
平成４年度	試掘調査		
	調査面積	18,642㎡	
	調査期間	平成４年６月26日・７月７日	
	検出遺構	弥生時代から平安時代の竪穴住居址	79軒
平成４年度	本調査		
	調査面積	約6,700㎡	
	調査期間	平成４年７月６日から平成４年10月７日	
	調査遺構	弥生時代中期の竪穴住居址	43軒
		古墳時代後期の竪穴住居址	3軒
		平安時代中期の竪穴住居址	11軒
		弥生時代中期の土坑・墓坑	9基
		時代不明の掘立柱建物址	2棟
		時代不明の溝状遺構・道路址	4条
	整理調査		
	調査期間	平成５年２月２日から平成５年２月９日	
平成６年度	整理調査		
	調査期間	平成６年12月５日から平成７年３月31日	
平成７年度	整理調査		
	調査期間	平成７年12月４日から平成８年３月31日	
平成８年度	整理調査		
	調査期間	平成８年４月５日から平成９年３月31日	
平成９年度	整理調査		
	調査期間	平成９年４月７日から平成10年３月31日	

3　調査の体制

平成３年度

事務局　　佐久市教育委員会埋蔵文化財課・佐久埋蔵文化財調査センター

教育長	大井季大
教育次長	小池八郎
佐久市開発公社局長	須江吉介
佐久埋蔵文化財調査センター所長	上原正秀
埋蔵文化財課長	上原正秀
管理係長	桜井牧子
埋蔵文化財係長	草間芳行
埋蔵文化財係	高村博文、林幸彦、三石宗一、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也、竹原学
調査担当者（試掘）	羽毛田卓也
調査主任	佐々木宗昭

平成４年度

事務局　　佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教育長	大井季大
教育次長	奥原秀雄
埋蔵文化財課長	上原正秀
管理係長	桜井牧子
埋蔵文化財係長	草間芳行
埋蔵文化財係	高村博文、林幸彦、三石宗一、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也
調査担当者（試掘）	林幸彦、羽毛田卓也
（本調査）	羽毛田卓也
調査主任	佐々木宗昭、森泉かよ子

平成６年度

事務局　　佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教育長	大井季大

教育次長	奥原秀雄
埋蔵文化財課長	戸塚　満
管理係長	谷津恭子
管理係	田村和広
埋蔵文化財係長	草間芳行
埋蔵文化財係	林幸彦、三石宗一、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也 冨沢一明、上原学
調査担当者	羽毛田卓也
調査主任	佐々木宗昭、森泉かよ子

平成７年度

事務局　　佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教育長	大井季夫（平成７年６月退任） 依田英夫（平成７年７月就任）
教育次長	市川　源
埋蔵文化財課長	戸塚　満
管理係長	谷津恭子
管理係	田村和広
埋蔵文化財係長	大塚達夫
埋蔵文化財係	林幸彦、三石宗一、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也 冨沢一明、上原学
調査担当者	羽毛田卓也
調査主任	佐々木宗昭、森泉かよ子

平成８・９年度

事務局　　佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教育長	依田英夫
教育次長	市川　源
埋蔵文化財課長	北沢元平（平成８年度） 須江仁胤（平成９年度）
管理係長	櫛沢慶子
管理係	田村和広（平成８年度）

埋蔵文化財係長	大塚達夫
埋蔵文化財係	林幸彦、三石宗一、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也 冨沢一明、上原学
調査担当者	羽毛田卓也
調査主任	佐々木宗昭、森泉かよ子

平成３年度から平成９年度

調査員　浅沼ノブ江、荒井利男、荒井豊平、飯沢つや子、飯森礼子、池田豊子、磯貝はな
市川愛子、市川チイ子、岩下吉代、岩下とも子、江原富子、遠藤しずか
大井久美子、小田川栄、小田川時江、柏原松枝、川多アヤ子、木内明美
工藤しず子、神津ツネヨ、神津よしの、小須田サクエ、小林幸子、斎藤義男
堺益子、重田よし子、篠崎清一、清水六郎、白井おくに、武田千里、角田良夫
角田時、並木ことみ、橋詰勝子、橋詰けさよ、橋詰信子、花岡美津子、小林よしみ
花里八重子、藤巻辰江、星野良子、細萱ミスズ、堀込成子、堀篭因、丸山澄
桃井もとめ、山口丑男、依田みち、和久井義雄、渡辺久美子、渡辺倍男

4　調査日誌

平成３年12月14日・16日・17日

試掘調査　工事用進入路部分

平成４年６月26日・７月７日

試掘調査

平成４年７月６日

現地にて打ち合わせ　機器材の搬入など

平成４年７月７日～

本調査開始　プランの確認作業など

平成４年７月８日～

遺構の掘り下げ開始

平成４年７月20日～

実測作業開始　写真撮影開始　水撒き作業開始

平成４年７月27日～７月30日

少年考古学教室準備

平成４年８月５日～８月７日

少年考古学教室

平成４年９月８日

調査地北端部の試掘調査

平成４年10月１日

航空測量および航空写真撮影

平成４年10月２日

現場作業終了

平成４年10月２日～10月９日

重機による調査区の埋め戻し

平成５年２月２日～２月９日

実測図面の修正および土器等水洗い

平成６年12月５日～平成７年３月31日

実測図面の修正、遺物の注記、土器の復元、土器の実測

平成７年12月４日～平成８年３月31日

土器の復元、土器・石器の実測、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影

本文の原稿執筆および編集作業

平成８年４月５日～平成９年３月31日

土器・石器類の版下作成

平成９年４月７日～平成10年３月31日

遺物の写真撮影・写真図版作成、編集作業、遺物・図面類の収納

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の自然的環境

第４図　長野県佐久市位置図

佐久平は、北に浅間山を主とする三国山脈の南端峰群、東から南に関東山地から連なる山々である佐久山地、西から南に八ヶ岳連峰と、四方を山々に囲まれた標高630mから760m内外の盆地で、長野県の中央東端にあたり群馬県と接している。盆地全体の平坦部の標高は600mから1000mを測り、佐久市はこの佐久平のほぼ中央に位置する。

佐久市の中央部を佐久地方南端の甲武信ヶ岳に源を発する千曲川が北進し、浅間山に源を発する濁川・濁川、佐久山地に源を発する志賀川・香坂川・滑津川、八ヶ岳に源を発する片貝川・大沢川・中沢川・宮川などの小河川がそれに向かって集まり、大小の扇状地や河岸段丘を形成し

ている。佐久山地の八風山や寄石山・物見山・兜岩山・熊倉峰・荒船山は、石英安山岩や溶結凝灰岩・ガラス質の荒船安山岩類により形成されている。これらの山の基盤には第三紀層・中生層や古生層が広がっているとされている。内山の初谷層は中生層で内山層は第三紀層である。また兜岩層・駒込層・八重久保層は第三紀層である。また少量ながら香坂川にてチャートを採取できることより、古生層の路頭が寄石山北側にあると考えられる。佐久平の中央を流れる千曲川に沿って断層が走るが、火山性堆積物に覆われているため、地表での確認はできない。他にも内山断層があり、志賀・香坂地籍ではいくつかの細かな断層があると考えられる。

上田から佐久にかけての千曲川流域は、北海道とともに日本の小雨地帯で、年間降水量は長野941ミリ・上田870ミリ・東部946ミリ・佐久が908ミリである。また年間の日照時間は、松本2649時間・上田2547時間・東部2544時間・佐久2532時間で、高知県足摺岬と並び、日本で一番日照時間の多い地域である。佐久盆地は年間の降水量が軽井沢を除き1000ミリに達せず、年平均気温は10℃を切る典型的な中央高地型気候である。また標高800mを超える山間部は軽井沢同様、高冷地気候である。厳冬期の気温は北海道や東北地方北部と同じほど下がるが、夏期の最高気温は関東地方と大差ない。また夏期の最低気温は北海道と大差ない。この年間の気温差と夏期の一日の気温差は高冷地の盆地特有の性質である。また、このことが佐久盆地に四季折々の豊かな自然を与えてくれているのである。

佐久平の北側は、浅間山の火山噴出物によって厚く覆われ、雄大な山麓を形成している。この山麓は火山噴出物の性格上水の各種作用を受けやすく、大小様々な峡谷や「田切り地形」と呼ばれる帯状台地と帯状低地の交互地形が見られる。今回調査した宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡は、湯川の侵食によって形成された河岸段丘最上段に位置し、北側の湯川と南側の段差のあまりない帯状低地（田切り低地）に挟まれた緩やかな南西傾斜の台地上に展開している。この台地の北西側縁辺と寺畑遺跡群の展開する台地の北東側縁辺部から湯川第二段丘面までの斜面中腹のいたるところより水が湧き出している。この第二段丘面と第一段丘面（諏訪分遺跡群）が根々井芝宮遺跡で検出された集落の稲を主体とする生産域と考えられる。

2　遺跡の歴史的環境

今回調査した宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡の周辺には、多くの遺跡や遺跡群が密集している。東側で隣接する寺畑遺跡群では、縄文時代の創早期の土器群と石器群が平成６・７年度の調査で見つかっている。他に縄文時代の遺構が調査で確認された例は近辺ではないが、今回の調査遺物の中に何点か縄文時代中期の土器片が混入していることから、付近に縄文時代の遺構のある可能性は高い。弥生時代の中期では、東西に蛇行して西進する湯川を挟んで、一本柳遺跡群西一本柳

第5図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

遺跡Ⅰ（平成5年度調査）・西一本柳遺跡Ⅱ（平成6年度調査）・西一本柳遺跡Ⅲ（平成7年度～調査継続中）、北西の久保遺跡（昭和57・58年度第1次調査、昭和60・61年度第2次調査）、鳴澤遺跡群1（平成2年度試掘調査）・鳴澤遺跡群2（平成6年度試掘調査）、日向屋敷遺跡（平成2年度試掘調査）などが調査されている。この内鳴澤遺跡群1の試掘調査の際に出土した土器群を遺物編の最初に掲載したので参照されたい。また湯川の南側では白山遺跡群1（平成4年度試掘調査）が調査されている。いずれの遺跡も弥生時代の中期の後半を主体とする大集落を内包しており、根々井芝宮遺跡を中心とした半径1.5km内に収まるほど密集している。また調査はされていないが、表面採集遺物などから大和田屋敷遺跡群（26）・大和田遺跡群（27）・寄塚遺跡群

第1表　周辺遺跡一覧表（1）

No.	遺　跡　名	時　　代	所在地	調査による弥生中期の状況など
1	前田遺跡群	弥生～平安	常田・塚原	弥生後期確認
2	宮の塚古墳	古墳	塚原	
3	堰添遺跡	弥生	常田	
4	宮の前遺跡	平安	塚原	
5	龍了田遺跡	平安	塚原	
6	常田居屋敷遺跡群	弥生～平安	常田	弥生後期確認
7	松の木遺跡	弥生～中世	岩村田	
8	上砂田遺跡	弥生～平安	岩村田	
9	喜平治山古墳	古墳	岩村田	
10	宮の西遺跡	弥生～中世	岩村田	
11	一本柳遺跡群	弥生～中世	岩村田	弥生中期集落など調査中
12	中鳴澤遺跡群	弥生～平安	岩村田	調査中
13	中西の久保遺跡群	弥生～平安	岩村田	調査中
14	北西久保遺跡 北西久保古墳群	弥生～中世 古墳	岩村田	弥生中期・後期集落など
15	鳴澤遺跡群	縄文～平安	根々井	弥生中期住居・円形溝
16	根々井東原館跡	中世	根々井	
17	上鳴澤古墳群	古墳	根々井	
18	西一里塚遺跡群	弥生～平安	岩村田	弥生後期集落
19	姫宮塚古墳	古墳	根々井	
20	伊勢田遺跡	弥生	根々井	
21	日向屋敷遺跡	弥生～平安	根々井	弥生中期包含層・後期住居確認
22	根々井居屋敷遺跡	弥生～平安	根々井	弥生後期包含層確認
23	根々井大塚古墳	古墳	根々井	
24	塚原屋敷添遺跡	平安	塚原	
25	道添遺跡	弥生・平安	塚原	弥生後期住居確認
26	大和田屋敷遺跡群	弥生～古墳	鳴瀬	
27	大和田遺跡群	縄文～古墳	鳴瀬	
28	白山遺跡群	縄文～平安	鳴瀬・三河田	弥生中期集落確認

第２表　周辺遺跡一覧表（２）

No.	遺　跡　名	時　　代	所在地	調査による弥生中期の状況など
29	寄塚遺跡群	弥生～中世	横和	
30	寄塚古墳	古墳	横和	
31	鍛冶田遺跡	弥生～中世	横和	
32	北久保遺跡	古墳～中世	横和	
33	赤石河原遺跡	弥生・平安	根々井・横和	
34	諏訪分遺跡群	弥生～平安	根々井	
35	寺畑遺跡群	縄文～中世	根々井・猿久保	縄文創早期他調査中
36	中原遺跡群	縄文～中世	今井・中込・横和	中世集落確認
37	三河田大塚古墳	古墳	三河田	
38	根々井館跡	弥生・中世	根々井	弥生後期確認
39	今井宮の前遺跡 今井城跡	平安～中世 中世	今井	
40	土堂古墳	古墳	三河田	
41	宮の上遺跡群	縄文～平安	根々井・横和	平安集落確認
42	根々井芝宮遺跡	弥生・古墳・平安	根々井・横和	今回調査
43	今井西原遺跡	弥生～平安	今井	

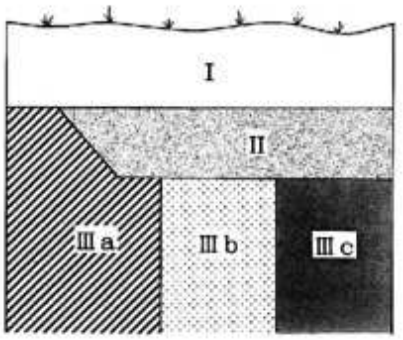
(29) なども中期の集落の存在が想定される。

弥生時代後期では、西一本柳遺跡・西一里塚遺跡・北西の久保遺跡・日向屋敷遺跡・寺畑遺跡・根々井館跡・道添遺跡などが調査され、住居址等が検出されている。古墳時代では、西一本柳遺跡・北西の久保遺跡・北西の久保古墳群・中西の久保遺跡などが調査されている。本遺跡でも３軒の住居址が検出されたが、湯川南側の台地上では初めての検出例となり三河田大塚古墳などを考えるうえで貴重である。奈良時代では西一本柳遺跡などが調査されている。平安時代では、西一本柳遺跡・北西の久保遺跡・宮の上遺跡Ⅰ・Ⅱが調査されている。本遺跡と同一遺跡群である宮の上遺跡群宮の上遺跡Ⅰ・Ⅱ（昭和62・63年度調査）では５軒の平安時代の住居址が検出されている。何点かの墨書（ぼくしょ）土器を伴っており、本遺跡と類似点がある。本遺跡群ではかなり広範囲に平安時代の集落が営まれていたようである。また寺畑遺跡群北側の湯川第二段丘では平成７年度の調査で古墳時代から平安時代にかけての集落が検出され、長野県内では珍しい平安時代初頭の白銅鏡（花弁双蝶八花鏡）が見つかっている。中世では、中原遺跡群梨の木遺跡Ⅰ・Ⅱ（昭和

62・63年度）などが調査され、中世の集落が検出されている。

今回根々井芝宮遺跡で検出された住居は、弥生時代中期・古墳時代後期・平安時代中期である。根々井芝宮遺跡は湯の上遺跡として古くから縄文をもつ土器群を出土することで知られていた。今回の調査により該期の大集落の一部が発見され、集落は湯の上から芝宮地籍にかけてかなり密度が濃く展開しているものと考えられる。今回は道路部分の調査だけだったが、単純計算では弥生時代中期だけでも200軒を越す集落であったと予想される。西2㎞先には白山遺跡群、湯川を挟んで北側に北西久保遺跡・上鳴澤遺跡群・一本柳遺跡群など弥生時代中期の大集落が近接している。中期後半と限定された時期に同じ文化をもった集落がこれだけ近接している地域は佐久市内には他にない。このことは集落同士の関係を考える上で興味深く、さらに佐久平全体の該期文化を考える上でも重要であろう。また根々井芝宮遺跡で弥生時代中期の集落を営んだ人々はどこへ移動して行ったのだろうか。付近には継続する時期の集落は発見されていない。時間軸を定規を使用して切ったかのように断絶している。これらのことは今後明らかにしていくべき課題であろう。

第Ⅲ章　層　序



第６図　層序模式図

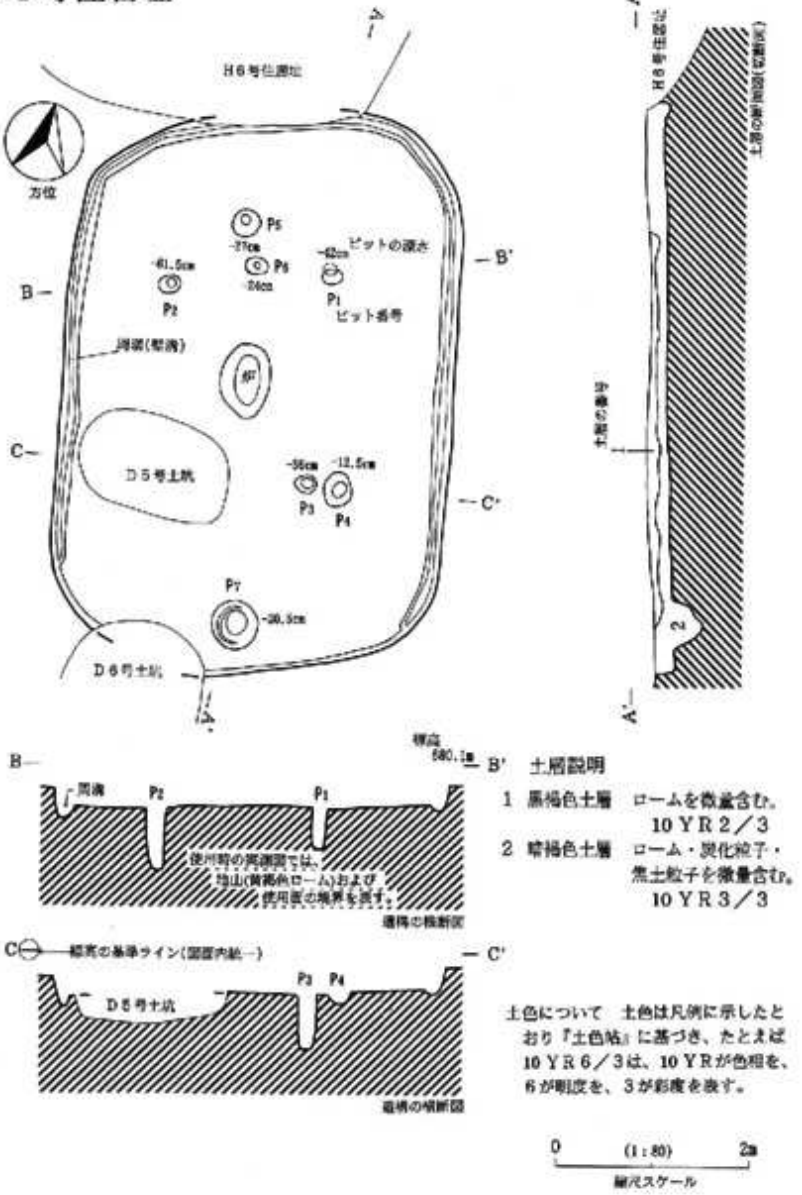
根々井芝宮遺跡は、682～676mを測り、南西から西方向に向かって緩やかに傾斜する。基本となる層序は、調査区西端１個所、西側２個所、南側３個所、東側３個所、北側３個所、中央部４個所の計16個所で測定した。

第Ⅰ層は、耕作等により成立した粘性が弱くしまりのない黒褐色土で、第Ⅱ層は、粘性が弱く第Ⅲ層を多量に含む暗褐色土（10YR３／３）である。第Ⅲ層は、浅間第１軽石流本体あるいは軽石流二次堆積層で、大きく３種類に分類した。第Ⅲa層は、砂質ローム主体の黄褐色土（10YR５／６）で調査区のほぼ全体を覆っている。第Ⅲb層は、しまりのある明黄褐色ローム（10YR６／８）で径３～６㎝大の軽石を微量含み、調査区の南側を中心に広がる。第Ⅲc層は、やや砂質の明黄褐色ローム（10YR６／６）で径５㎜以下の軽石を含み、調査区の東側と南側の一部に広がる。第１層は20㎝～45㎝、第２層は０㎝～35㎝の厚みが観察された。遺構の確認はすべて第Ⅲ層の上面において行った。

第Ⅳ章　遺　構

1　弥生時代の中期の竪穴住居址

Ｙ１号住居址



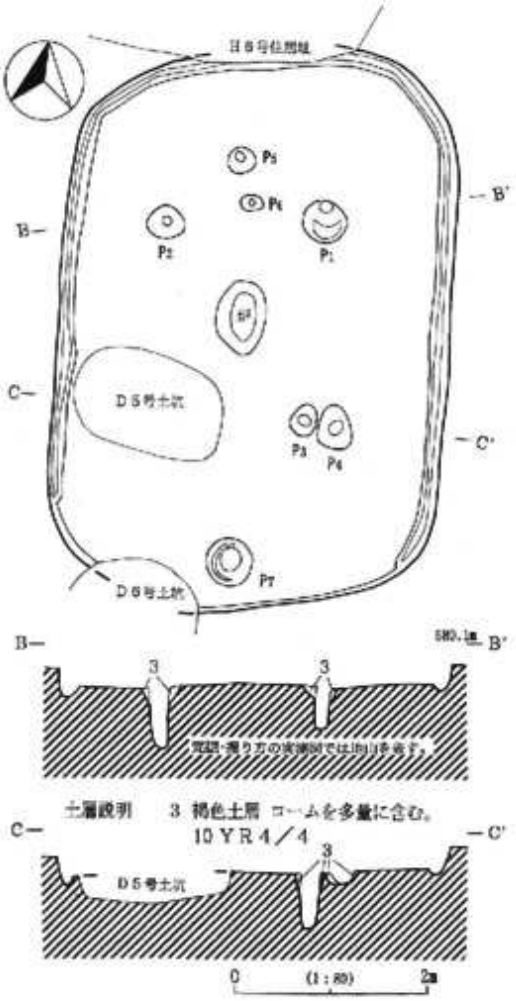
土層説明

1　黒褐色土層　ロームを微量含む。
10ＹＲ２／３

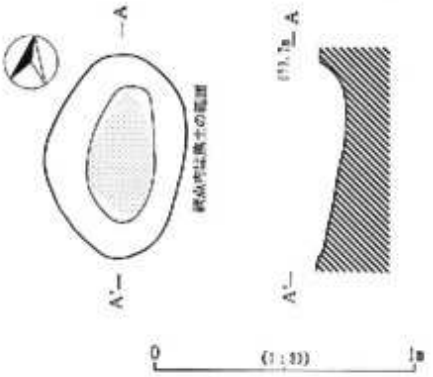
2　暗褐色土層　ローム・炭化粒子・焦土粒子を微量含む。
10ＹＲ３／３

土色について　土色は凡例に示したとおり『土色帖』に基づき、たとえば10ＹＲ６／３は、10ＹＲが色相を、６が明度を、３が彩度を表す。

第７図　Ｙ１号住居址実測図



第8図　Y1号住居址実測図（ピット完掘）



第9図　Y1号住居址炉実測図

Y1号住居址は、調査区西側中央、セーター36・37グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。本住居址は、北側の壁をH6号住居址に、南西の隅をD6号土坑に、床面の南西部をD5号土坑によって破壊される。なお、D6号土坑は現代の攪乱と考えられる。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北582cm・東西404cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ8°ずれる。

床の面積は、破壊された南西部を含めて18.8㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは15.5～25cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームをそのまま利用し、平滑であるが軟弱であった。また南側を除く三辺の壁の際に周溝が認められた。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_3）と補助柱穴3個（P_4～P_6）、入口施設の掘り込みあるいは貯蔵穴と考えられるピット（P_7）の計7個が検出された。この内P_5は南北に走る棟を支えるための柱である棟持柱の柱穴と考えられる。

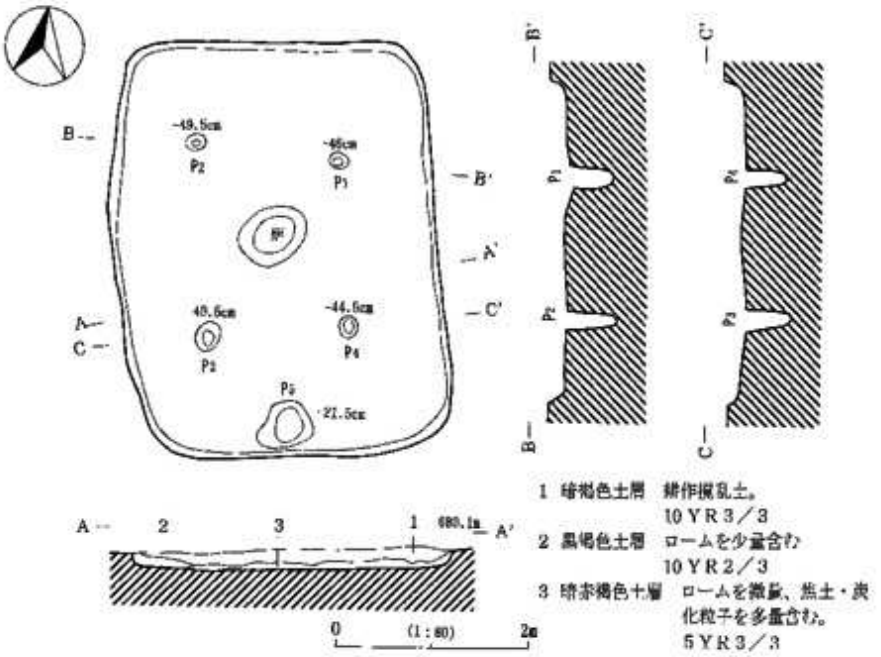
炉は南北に長い楕円形で住居址の中央で検出された。規模は77cm×52cm・深さ8.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に3㎜以下で確認されたが、図示は控えた。

遺物は、壺や甕・坏といった土器類や石鏃・横刃型石器・石鍬（打製石斧）などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期の後半代と考えられる。

・住居址平面図→17・18ページ　　・遺物実測図→149・150ページ
・住居址写真→367・368ページ　　・遺物写真→403・404ページ

Y２号住居址



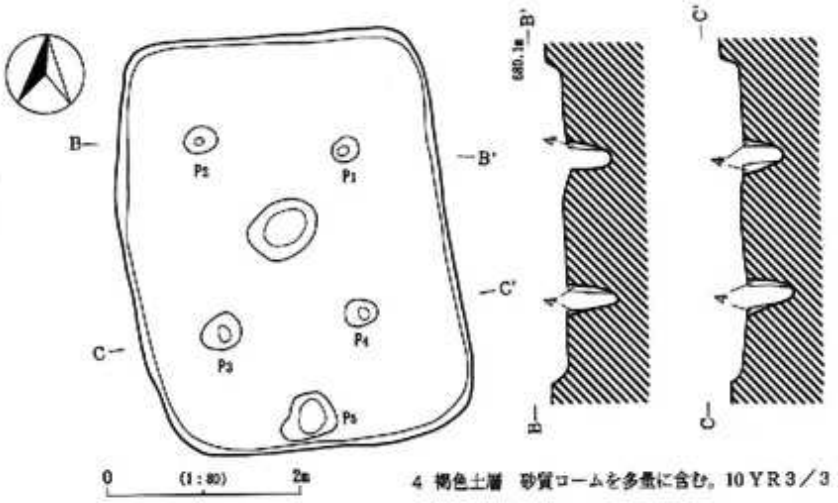
第10図　Ｙ２号住居址実測図

Ｙ２号住居址は、調査区北側中央、エ・オ－32・33グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。

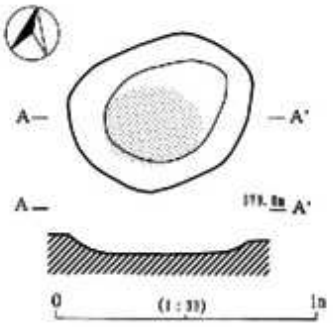
平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北428cm・東西334cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ15°ずれる。床の面積は、破壊された南西部を含めると12.48㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は３層に分割され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは22.5～7.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）と入口施設の掘り込みあるいは貯蔵穴と考えられるピット



第11図　Y２号住居址実測図（ピット完掘）



第12図　Y２号住居址炉実測図

（P_5）の計５個が検出された。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は71cm×55cm・深さ８cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に３mm以下で確認されたが、図示は控えた。

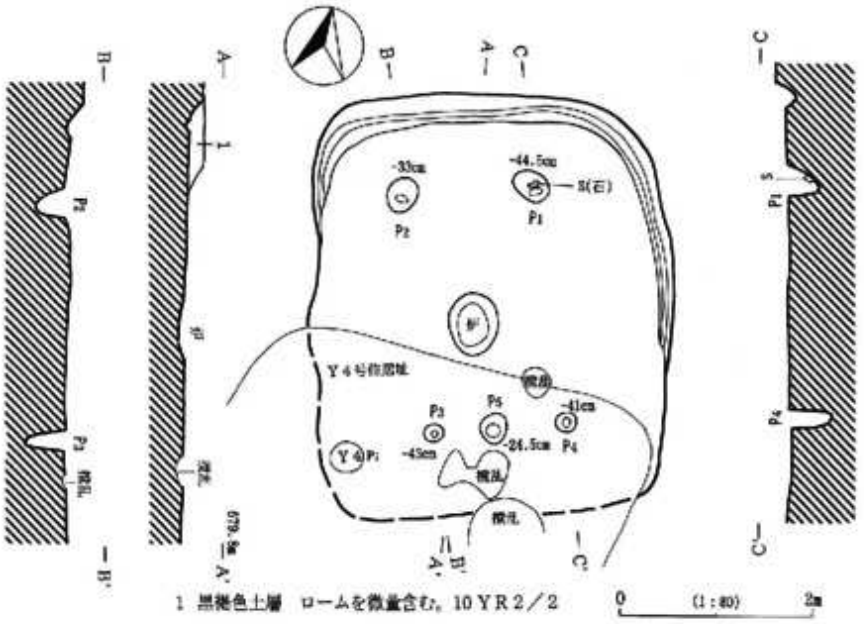
本住居址は全体に焦土と炭化材の小片が認められ、床面もかなり焼けていた。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壺や甕・坏といった土器類や石鏃・擦り石・砥石などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→19・20ページ
・住居址写真→367・368ページ
・遺物実測図→151～153ページ
・遺物写真→405・406ページ

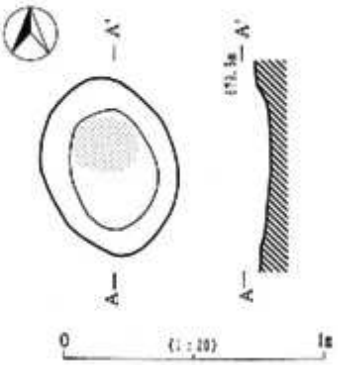
Ｙ３号住居址



第13図　Ｙ３号住居址実測図

Ｙ３号住居址は、調査区の南西、チ・ツ－37・38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。本住居址は、南側をＹ４号住居址と撹乱により破壊される。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北435cm（推定値）・東西374cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ21°ずれる。床の面積は、推定で12.99㎡を測る。



第14図　Ｙ３号住居址炉実測図

住居址の検出面から床までの土層は１層のみが確認され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは０～16cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は破壊を免れた

北壁の際と西壁と東壁の一部で認められた。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴（P_5）の計5個が検出された。

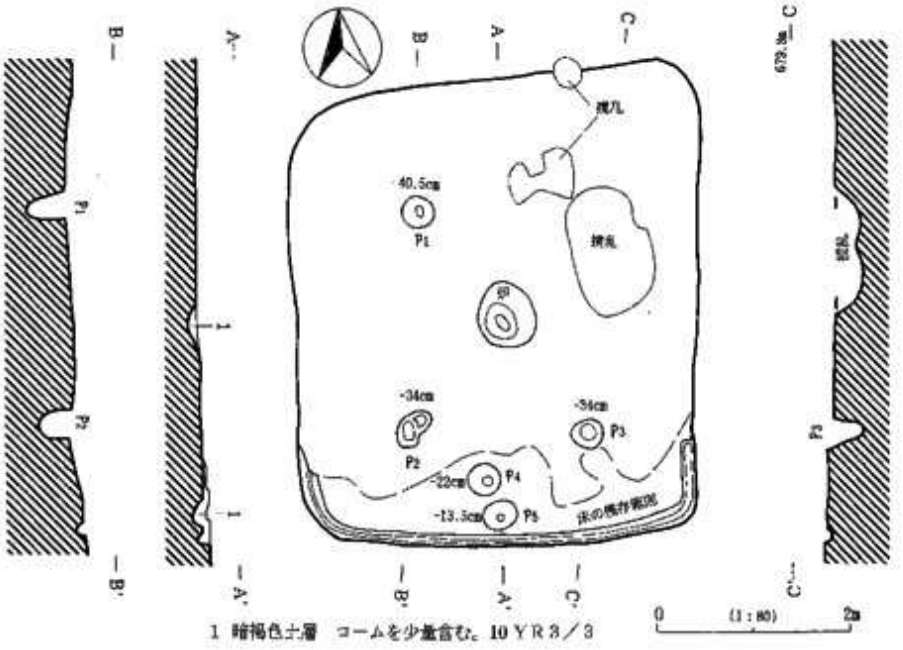
炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は69cm×51cm・深さ8.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に3mm以下で確認されたが、図示は控えた。

遺物はきわめて少なく、壷や甕・坏といった土器の破片や、扁平片刃石斧などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

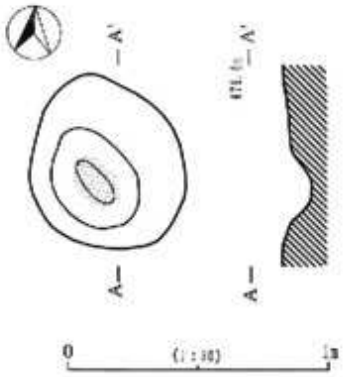
・住居址平面図→21ページ　　・遺物実測図→154ページ
・住居址写真→368ページ　　・遺物写真→407ページ

Y4号住居址



第15図　Y4号住居址実測図

Y4号住居址は、調査区の南西、ツ・テー37・38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。本住居址は、南側の壁付近以外の全面を撹乱により破壊される。



第16図　Ｙ４号住居址炉実測図

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北482cm・東西419cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、東へ４°ずれる。床の面積は推定で18.66㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は１層のみが確認され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは０～6.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は破壊を免れた南壁の際を中心に認められた。

ピットは主柱穴３個（P_1～P_3）と入口施設に伴う掘り込みと考えられるピット（P_4・P_5）２個の５個が検出された。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は69cm×59cm・深さ11cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に３mm以下で確認されたが、図示は控えた。

遺物はきわめて少なく、壷や甕・坏といった土器の破片や手捏（てづくね）状の小型高坏（たかつき）などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→22ページ　　・遺物実測図→154ページ
・住居址写真→368・369ページ　　・遺物写真→407ページ

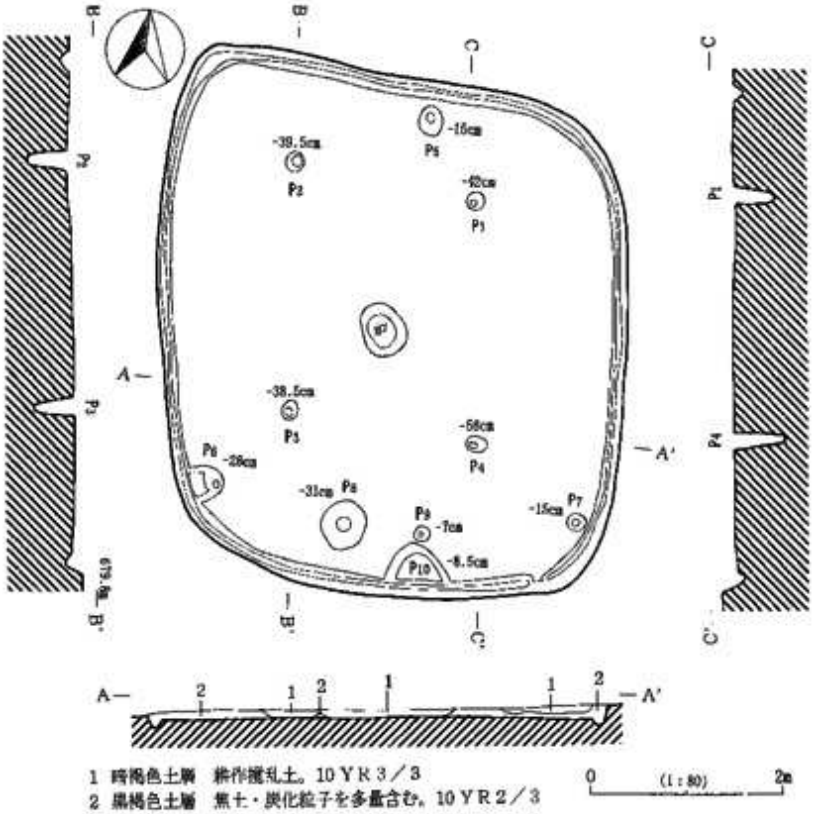
Ｙ５号住居址

Ｙ５号住居址は、調査区の南西、ツ～ト－36・37グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。

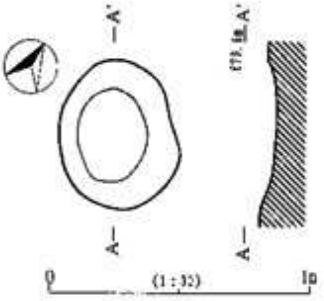
平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北535cm・東西492cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ２°ずれる。床の面積は20.88㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は２層に分割され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは１～18.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は壁の際のほぼ全周に認められた。

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）と補助柱穴３個（P_5～P_7）、入口施設に伴う掘り込みと考えられるピット（P_9・P_{10}）２個、貯蔵穴と考えられるピット（P_8）の計10個が検出された。この内P_5は



第17図　Y5号住居址実測図



第18図　Y5号住居址炉実測図

棟持柱穴と考えられる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は57cm×44cm・深さ7cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に3mm以下で確認されたが、図示は控えた。

本住居址は全体に焦土と炭化材の小片が認められ、床面も部分的に焼けていた。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壺や甕・坏といった土器、砥石などが出土した。

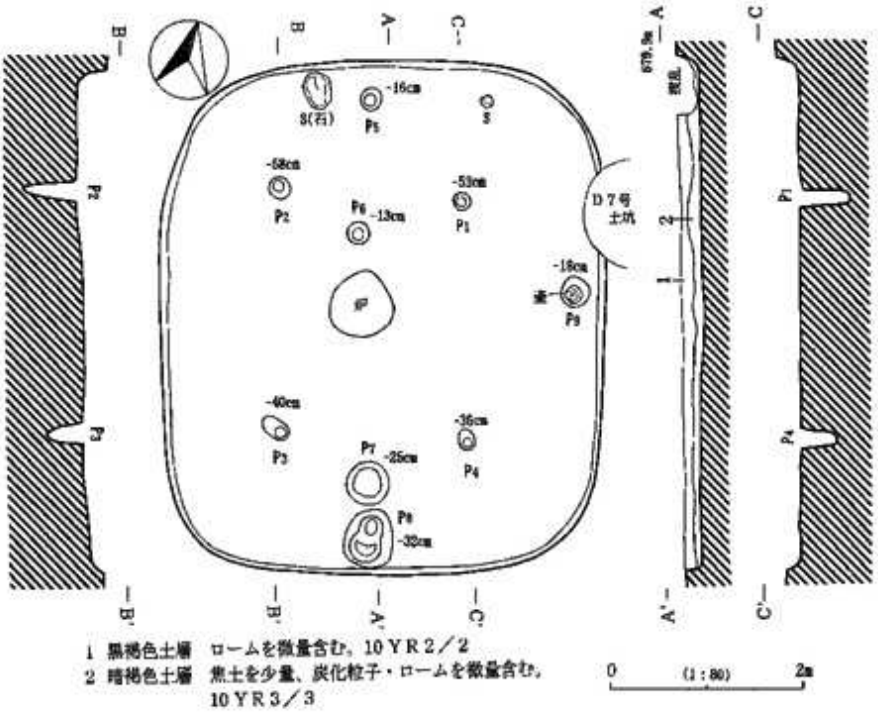
以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられ

る。

・住居址平面図→24ページ　　・遺物実測図→154・155ページ

・住居址写真→369・370ページ　　・遺物写真→407ページ

Ｙ６号住居址



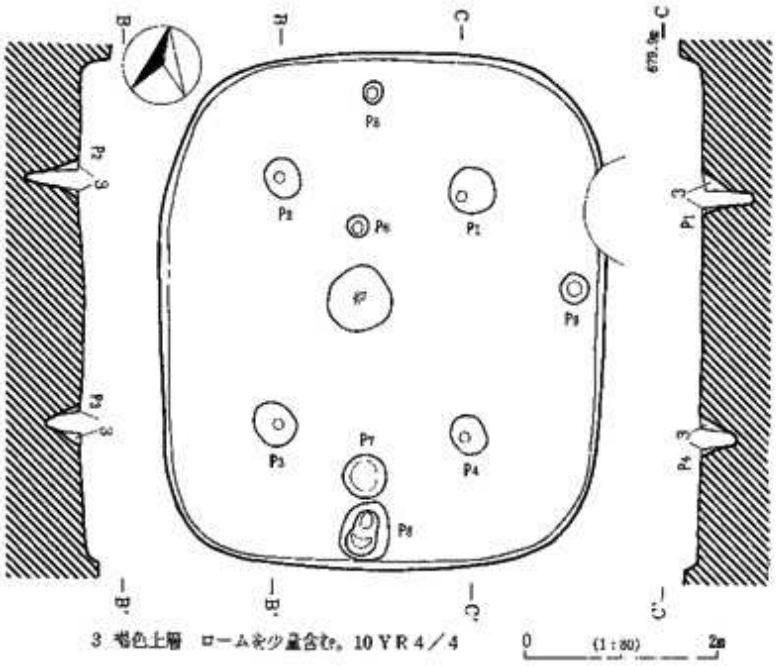
第19図　Ｙ６号住居址実測図

Ｙ６号住居址は、調査区の南西、ソ・ター38・39グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。本住居址は西壁の一部をＤ７号土坑により破壊される。

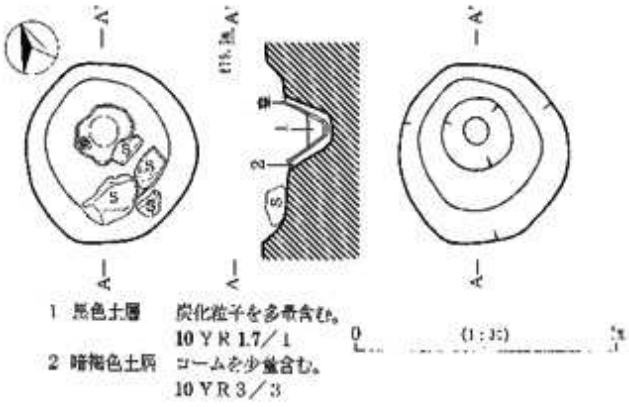
平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北532cm・東西460cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ６°ずれる。床の面積は21.02㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は２層に分割され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは13～31cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴4個（P_1〜P_4）と補助柱穴2個（P_5・P_6）、入口施設に伴う掘り込みあるいは貯蔵穴と考えられるピット（P_7・P_8）2個、その他（P_9）の計9個が検出された。この内P_5は棟持



第20図　Y 6 号住居址実測図（ピット完掘）



第21図　Y 6 号住居址炉実測図

柱穴と考えられる。またP_5にはほぼ完形の深鉢が正位で埋められていた。

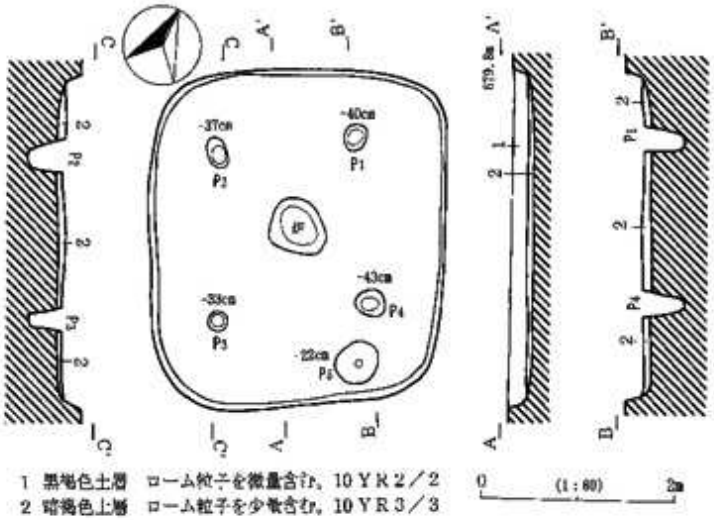
炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、中央に甕の下半部を埋め込み、一辺に石（安山岩）を設けていた。規模は70cm×66cm・深さ22.5cmを測る。焦土および炭化層は甕の底部に6cm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器や、扁平片刃石斧・丸鑿形（さるのみ）片刃石斧・石鏃・擦り石・砥石・石鉆などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→25・26ページ　　・遺物実測図→156～164ページ
・住居址写真→370ページ　　・遺物写真→407～412ページ

Ｙ７号住居址

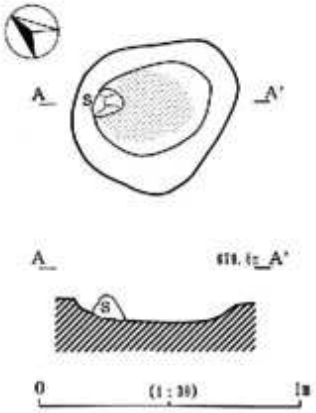


第22図　Ｙ７号住居址実測図

Ｙ７号住居址は、調査区の北西、カ・キ－37・38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北347cm・東西308cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ21°ずれる。床の面積は8.94㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は１層のみが確認された。床面はおおむね平坦で貼床（住居址覆土第２層）が全面に認められた。検出面から床までの壁の高さは12～20cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。



第23図　Ｙ７号住居址炉実測図

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）と貯蔵穴と考えられるピット（P_5）の計５個が検出された。

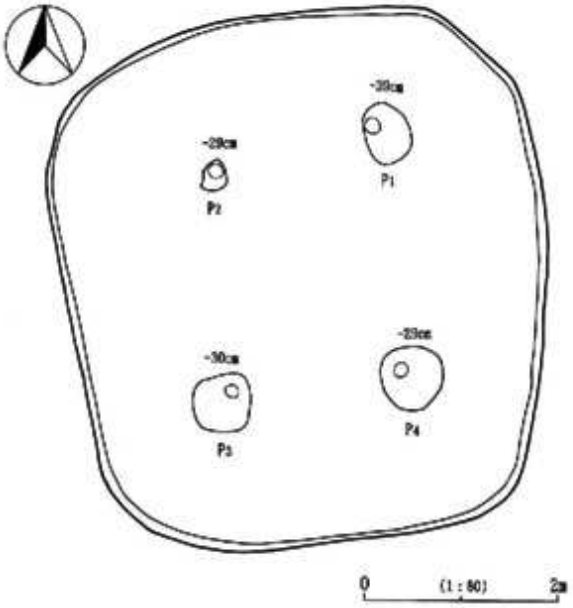
炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、北西隅に石（輝石安山岩）を設置していた。規模は66cm×57cm・深さ９cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に３mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器などが出土した。

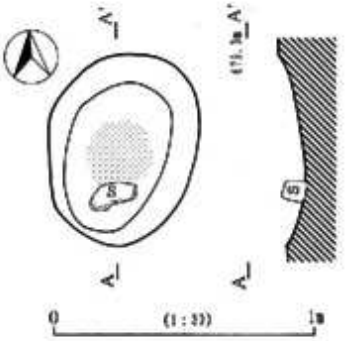
以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→27・28ページ
・住居址写真→371・373ページ
・遺物実測図→165ページ
・遺物写真→412・413ページ

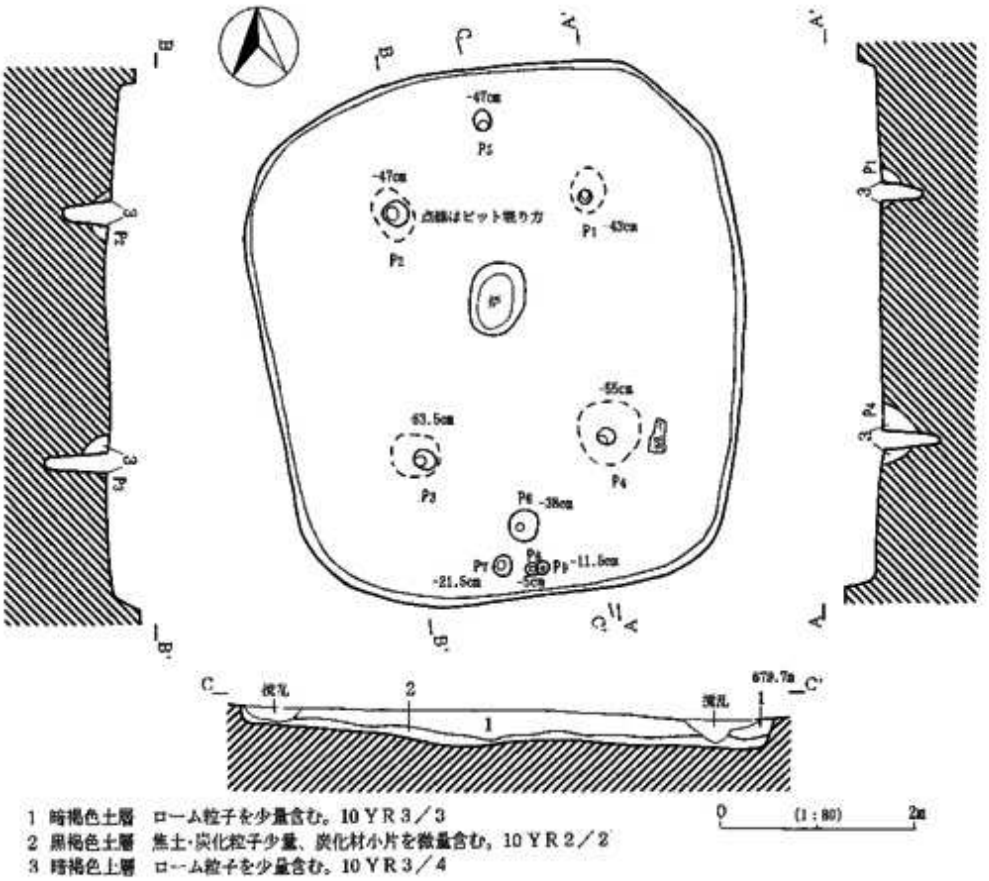
Ｙ８号住居址



第24図　Ｙ８号住居址旧ピット実測図



第25図　Ｙ８号住居址炉実測図



第26図　Ｙ８号住居址実測図

Ｙ８号住居址は、調査区の南西、コ～シ－38・39グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北547cm・東西496cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ８°ずれる。床の面積は22.83㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は２層に分割され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは12～33cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）と補助柱穴（P_5）、入口施設に伴う掘り込みあるいは貯蔵穴と

考えられるピット（P_6・P_7・P_8・P_9）4個の計9個が検出された。この内P_5は棟持柱穴と考えられる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に石（安山岩）を設けていた。規模は73cm×58cm・深さ11.5cmを測る。焦土および炭化層は甕の底部に3mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器や、砥石・扁平片刃石斧・石鏃・土製スプーン・土製円板などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→28・29ページ　・遺物実測図→166・167・169・170ページ
・住居址写真→372・373ページ　・遺物写真→413・414・415ページ

Y10号住居址

第27図　Y10号住居址炉実測図

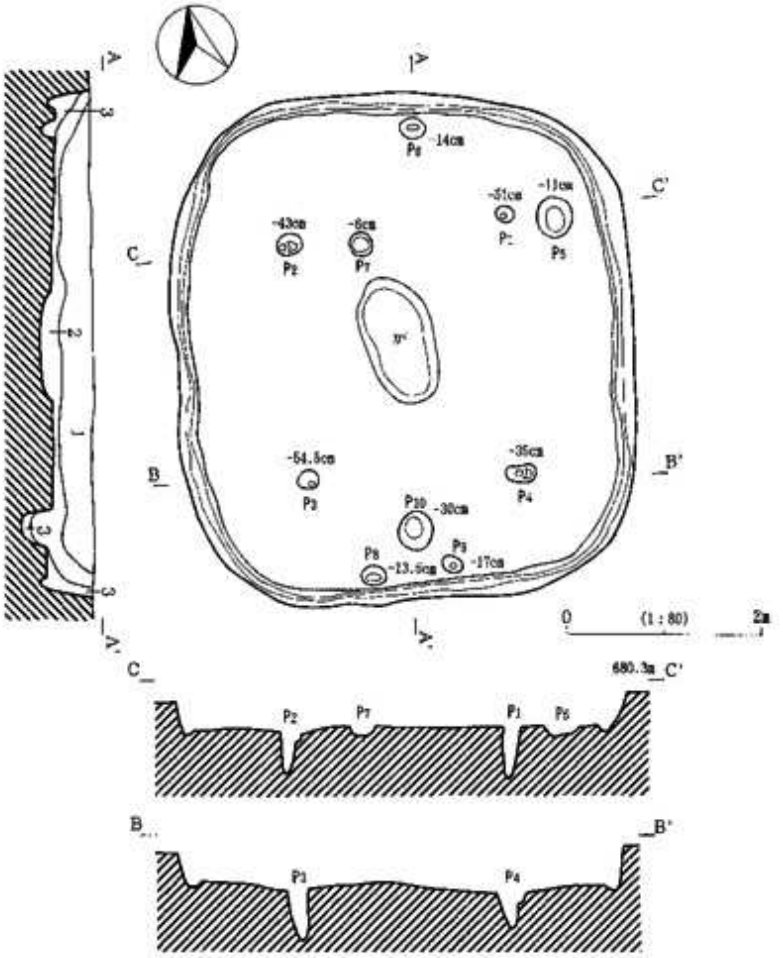
Y10号住居址は、調査区の南西、エ・オ－29～31グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北520cm・東西462cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、東へ2°ずれる。床の面積は18.88㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は3層に分割され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは29～56cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は壁の際に全周にわたって確認された。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴3個（P_5～P_7）、入口施設に伴う掘り込みあるいは貯蔵穴と考えられるピット（P_8・P_9・P_{10}）3個の計10個が検出された。この内P_6は棟持柱穴と考えられる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に石（安山岩）3個を設けていた。規模は135cm×70cm・深さ9.5cmを測る。焦土および炭化層は甕の底部に6.5cm以下で確認さ



1 極暗褐色土層　パミス極小粒・ローム粒子・炭化材微小片を微量含む。7.5 Y R 2/3
2 黒色土層　焦土・炭化粒子・炭化材小片を少量含む。7.5 Y R 2/1
3 褐色土層　ローム粒子を多量含む。10 Y R 4/4

第28図　Y10号住居址実測図

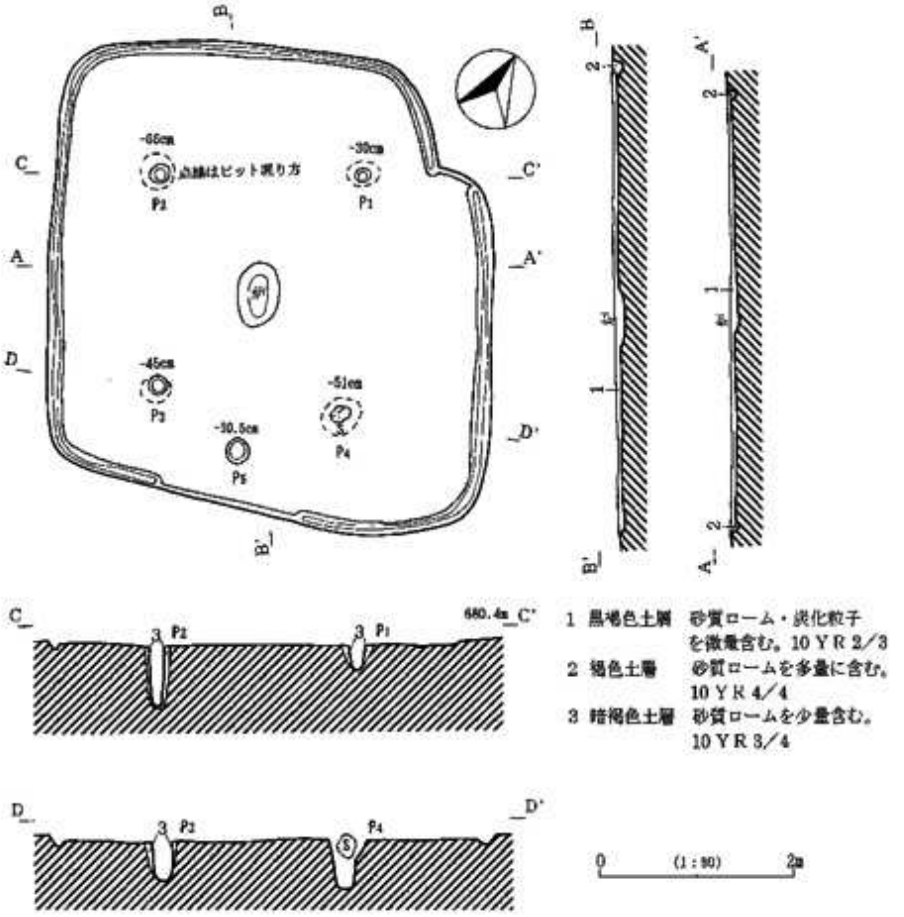
れた。

遺物は、壷や甕・坏といった土器や、砥石・磨製石鏃・打製石鏃などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→30・31ページ　・遺物実測図→173～181ページ
・住居址写真→372・373ページ　・遺物写真→416～421ページ

Y11号住居址



第29図 Y11号住居址実測図

Y11号住居址は、調査区の南西、イ～エ－25・26グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（黄褐色砂質ローム）上面において検出された。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、西側３／４が張り出していた。規模は南北476cm・東西460cm（張り出し部を含む）を測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ23°ずれる。床の面積は17.74㎡を測る。

住居址の検出面から床までの上層は１層のみが確認され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは１～８cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は張り出し部の一部と南壁の中央部を除き、壁の際に

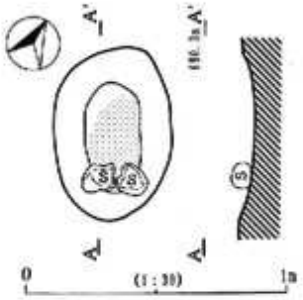
ほぼ全周にわたり確認された。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、入口施設に伴う掘り込みあるいは貯蔵穴と考えられるピット（P_5）の計5個が検出された。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に石（安山岩）2個を設けていた。規模は66cm×45cm・深さ6cmを測る。焦土および炭化層は3mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器などが出土した。

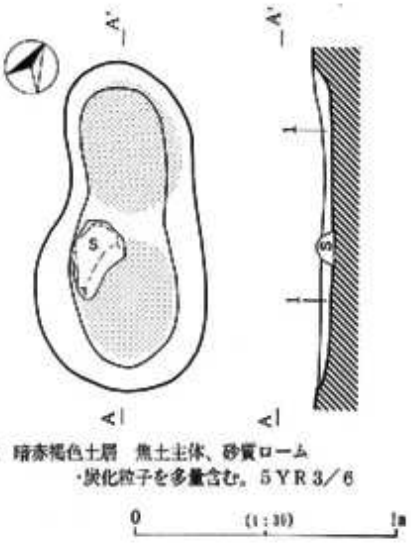
以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。



第30図　Y11号住居址炉実測図

・住居址平面図→32・33ページ
・住居址写真→373ページ
・遺物実測図→181ページ
・遺物写真→422ページ

Y12号住居址



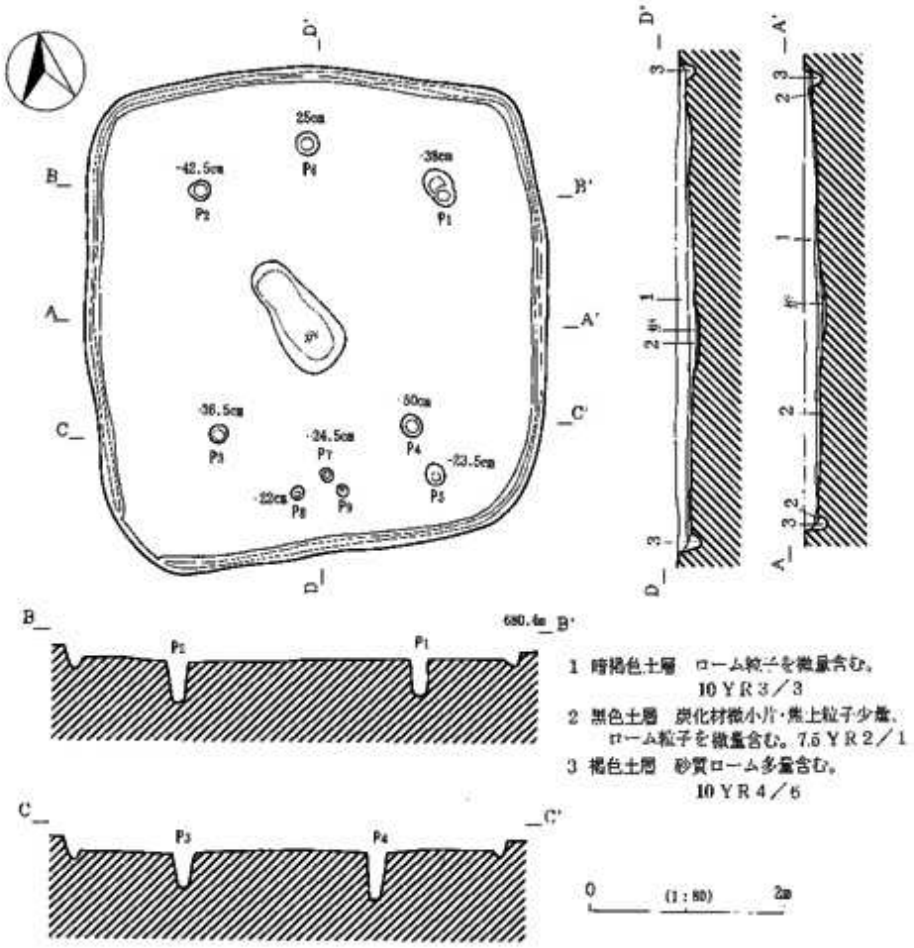
第31図　Y12号住居址炉実測図

Y12号住居址は、調査区の北側中央、エ・オ－25・26グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北500cm・東西476cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、東へ4.5°ずれる。床の面積は19.33㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は3層に分割され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは3.5～21cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は南西の隅で途切れる他は、ほぼ壁の際の全周にわたり確認された。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴2個（P_5・P_6）、入口施設に伴う掘り込みと考えら



第32図　Y12号住居址実測図

れるピット（P_7・P_8・P_9）3個の計9個が検出された。この内P_5は棟持柱穴と考えられる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は瓢箪形で、一辺に石（安山岩）を設けていた。規模は125cm×65cm・深さ8.5cmを測る。焦土を主体とする層は炉の全面に6cm以下で確認された。また焦土・炭化層は炉の底を中心に3mm以下で確認された。

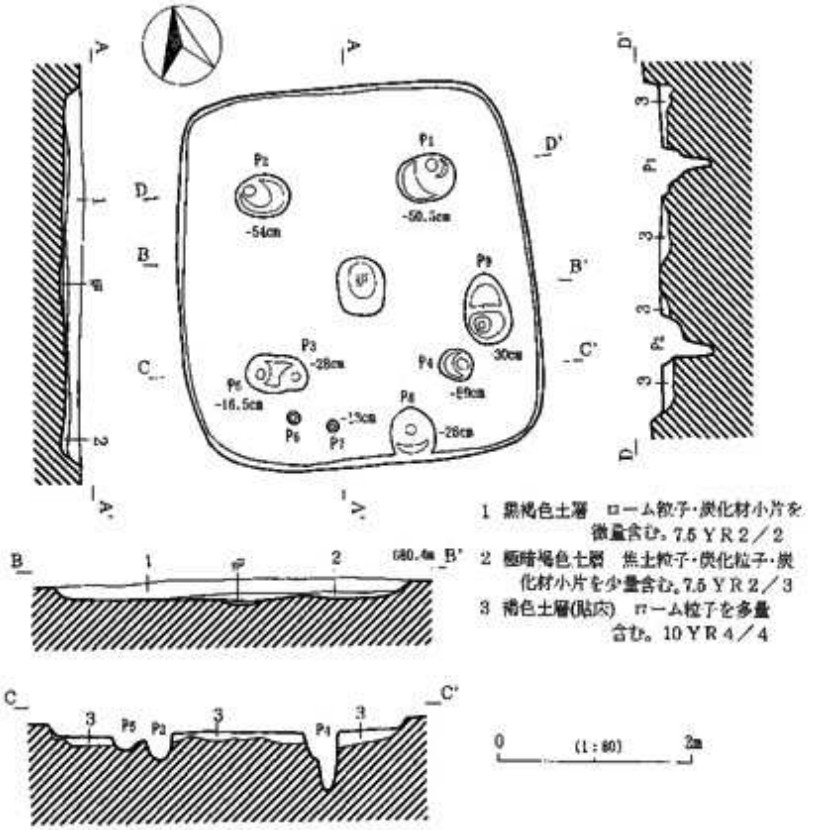
住居址は全体に焦土と炭化材の小片が認められ（覆土第2層）、床面もかなり焼けていた。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壺や甕・坏といった土器や、砥石などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→33・34ページ
・住居址写真→374ページ
・遺物実測図→182～185ページ
・遺物写真→422～424ページ

Y13号住居址

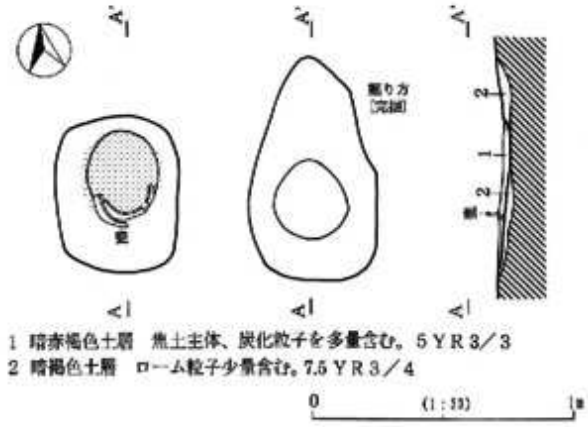


第33図 Y13号住居址実測図

Y13号住居址は、調査区の北側中央、オ・カ－24・25グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北395cm・東西366cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、東へ1.5°ずれる。床の面積は12.48㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床面はおおむね平坦で、貼床（覆土第3



第34図　Y13号住居址炉実測図

層）がほぼ全面にわたり確認された。検出面から床までの壁の高さは8.5～16cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴1個（P_5）、入口施設に伴う掘り込みと考えられるピット2個（P_6・P_7）、貯蔵穴（P_8）の計9個が検出された。

炉は住居址の中央で検出された。

平面の形態は楕円形で、一辺に甕を設けていた。規模は59cm×47cm・深さ6cmを測る。焦土を主体とする層は炉の全面に3cm以下で確認された。また焦土・炭化層は炉の底を中心に3mm以下で確認された。炉の掘り方の規模は85cm×49cm・深さ6.5cmを測り、炉の覆土第2層の暗褐色土により構築されていた。

住居址は全体に焦土と炭化材の小片が認められ、床面も部分的に焼けていた。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壺や甕・坏といった土器や、横刃型石器・石鏃などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

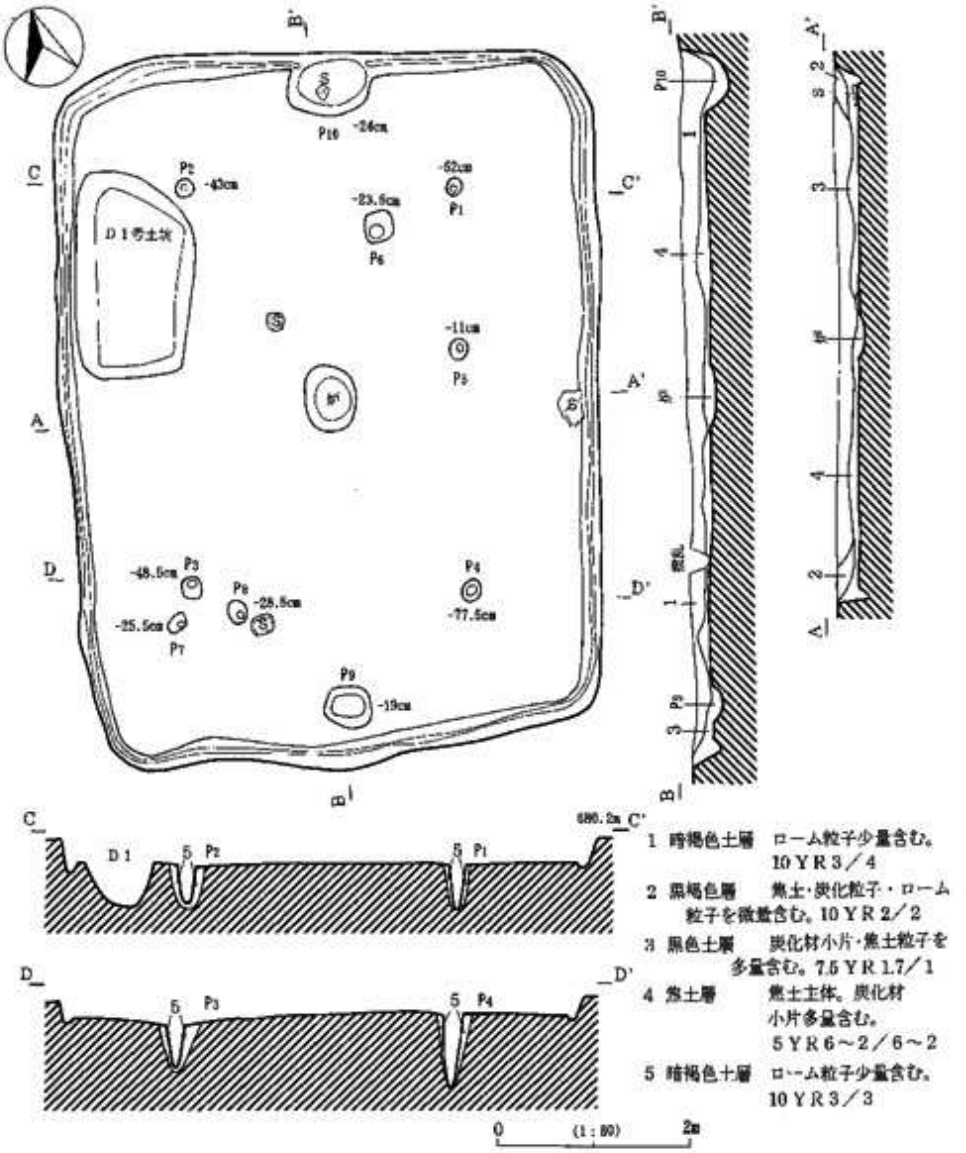
・住居址平面図→35・36ページ　　・遺物実測図→186・187ページ
・住居址写真→374・375ページ　　・遺物写真→424・425ページ

Y14号住居址

Y14号住居址は、調査区の北側中央、カ～クー28～30グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形で、規模は南北736cm・東西555cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、東へ9.5°ずれる。床の面積は33.83㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は4層に分割され、床面はおおむね平坦で固くしまっていた。検出面から床までの壁の高さは19～30.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は、北側中央のP_{10}部分を除く壁の際に全周にわたり確

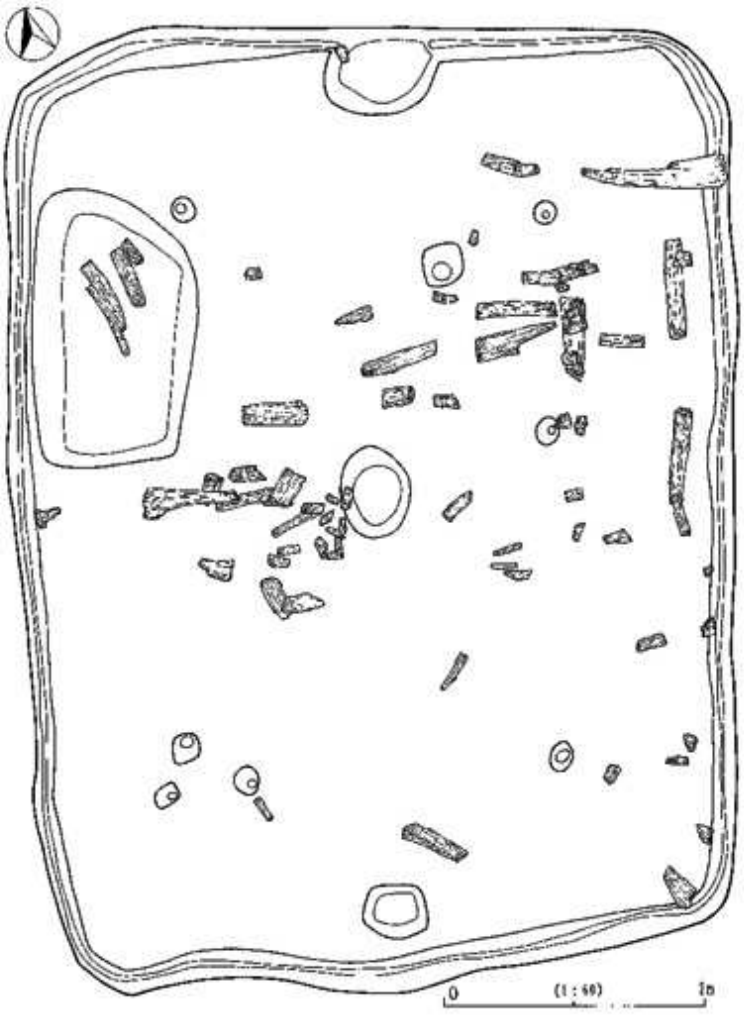


第35図　Y14号住居址実測図

認された。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴2個（P_5・P_6）、入口施設に伴う掘り込みと考えられるピット（P_9）、貯蔵穴（P_{10}）、その他2個（P_7・P_8）の計10個が検出された。

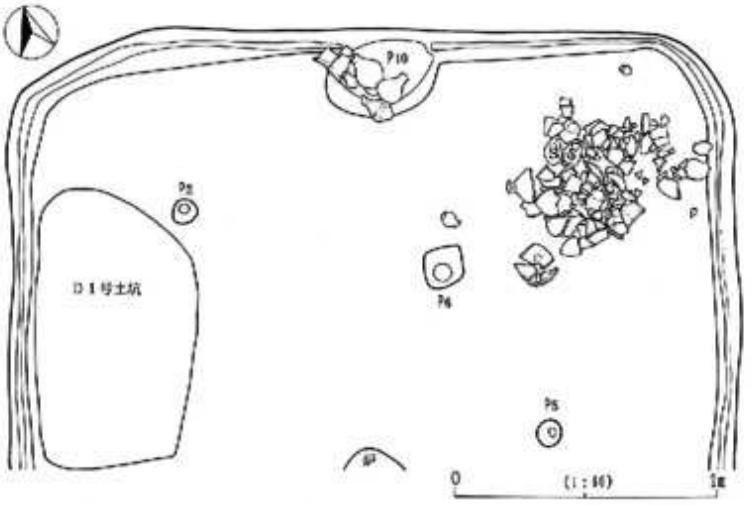
炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は68cm×54cm・深さ5cmを測る。



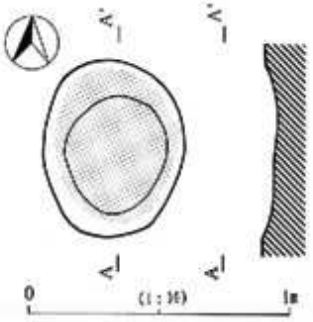
第36図　Y14号住居址炭化材出土状況実測図

また焦土・炭化層は炉の底を中心に3㎝以下で確認された。

住居址は全体に焦土と炭化材の小片が認められ、焼け残った炭化材が多量に検出された。床面はかなり焼けていた。本住居址は破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。またD1号土坑は、掘り込んだ土砂が住居址の床直上に堆積している点、掘り込んだ土砂の上部が焼けている点、さらには掘り込んだ土砂の上で炭化材や炭化層が検出されている点などから、住居を焼却する直前に掘り込んだと考えられる。さらにD1号土坑は、上記の点や覆土・形態・住居址内という特殊性などから、住居址内墓坑（ぼこう）と考えられる。



第37図　Y14号住居址遺物出土状況実測図



第38図　Y14号住居址炉実測図

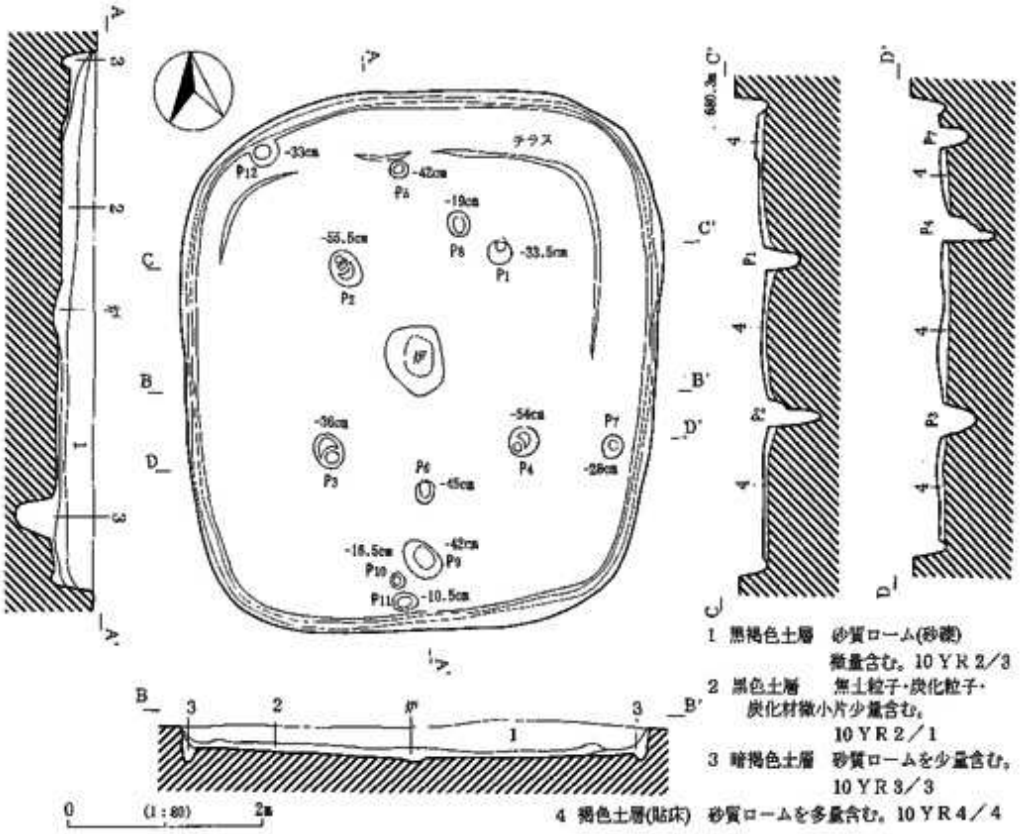
遺物は、主として住居址北東隅と北側の貯蔵穴（P_{10}）より集中して出土した。また北東隅で出土した土器群は、出土状況などから棚状のものから住居焼却時に落下した可能性が高い。遺物は壺や甕・坏といった土器や、砥石・扁平片刃石斧・石鏃・紡錘車などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

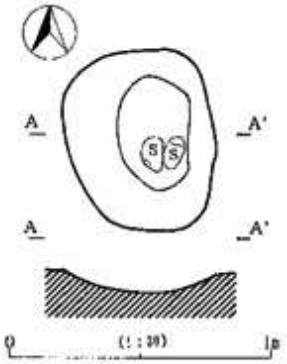
・住居址平面図→37・38・39ページ
・住居址写真→375ページ
・遺物実測図→187～200ページ
・遺物写真→424～435ページ

Y15号住居址

Y15号住居址は、調査区の北側中央、ア～ウ－28・29グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。



第39図 Y15号住居址実測図



第40図 Y15号住居址炉実測図

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形で、規模は南北553cm・東西488cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ5°ずれる。床の面積は21.36㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は3層に分割され、床面はおおむね平坦で固くしまっていた。貼床（覆土第4層）は住居址床面の全面に認められた。検出面から床までの壁の高さは23～40.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は壁の際の全周にわたり確認された。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴5個（P_5～P_8・

P_{12})、入口施設に伴う掘り込みあるいは貯蔵穴と考えられるピット（P_9～P_{11}）３個の計12個が検出された。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は不整楕円形で、一辺に石（安山岩）２個を設けていた。規模は69cm×57cm・深さ8.5cmを測る。また焦土・炭化層は炉の底を中心に３mm以下で確認された。

住居址は全体に焦土と炭化材の小片が認められ、床面もかなり焼けていた。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

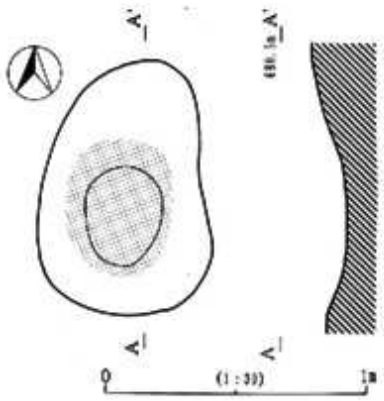
遺物は、壺や甕・坏といった土器などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→40ページ　　・遺物実測図→200～202ページ
・住居址写真→375・377ページ　　・遺物写真→435～437ページ

Y16号住居址

Y16号住居址は、調査区の西側、キ・ク－15・16グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。



第41図　Y16号住居址炉実測図

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形で、規模は南北528cm・東西455cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ10°ずれる。床の面積は20.63㎡を測る。

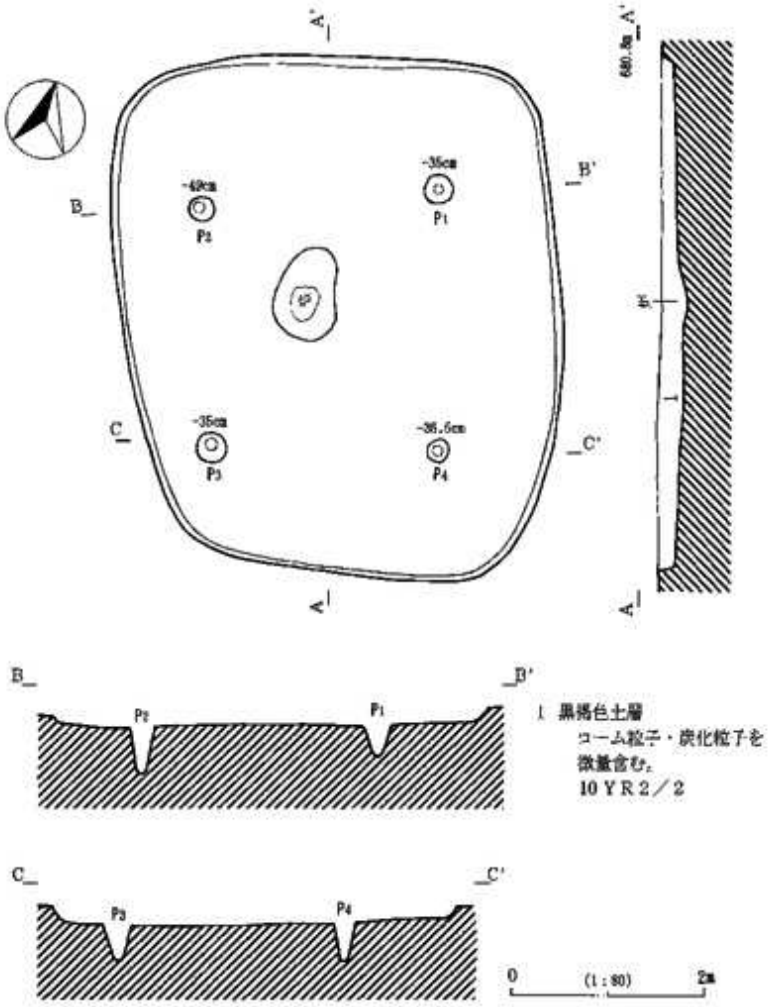
住居址の検出面から床までの土層は１層のみが確認され、床面はおおむね平坦で固くしまっていた。検出面から床までの壁の高さは５～15cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）が検出された。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は不整楕円形で、規模は97cm×65cm・深さ13.5cmを測る。また焦土・炭化層は炉の底を中心に３mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器や台石などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

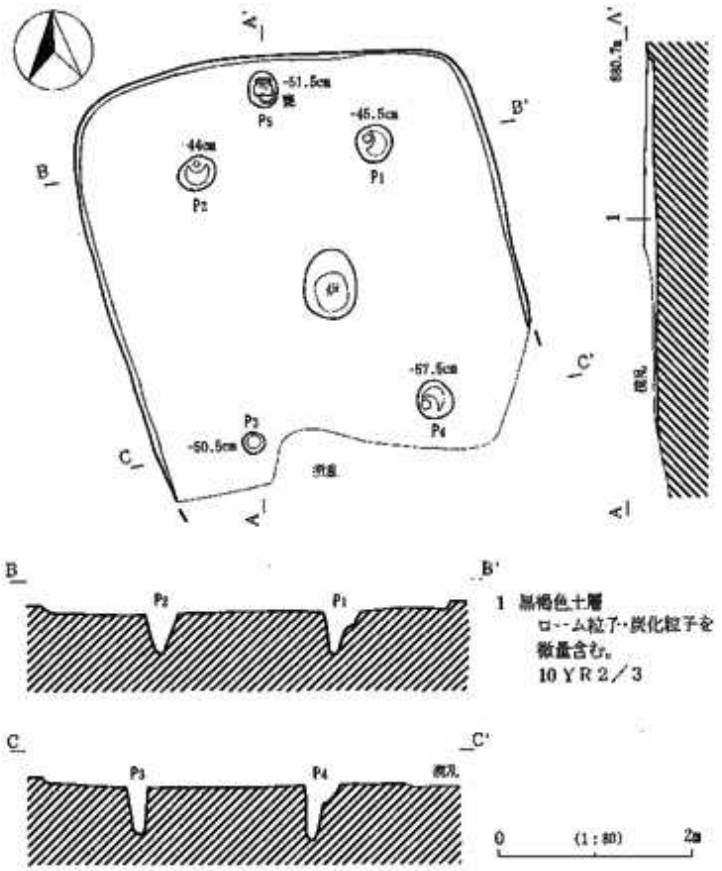


第42図　Y16号住居址実測図

・住居址平面図→41・42ページ
・住居址写真→376ページ
・遺物実測図→203～205ページ
・遺物写真→437・438ページ

Y17号住居址

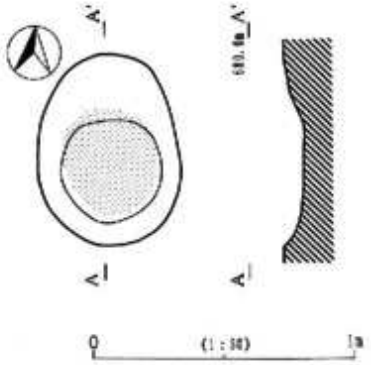
Y17号住居址は、調査区の西側、カ・キ－14・15グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は南側を土砂採取により破壊される。



第43図　Y17号住居址実測図

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形と推定され、規模は南北421cm(現存値)・東西425cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ15°ずれる。現存する床の面積は16.02㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は1層のみが確認され、床面はおおむね平坦で固くしまっていた。検出面から床までの壁の高さは0～9cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。



第44図　Y17号住居址炉実測図

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）とその他1個（P_5）の計5個が検出された。この内P_5は、内部に底部を欠いた完形の甕が2個体直列に埋められていた。上部の甕は大きく傾いていたが内部はほとんど空洞であり、下部の甕は底部付近に土砂があるのみでやはり空洞であった。早い時期に上部の甕が傾き、下部の甕の蓋をし、土砂が流入しなかったと考えられる。つまり住居使用時には両方ともに空でピットに据えられていたと推定できる。さらにはこのピットは棟持柱を据えた穴と考えると、棟持柱に甕を貫通させていた（そのために甕の底部を打ち欠いた）ことになり、柱が土中で腐ったために甕の内部が空洞になったとも推定できる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に石（安山岩）2個を設けていた。規模は73.5cm×53cm・深さ7.5cmを測る。また焦土・炭化層は炉の底を中心に3mm以下で確認された。

遺物は、壷や甕・坏といった土器や石剣未製品などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

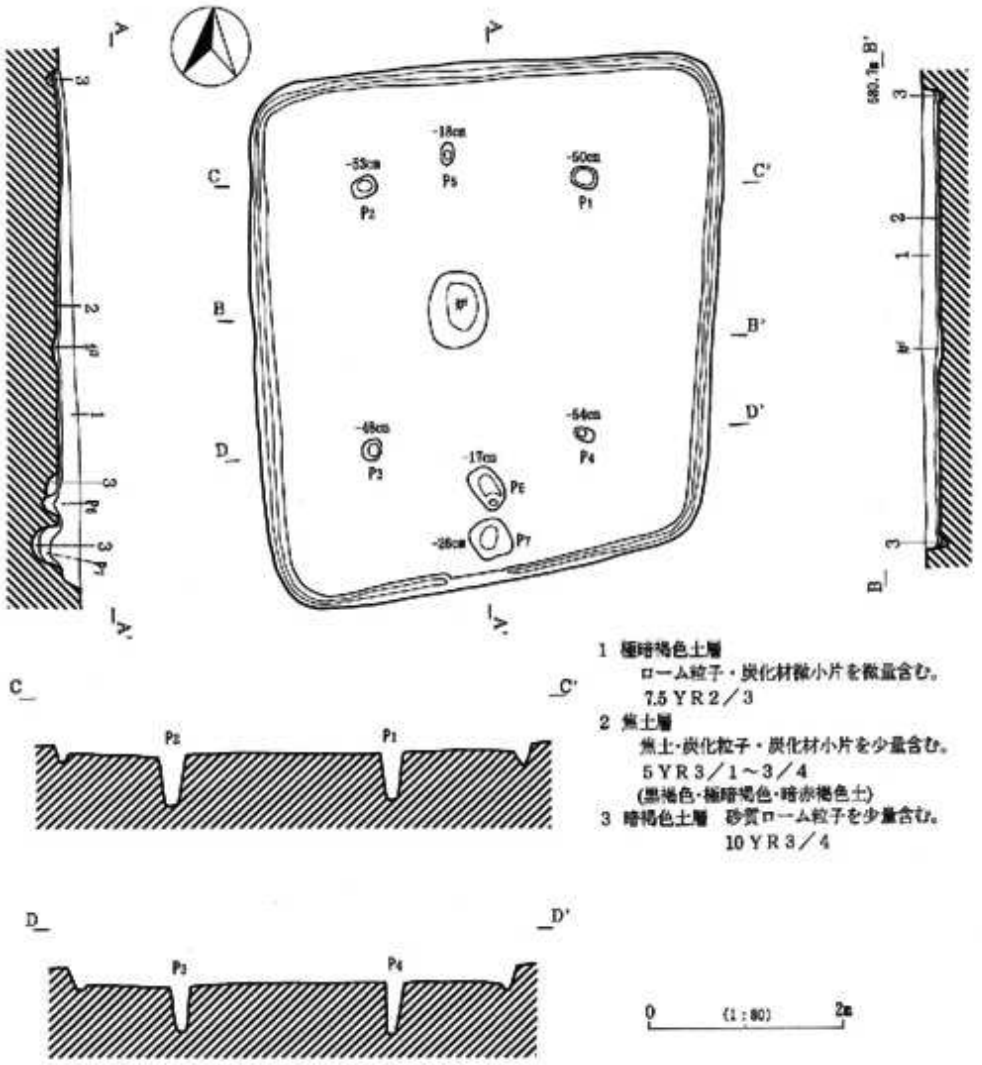
・住居址平面図→43・44ページ　　・遺物実測図→205・206ページ
・住居址写真→376・377ページ　　・遺物写真→438・439ページ

Y18号住居址

Y18号住居址は、調査区の中央やや西寄り、キ～ケ－20・21グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形で、規模は南北534cm・東西477cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ20°ずれる。床の面積は21.24㎡を測る。

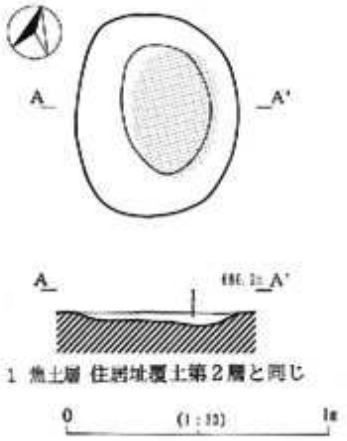
住居址の検出面から床までの土層は3層に分割され、床面はおおむね平坦で固くしまっていた。検出面から床までの壁の高さは3～22cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は南壁の一部で途切れる他は壁の際の全周にわたり確認された。



第45図 Y18号住居址実測図

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴1個（P_5）、入口施設に伴うピット（P_6）、貯蔵穴と考えられるピット（P_7）の計7個が検出された。この内P_5は棟持柱穴と考えられる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は72cm×61cm・深さ5cmを測る。炉の土層は1層のみが確認された。この第1層は住居址第2層と同一の層である。また焦土・炭化層は炉の底を中心に3mm以下で確認された。



第46図　Y18号住居址炉実測図

住居址は全体に焦土と炭化材の小片が認められ、床面もかなり焼けていた。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壺や甕・坏といった土器、砥石・擦り石・敲き石・凹み石、ミニチュア土器などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→45・46ページ
・遺物実測図→207～210ページ
・住居址写真→377ページ
・遺物写真→438～443ページ

Y19号住居址

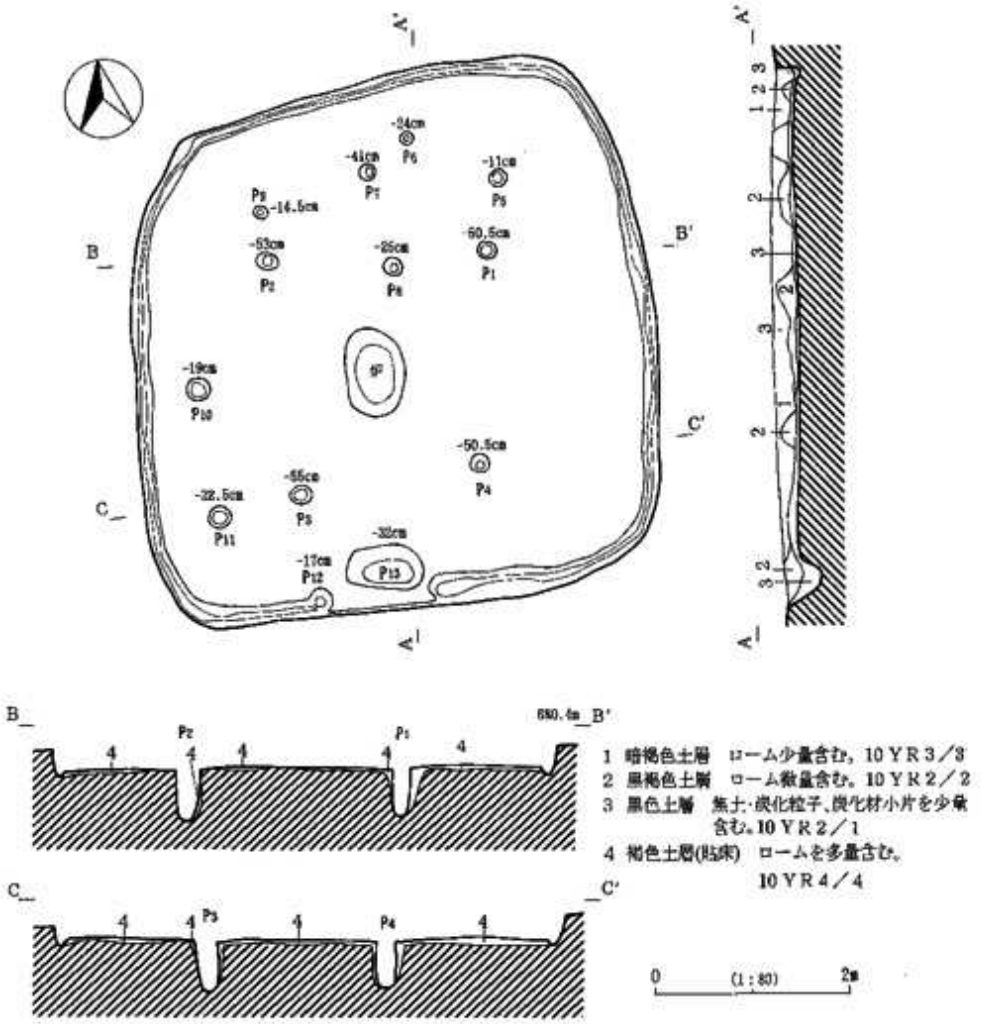
第47図　Y19号住居址炉実測図

Y19号住居址は、調査区の中央やや北寄り、カ・キ－26～28グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址はY37号住居址を破壊する。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北545cm・東西537cmを測る。住居址の向きはほぼ真北を指す。床の面積は23.9㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は3層に分割され、床面はおおむね平坦で固くしまっていた。貼床（覆土第4層）は住居址床面のほぼ全面に認められた。検出面から床までの壁の高さは9～32.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は南壁の一部で途切れる他は壁の際の全周にわたり確認された。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴7個（P_5～P_{11}）、入口施設に伴うと考えられるピット（P_{12}）、貯蔵穴（P_{13}）の計13個が検出された。



第48図 Y19号住居址実測図

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に安山岩を設けていた。規模は91cm×60cm・深さ6.5cmを測る。炉の土層は1層のみが確認された。確認された層は焦土層である。

住居址は全体に焦土と炭化材の小片が認められ、床面もかなり焼けていた。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壷や甕・坏といった土器、石鏃・扁平片刃石斧・擦り石、鉄石英原石、土製スプーン、

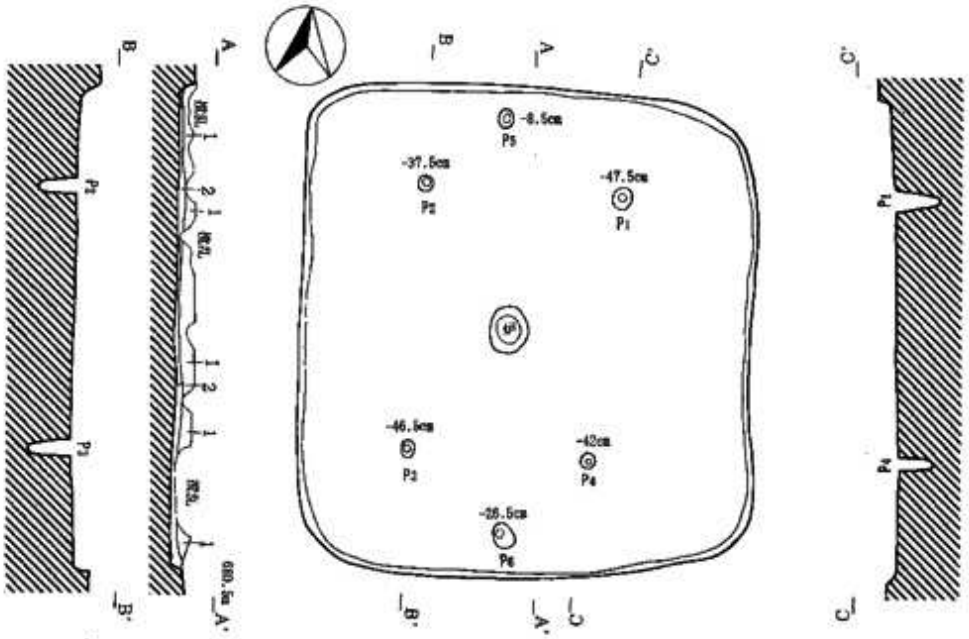
ミニチュア土器などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

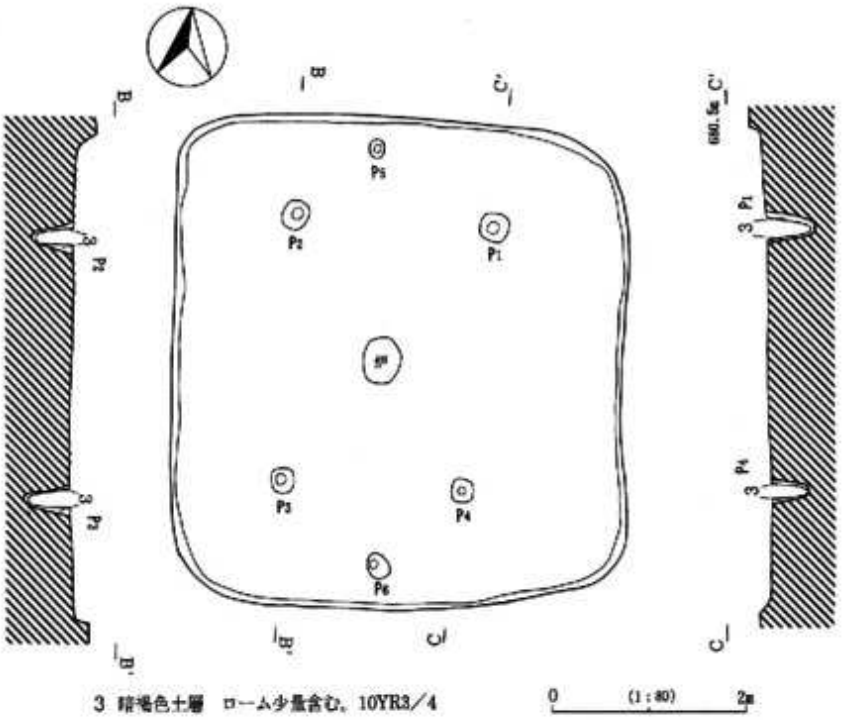
・住居址平面図→46・47ページ　　・遺物実測図→211～219ページ
・住居址写真→377・378ページ　　・遺物写真→443～449ページ

Y20号住居址

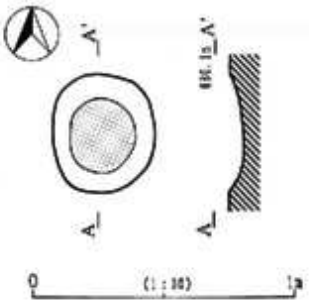
Y20号住居址は、調査区の中央やや東寄り、カ・キ－22～23グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。



第49図　Y20号住居址実測図



第50図　Y20号住居址実測図（ピット完掘）



第51図　Y20号住居址炉実測図

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北508cm・東西465cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、西へ5°ずれる。床の面積は20.88㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床面はおおむね平坦で固くしまっていた。検出面から床までの壁の高さは9.5～25cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴2個（P_5・P_6）の計6個が検出された。この内P_5は棟持柱穴と考えられる。またP_6は棟持柱穴、あるいは入口施設に伴うピットと考えられる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に安山岩を設けていた。規模は45.5cm×39cm・深さ5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に4mm以下で確認された。

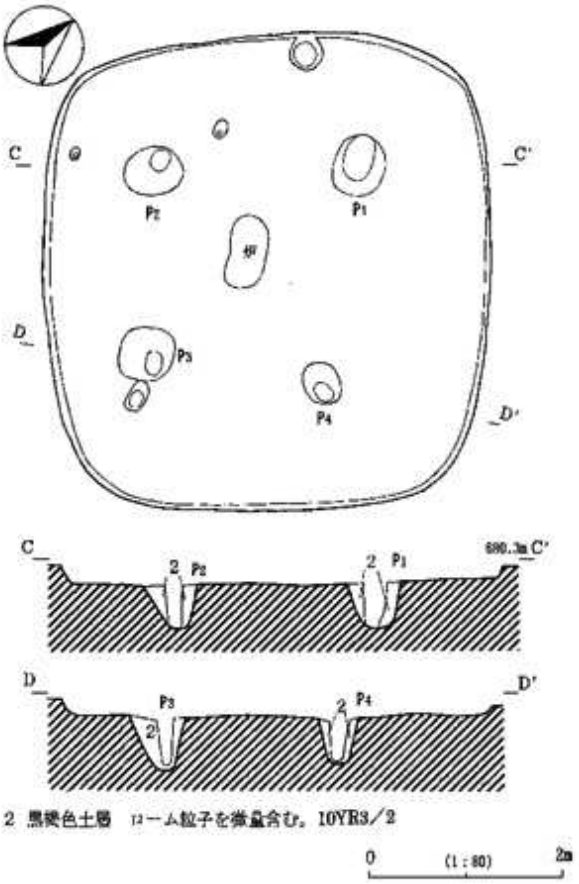
住居址は全体に焦土と炭化材の小片が認められ、床面もかなり焼けていた。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壷や甕・坏といった土器、太型蛤刃石斧などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

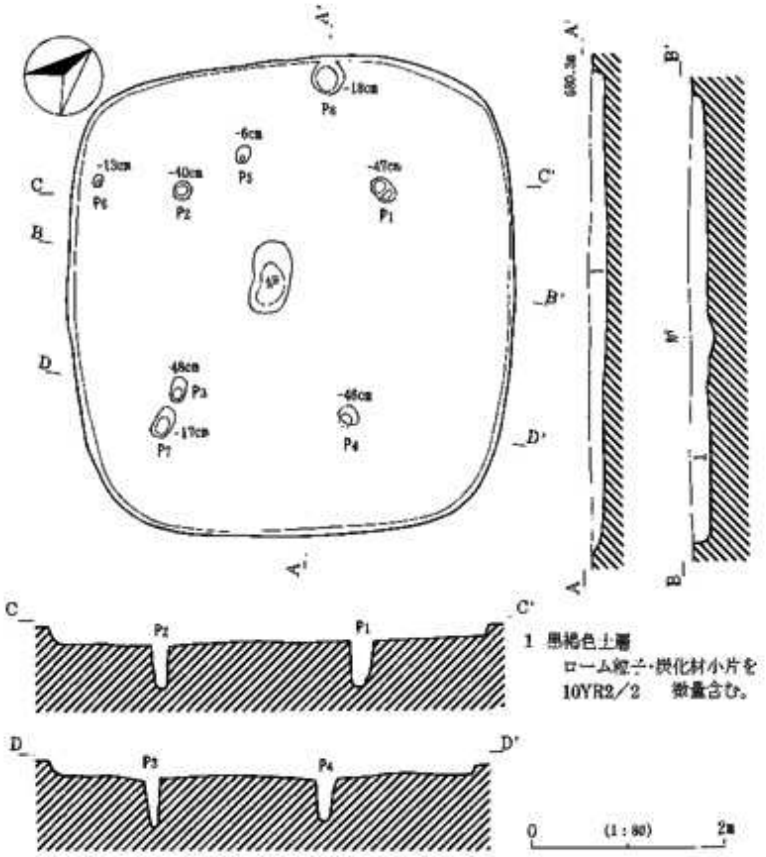
・住居址平面図→48・49ページ　　・遺物実測図→220・223・224ページ
・住居址写真→378・379ページ　　・遺物写真→449・450ページ

Y21号住居址



第32図　Y21号住居址実測図（ピット完掘）

Y21号住居址は、調査区の中央やや東寄り、キ・ク－22・23グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

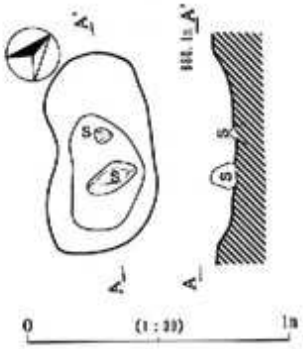


第53図 Y21号住居址実測図

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北488cm・東西461cmを測る。住居址の向きは北西を指し、北より西へ50°ずれる。床の面積は18.92㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は1層のみが確認された。検出面から床までの壁の高さは7～18cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴3個（P_5～P_7）、貯蔵穴（P_8）の計8個が検出された。



第54図　Y21号住居址炉実測図

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は不整楕円形（瓢箪形）で、一辺に安山岩を設けていた。規模は77cm×41cm・深さ6.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器、磨製石鏃などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→50・51・53ページ　・遺物実測図→225・226ページ
・住居址写真→378・379ページ　・遺物写真→451ページ

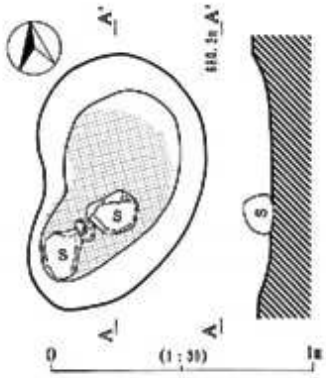
Y22号住居址

Y22号住居址は、調査区の中央、キ・ク－24・25グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北409cm・東西373cmを測る。住居址の向きは北西を指し、北より西へ40°ずれる。床の面積は12.73㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は1層のみが確認された。検出面から床までの壁の高さは10.5～24cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

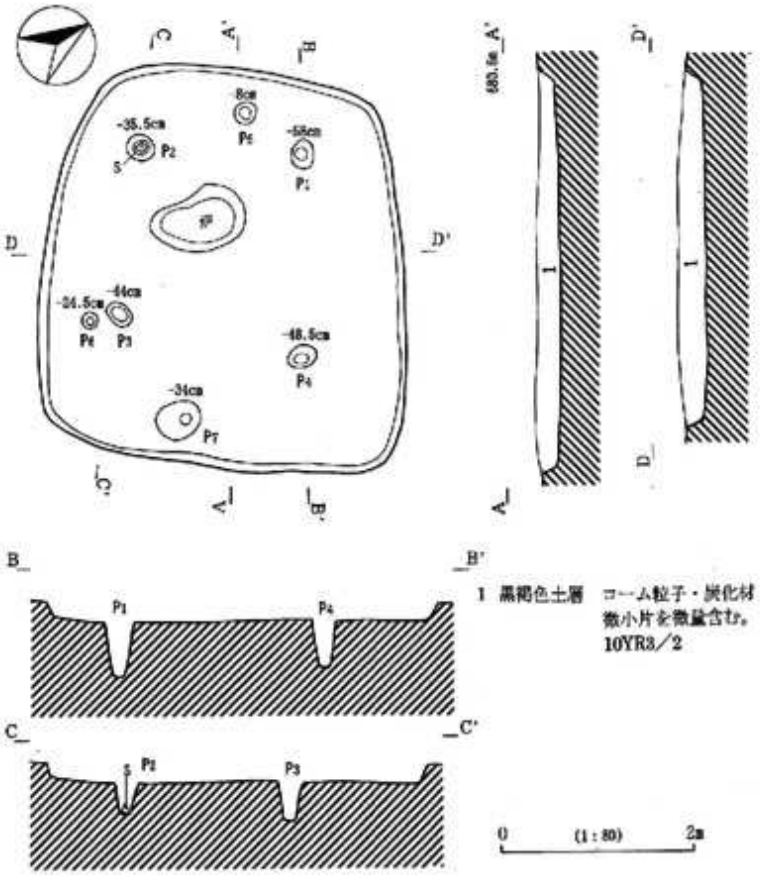
ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴2個（P_5・P_6）、貯蔵穴（P_7）の計7個が検出された。この内P5は棟持柱穴と考えられる。



第55図　Y22号住居址炉実測図

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は不整楕円形（瓢箪形）で、一辺に安山岩3個を設けていた。規模は101cm×66cm・深さ7cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器、横刃型石器・石鏃・砥石・擦り石などが出土した。

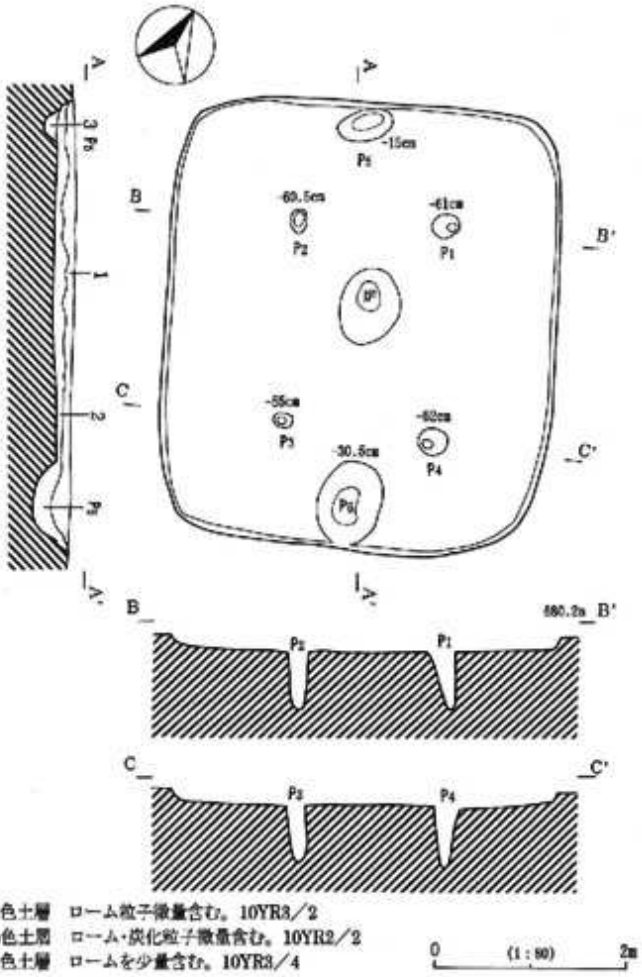


第56図　Y22号住居址実測図

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→52・53ページ
・住居址写真→380ページ
・遺物実測図→226～229ページ
・遺物写真→451・452ページ

Y23号住居址

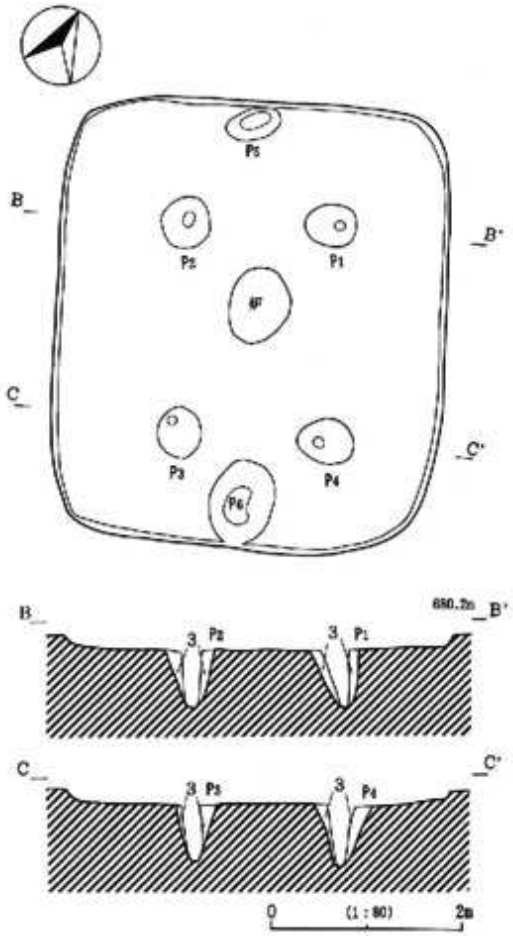


第57図　Y23号住居址実測図

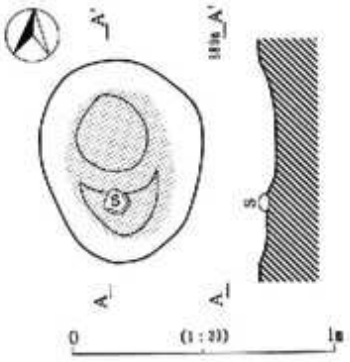
Y23号住居址は、調査区の中央の南寄り、ソ・タ－28・29グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北465cm・東西403cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、北より西へ19°ずれる。床の面積は16.54㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は３層に分割され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは7.5～15cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利



第58図　Y23号住居址実測図（ピット完掘）



第59図　Y23号住居址炉実測図

用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と補助柱穴1個（P_5）、貯蔵穴（P_6）の計6個が検出された。この内P_5は棟持柱穴と考えられる。

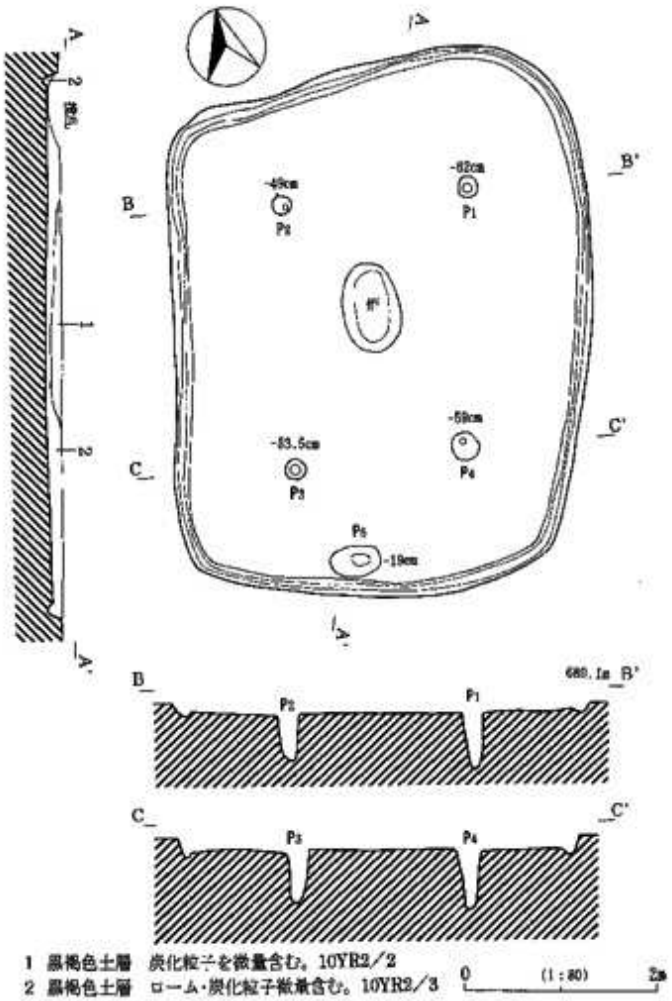
炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に安山岩を設けていた。規模は77.5cm×62.5cm・深さ7cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壷や甕・坏といった土器などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→54・55ページ　　・遺物実測図→229～231ページ
・住居址写真→380ページ　　・遺物写真→452・453ページ

Y24号住居址

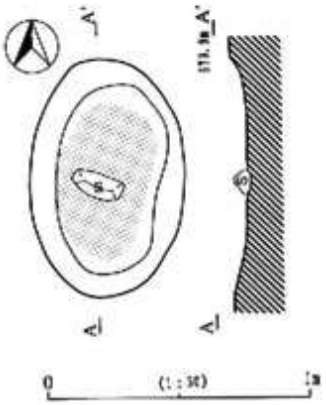


第60図 Y24号住居址実測図

Y24号住居址は、調査区の中央の南寄り、セーター30・31グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址はY29号住居址を破壊する。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北546cm・東西435cmを測る。住居址の向きはほぼ南北を指し、北より東へ5°ずれる。床の面積は18.84㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床面はおおむね平坦で貼床はなかった。検出面から床までの壁の高さは4～17.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利



第61図　Y24号住居址炉実測図

用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）と入口施設に伴うと考えられるピット（P_5）の計5個が検出された。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に安山岩を設けていた。規模は91cm×59.5cm・深さ7cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

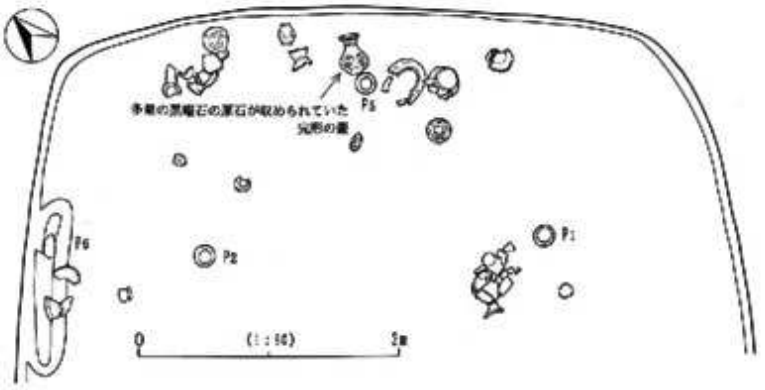
遺物は、壷や甕・坏といった土器や、太型蛤刃石斧・擦り石・横刃型石器・石鏃などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

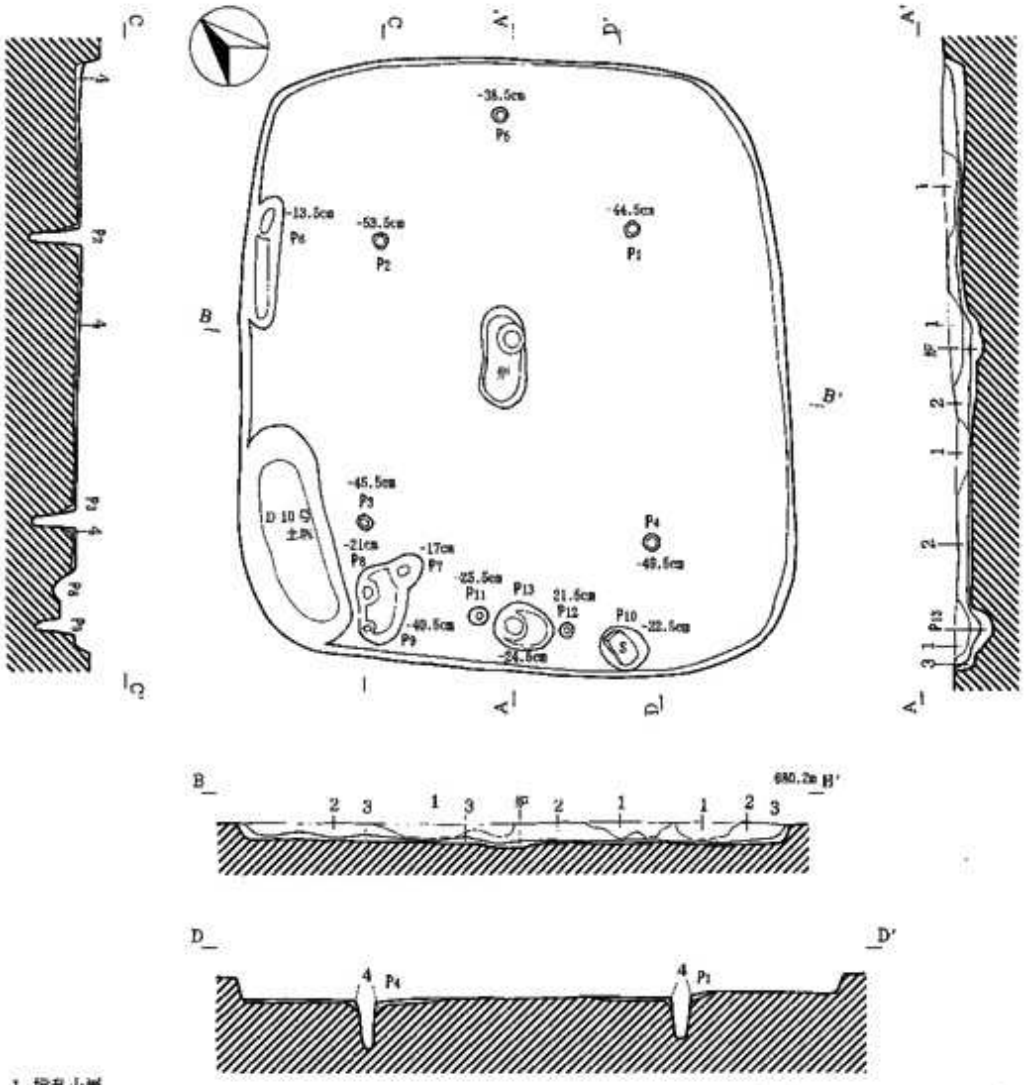
・住居址平面図→56・57ページ　・遺物実測図→232・233ページ
・住居址写真→381ページ　・遺物写真→453・454ページ

Y25号住居址

Y25号住居址は、調査区の中央の南側、ツ～ト－30・31グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。



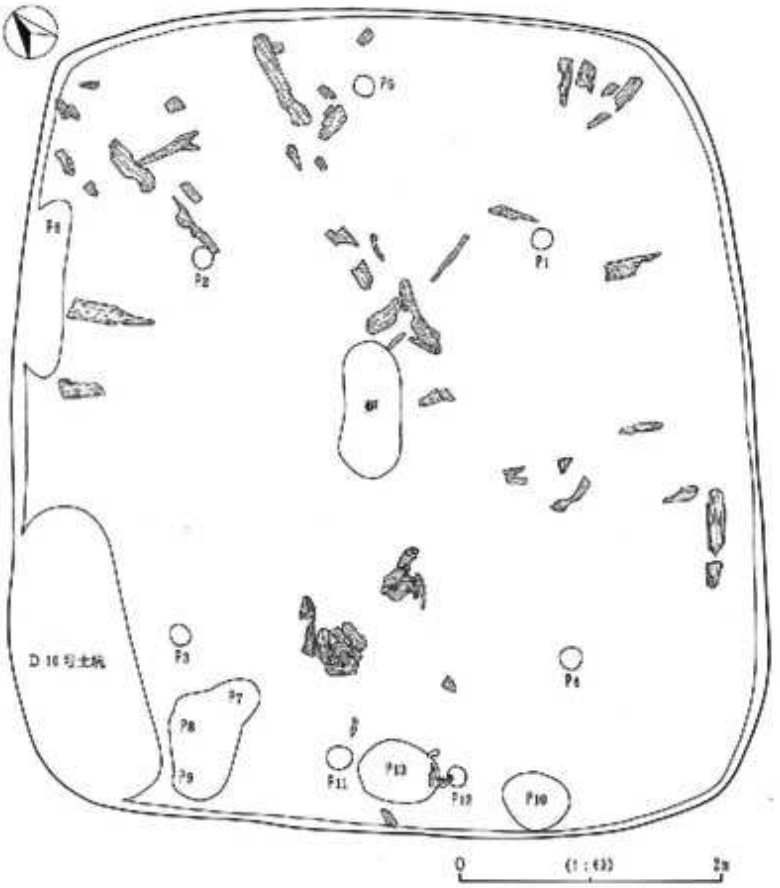
第62図　Y25号住居址遺物出土状況実測図



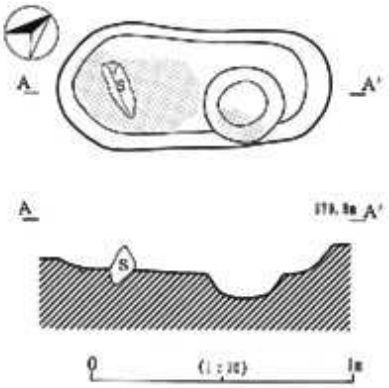
第63図　Y25号住居址実測図

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北630cm・東西563cmを測る。住居址の向きはほぼ北東一南西方向を指し、北より東へ44°ずれる。床の面積は31.12㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は3層に分割され、床面はおおむね平坦であった。なお第1層は耕作による撹乱層である。貼床（住居覆土第4層）は床面のほぼ全面にわたり確認された。



第64図　Y25号住居址炭化材出土状況実測図



第65図　Y25号住居址炉実測図

検出面から床までの壁の高さは11.5～25cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、補助柱穴5個（P_5～P_9）、入口施設に伴うと考えられるピット3個（P_{11}～P_{13}）、貯蔵穴1個（P_{10}）の計13個が検出された。この内P_5は棟持柱穴と考えられる。またP_{13}は貯蔵穴の可能性も考えられる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に安山岩を設けていた。規模は

104.5cm×48.5cm・深さ11.5cmを測る。また炉の北側には径30cm・深さ9cmの円形の掘り込みが認められた。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

本住居址は、床面がかなり焼け、床面上全体に焦土と炭化材小片が確認され、焼け残った炭化材が多量に検出された。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられるが、前者の可能性が高い。

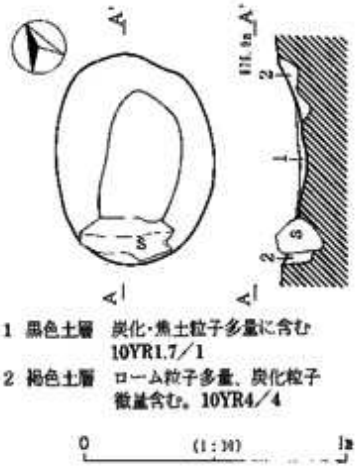
またD10号土坑は、土坑を掘り込んだ際の土砂が住居址の床面直上に堆積している点、掘り込んだ土砂の上面が焼けている点、さらには掘り込んだ土砂の上で炭化材や焦土が検出されている点などから、住居を焼却する直前にほりこまれたことが確認された。本土坑は、上記の点や覆土・形態・住居址内という特殊性などから、Y14号住居址のD1号土坑と同様に住居址内墓坑と考えられる。

遺物は、壺や甕・坏・蓋といった土器や、扁平片刃石斧・台状砥石などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→57・58・59ページ　・遺物実測図→233～241ページ
・住居址写真→381・382ページ　・遺物写真→453～461ページ

Y26号住居址



第66図　Y26号住居址炉実測図

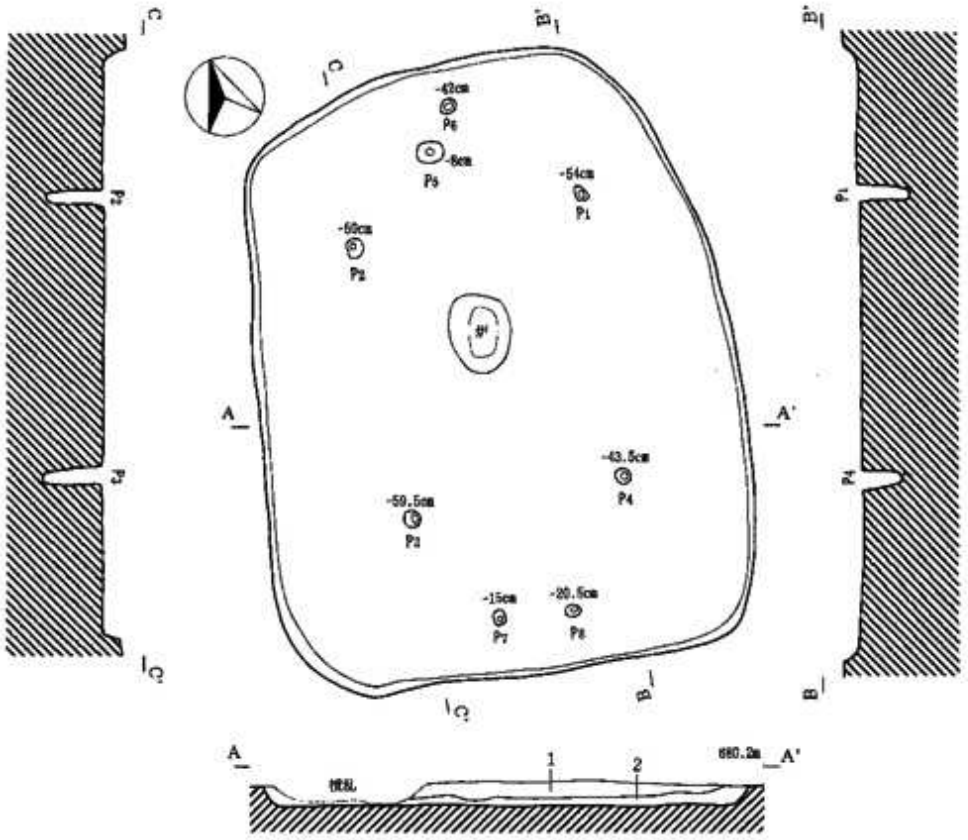
Y26号住居址は、調査区中央の南側、テ・ト－28・29グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北633cm・東西494cmを測る。住居址の向きはほぼ北方向を指し、北より東へ14.5°ずれる。床の面積は27.05㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床面はおおむね平坦であった。なお貼床は検出されなかった。

検出面から床までの壁の高さは12～20cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、補助柱穴2個（P_5



第67図　Y26号住居址実測図

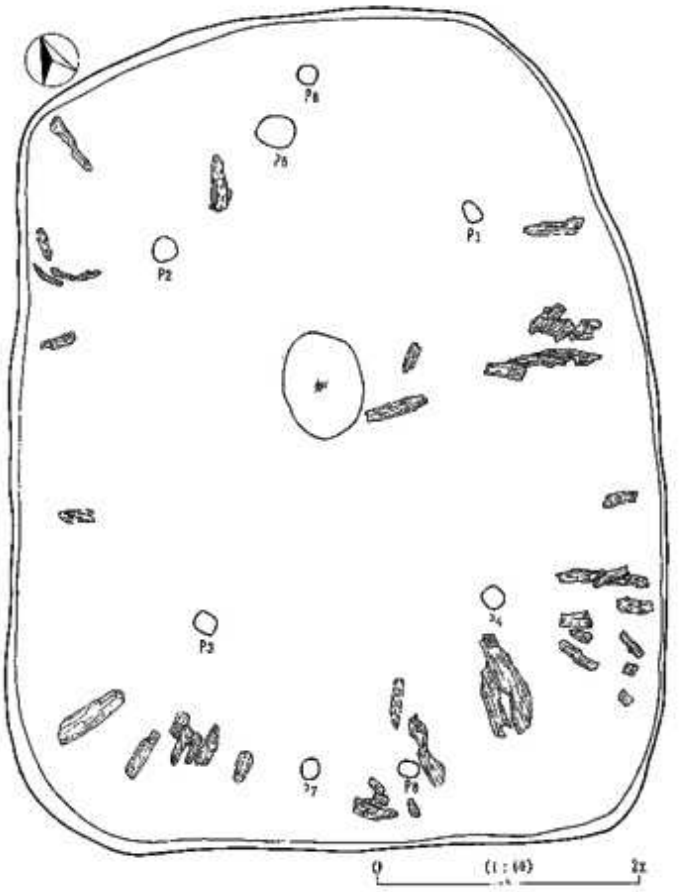
・P_8)、入口施設に伴うと考えられるピット2個（P_7・P_8）の計8個が検出された。この内P_6は棟持柱穴と考えられる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に安山岩を設けていた。規模は80cm×60.5cm・深さ12cmを測る。また炉の土層は2層が確認され、第2層の褐色土層は炉の構築土である。

本住居址は、床面がかなり焼け、床面上全体に焦土と炭化材小片が確認され、焼け残った炭化材が多量に検出された。破棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壺や甕・坏といった土器や、石鏃などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。



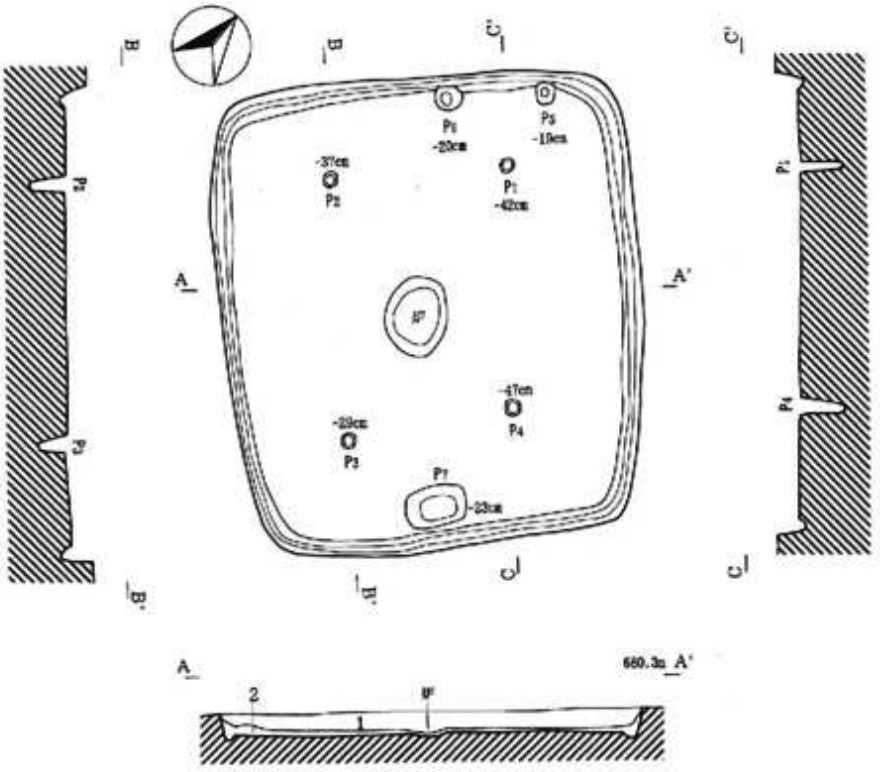
第68図　Y26号住居址炭化材出土状況実測図

・住居址平面図→60・61・62ページ　　・遺物実測図→241～243ページ
・住居址写真→382・383ページ　　・遺物写真→460～462ページ

Y27号住居址

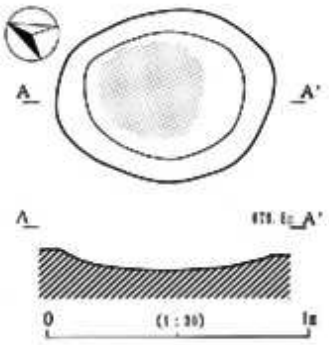
Y27号住居址は、調査区中央の南側、ト～ニー28・29グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北485cm・東西437cmを測る。住居址の



1 黒褐色土層　ローム粒子微量含む。10YR2／2
2 黒褐色土層　焼土粒子・炭化粒子・炭化材小片少量含む。10YR1.7／1

第69図　Y27号住居址実測図

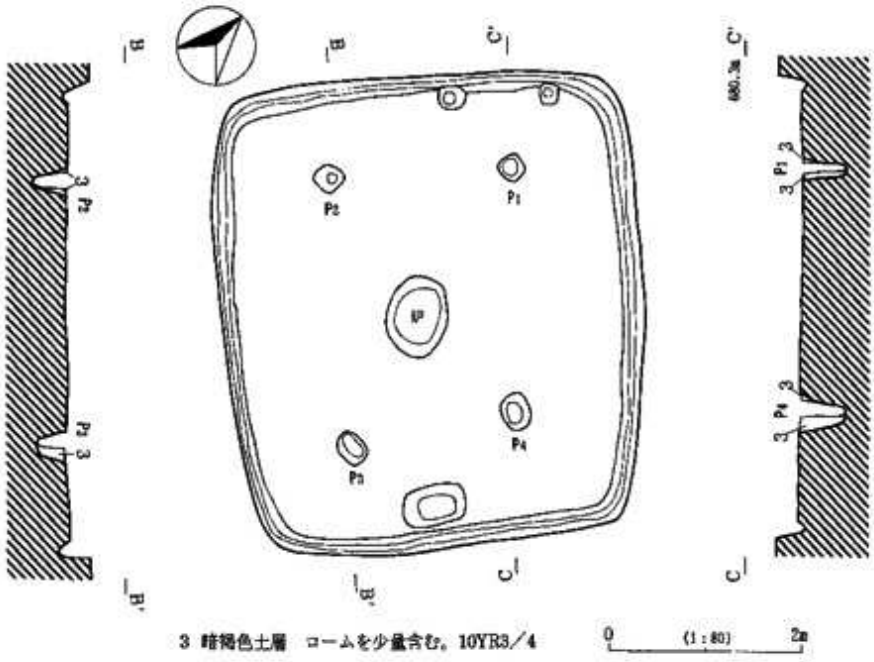


第70図　Y27号住居址炉実測図

向きは北西ー南東方向を指し、北より西へ48°ずれる。床の面積は16.66㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床面はおおむね平坦であった。なお貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは18～26cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は壁の際に全周にわたり認められた。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、入口施設に伴うと考えられるピット2個（P_5・P_6）、貯蔵穴1個（P_7）の計7個が検出された。



第71図　Y27号住居址実測図（ピット完掘）

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は83.5cm×65.5cm・深さ8cmを測る。

本住居址は、床面がかなり焼け、床面上全体に焦土と炭化材小片が確認された。住居址の廃棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

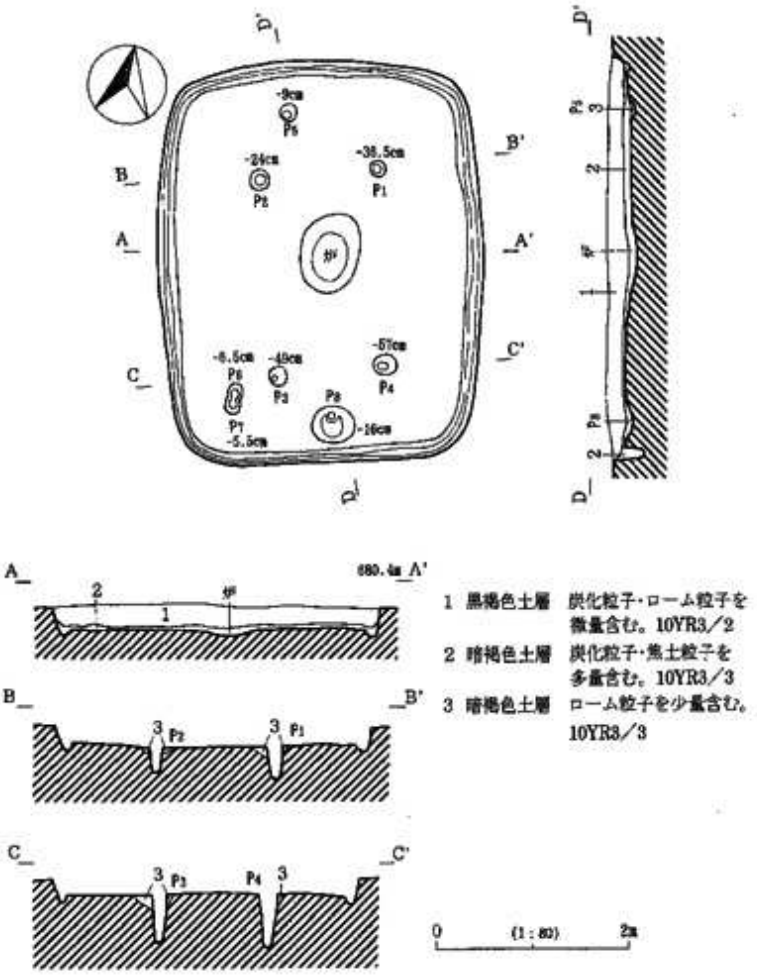
遺物は、壺や甕・坏といった土器や、石鏃などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→63・64ページ　　・遺物実測図→244・245ページ
・住居址写真→383・384ページ　　・遺物写真→460～462ページ

Y28号住居址

Y28号住居址は、調査区中央の北側、キ・ク－27グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

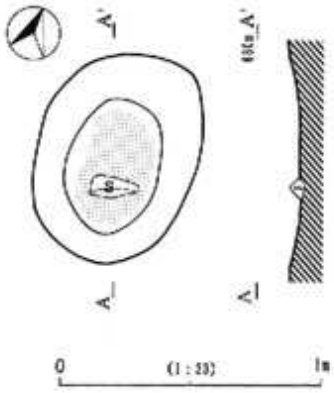


第72図　Y28号住居址実測図

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北414cm・東西338cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ11.5°ずれる。床の面積は10.59㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床面はおおむね平坦であった。なお貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは12.5～24cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は壁の際に全周にわたり認められた。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、補助柱穴1個（P_5）、入口施設に伴うと考えられるピット2個



第73図　Y28号住居址炉実測図

（P_6・P_7）、貯蔵穴１個（P_8）の計８個が検出された。

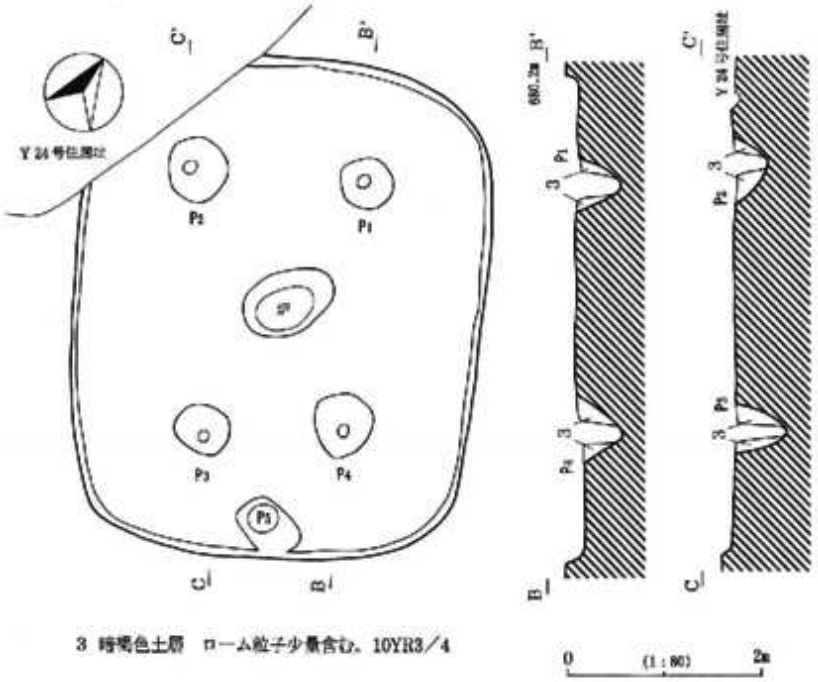
炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は80.5cm×61cm・深さ５cmを測る。

本住居址は、床面がかなり焼け、床面上全体に焦土と炭化材小片が確認された。住居址の廃棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壷や甕・坏といった土器や、砥石・石鏃などが出土した。

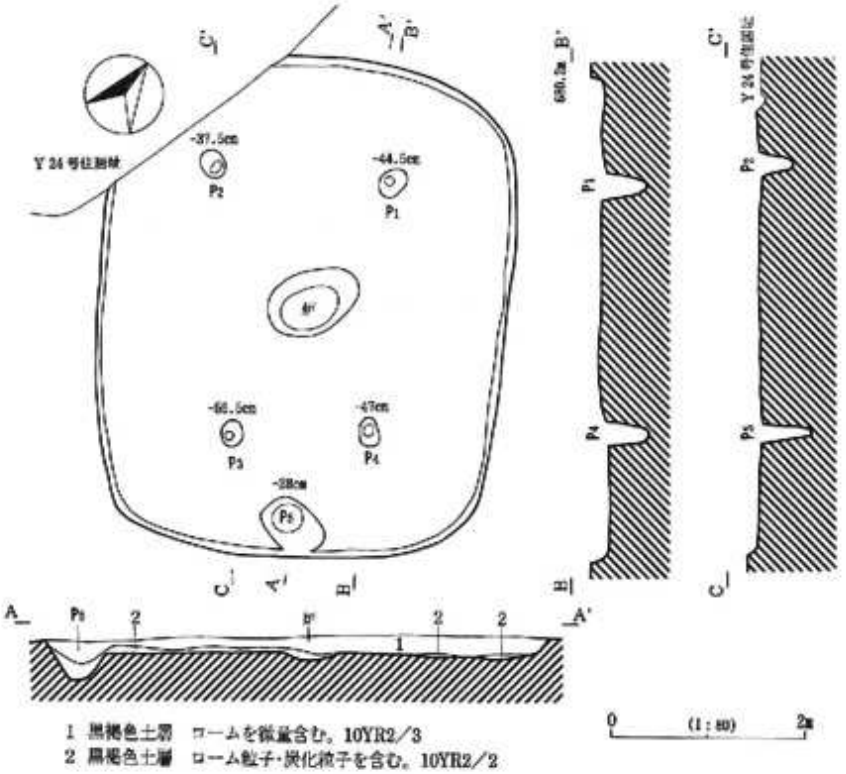
以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→65・66ページ
・住居址写真→384・385ページ
・遺物実測図→246・247ページ
・遺物写真→463・464ページ

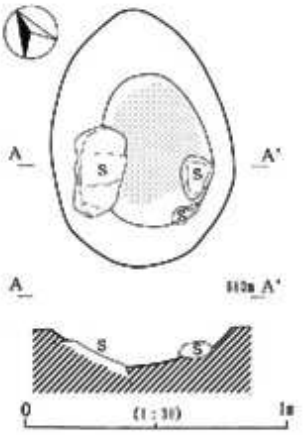


第74図　Y29号住居址実測図（ピット完掘）

Y29号住居址



第75図　Y29号住居址実測図



第76図　Y29号住居址炉実測図

Y29号住居址は、調査区中央の南側、ソ・ター29・30グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、北西の隅をY24号住居址により破壊される。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北516cm・東西422cmを測る。住居址の向きは北西ー南東方向を指し、北より西へ33°ずれる。現存する床の面積は17.55㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床面はおおむね平坦であった。なお貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは7～17.5cmを測

る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、貯蔵穴あるいは入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_5）の計5個が検出された。

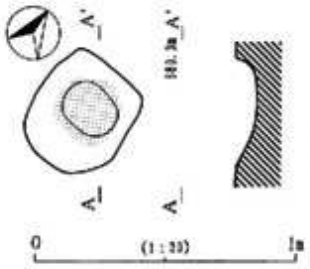
炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に安山岩2個を設けていた。また西側の安山岩は、地山の石でかなり大きく掘り出すことができなかった。規模は97.5cm×69cm・深さ15cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器や、擦り石・石鏃などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→66・67ページ　　・遺物実測図→248・249ページ
・住居址写真→385ページ　　・遺物写真→464・465ページ

Y30号住居址



第77図　Y30号住居址炉実測図

Y30号住居址は、調査区中央の北側、ウ・エ－22・23グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址はY38号住居址を破壊する。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北488cm・東西420cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ27°ずれる。床の面積は17.2㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は1層のみが確認され、床面はおおむね平坦であった。なお貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは5.5～16cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

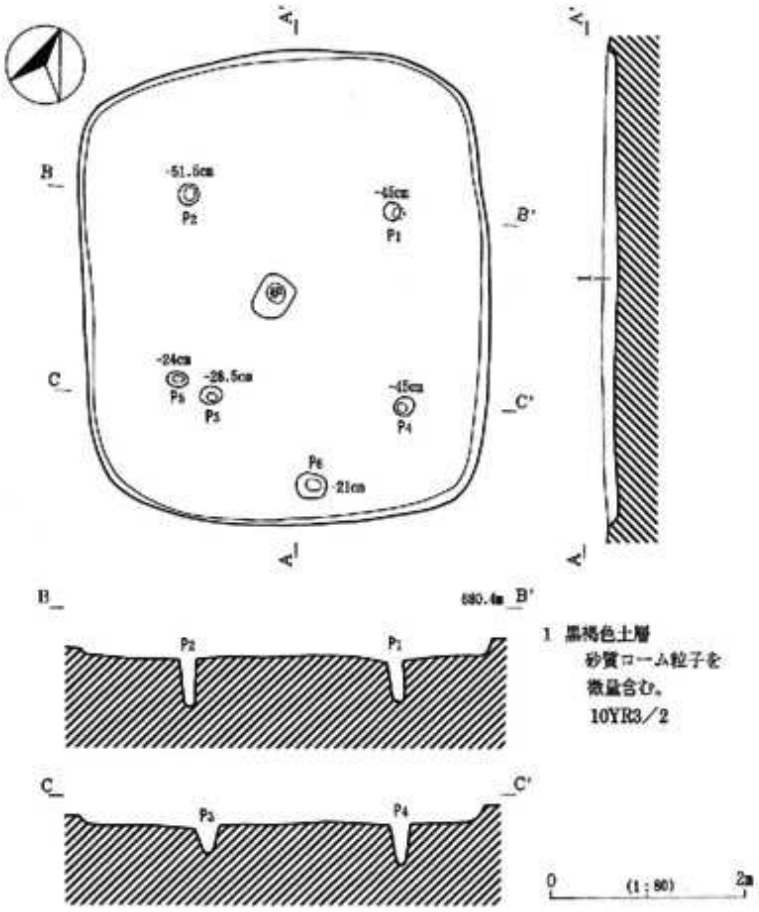
ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、補助柱穴1個（P_5）、貯蔵穴あるいは入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_6）の計6個が検出された。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は44cm×37.5cm・深さ8cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→68・69ページ　　・遺物実測図→250・251ページ



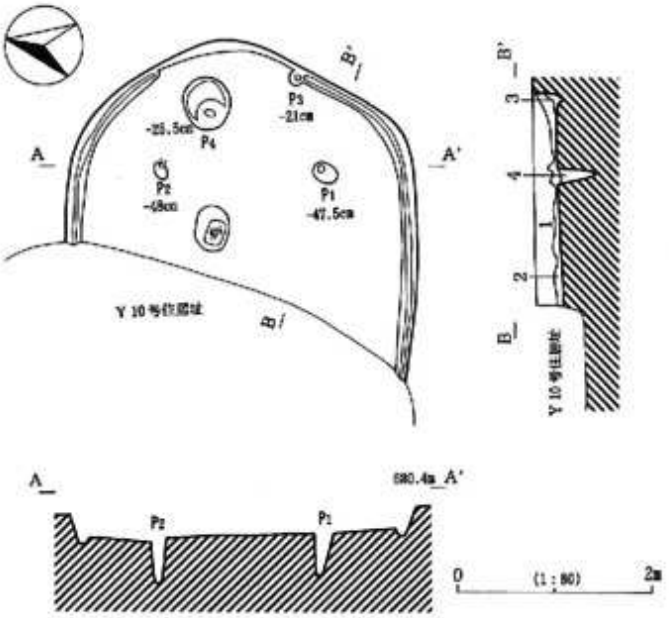
第78図　Y30号住居址実測図

・遺物写真→465・466ページ

Y31号住居址

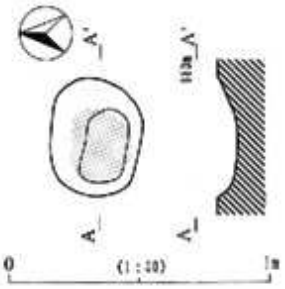
Y31号住居址は、調査区中央の北側、エ・オ－28グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、西側約半分をY10号住居址によって破壊される。

平面の形態は東西に長い楕円形と考えられ、規模は南北363cm・東西は現存で245cmを測る。住居址の向きは東西方向を指し、東より北へ8.5°ずれる。現存する床の面積は6.85㎡を測る。



1 暗褐色土層　ローム粒子少量含む。10YR3／3
2 焦土・炭化層　焦土粒子・炭化粒子・炭化材小片多量含む。
5YR1.7／1～2／4(黒色・黒褐色・極暗赤褐色)
3 褐色土層　ロームを多量、焦土・炭化粒子微量含む。10YR4／4
4 黒色土層　炭化材小片微量含む。10YR1.7／1

第79図　Y31号住居址実測図



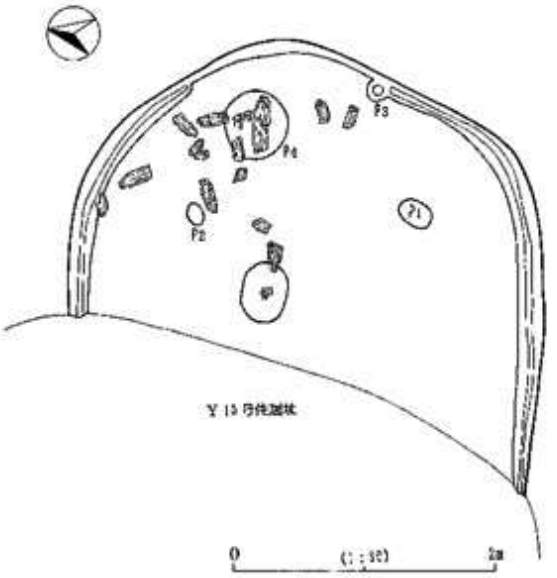
第80図　Y31号住居址炉実測図

住居址の検出面から床までの土層は4層に分割され、床面はおおむね平坦であった。なお貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは21.5～30.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は東側中央部分を除き、壁の際に認められた。

ピットは主柱穴2個（P_1・P_2）、入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_3）、貯蔵穴1個（P_4）の計4個が検出された。

炉は住居址の中央やや北寄りで検出された。平面の形態は楕円形で、規模は44.5cm×34.5cm・深さ8cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

本住居址は、床面がかなり焼け、床面上全体に焦土と炭化材小片が確認され、焼け残った炭化



第81図　Y31号住居址炭化材出土状況実測図

材が多量に検出された。廃棄時に焼却したか、火事にあったと考えられるが、Y10号住居址との時間差はあまりなく、焼却後に埋め戻された可能性が高い。

遺物は、壷や甕といった土器などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

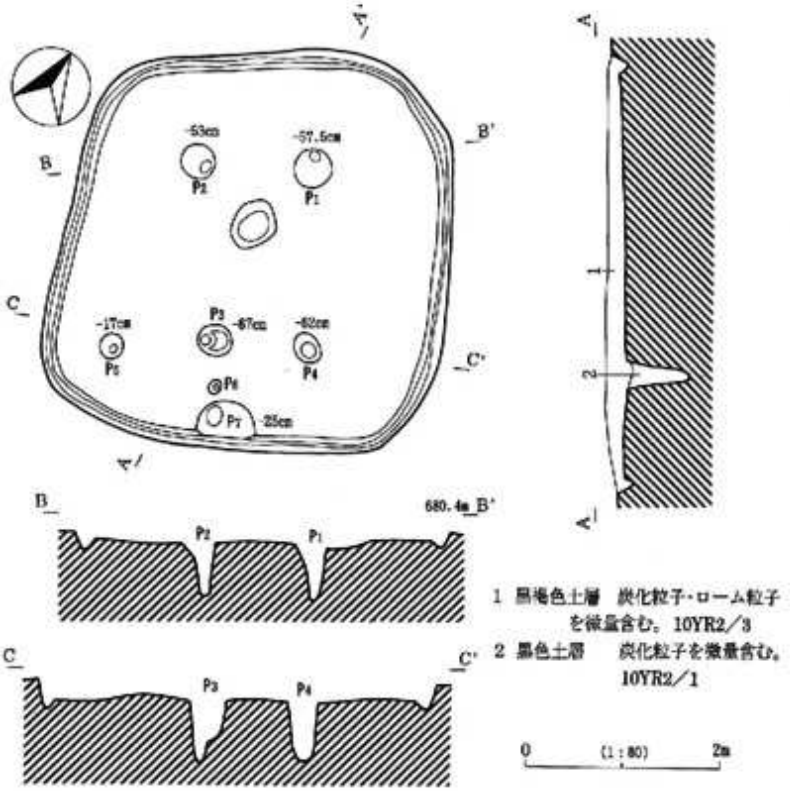
・住居址平面図→70・71ページ　　・遺物実測図→252・253ページ
・住居址写真→385・386ページ　　・遺物写真→466ページ

Y32号住居址

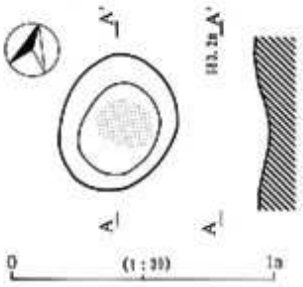
Y32号住居址は、調査区の北側やや西寄り、カ・キ－20・21グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北にやや長い方形で、規模は南北415cm・東西396cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ21°ずれる。床の面積は12.51㎡を測る。

住居址の検出面から床までの上層は２層に分割され、床面はおおむね平坦であった。なお貼床



第82図　Y32号住居址実測図



第83図　Y32号住居址炉実測図

は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは7～16.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は全周にわたり壁の際に認められた。

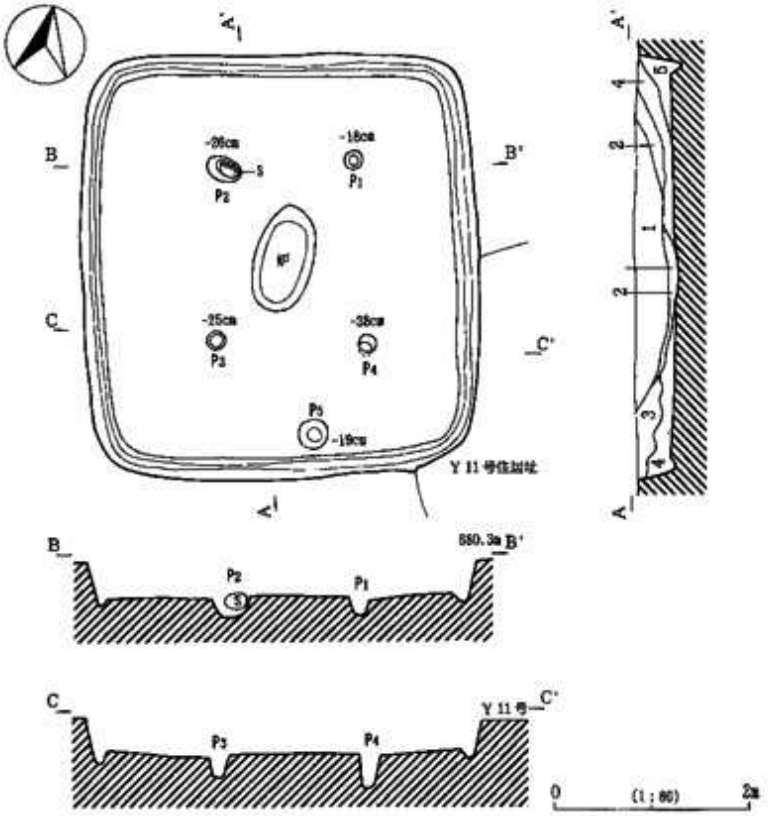
ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、補助柱穴1個（P_5）、入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_6）、貯蔵穴1個（P_7）の計7個が検出された。

炉は住居址の中央やや北寄りで検出された。平面の形態は楕円形で、規模は52.5cm×44cm・深さ4.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。遺物は、壺や甕・坏といった土器や、穂摘具・砥石などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

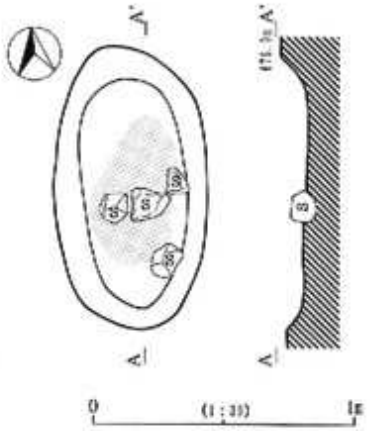
・住居址平面図→72ページ　　・遺物実測図→253～256ページ
・住居址写真→388ページ　　・遺物写真→466・467ページ

Y33号住居址



1 暗褐色土層　ロームを少量含む。10YR3／3
2 黒色土層　焦土粒子・炭化粒子を少量含む。10YR1.7／1
3 褐色土層　ローム粒子少量含む。10YR4／4
4 暗褐色土層　ローム粒子少量、炭化粒子微量含む。10YR3／3
5 黒褐色土層　ローム粒子・炭化粒子微量含む。10YR3／2

第84図　Y33号住居址実測図



第85図　Y33号住居址炉実測図

Y33号住居址は、調査区の中央の北側、イ・ウ－26・27グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、南東部の壁の上部をY11号住居址により破壊される。

平面の形態は南北にやや長い方形で、規模は南北436cm・東西410cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ14.5°ずれる。床の面積は13.54㎡を測る。

住居址の検出面から床までの上層は5層に分割され、第2層は焦土・炭化層である。床面はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは、Y11号住居址に破壊された部分を除き31～40cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。周溝は全周にわたり壁の際に認められた。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、貯蔵穴あるいは入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_5）の計5個が検出された。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に安山岩3個を「L」字型に配し、さらにその外側にもうひとつの安山岩を設置していた。規模は109cm×58.5cm・深さ10.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に3㎜以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器や、石鏃・横刃型石器・石錐などが出土した。また黒曜石の剥片と石核が、炉の中と床面の北東隅よりまとまって出土した。

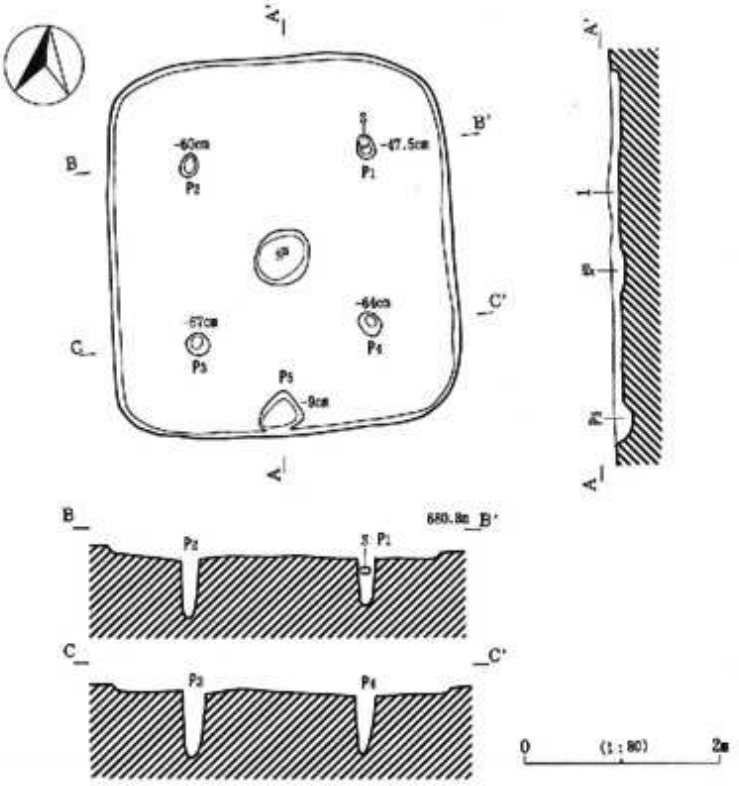
以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→73・74ページ　　・遺物実測図→257・258ページ
・住居址写真→386ページ　　・遺物写真→467・468ページ

Y34号住居址

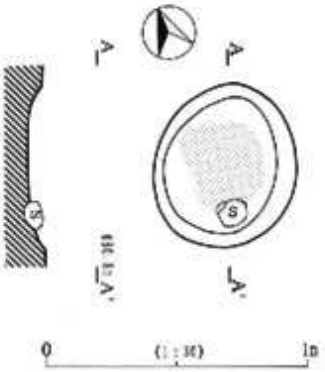
Y34号住居址は、調査区の西側、キ・ク－9・10グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北にやや長い方形で、規模は南北387cm・東西354cmを測る。住居址の向きは南



1 黒褐色土層　ローム粒子・炭化粒子を微量含む。10YR2／2

第86図　Y34号住居址実測図



第87図　Y34号住居址炉実測図

北方向を指し、北より西へ8°ずれる。床の面積は12㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は1層のみが確認された。床面はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは2～8㎝を測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、貯蔵穴あるいは入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_5）の計5個が検出された。

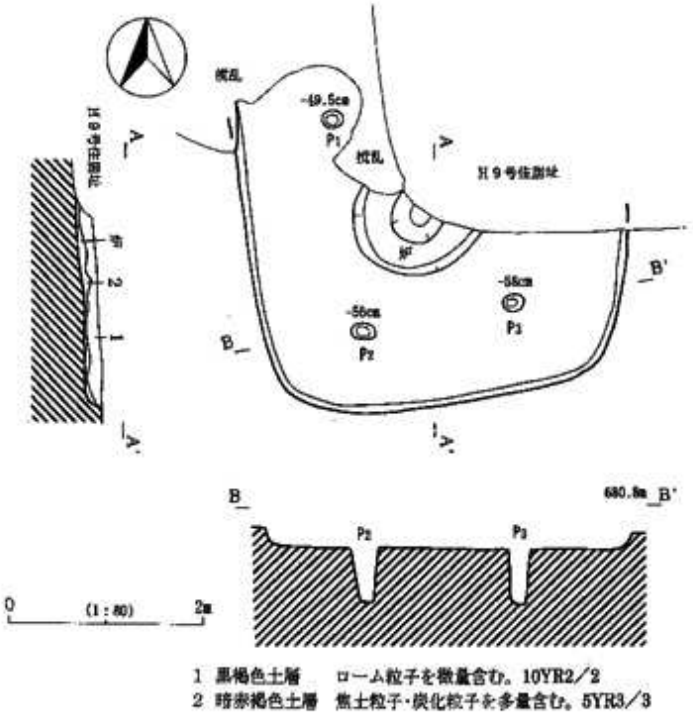
炉は住居址のほぼ中央で検出された。平面の形態は楕円形で、一辺に安山岩を敷けていた。規模は62cm×54cm・深さ8cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

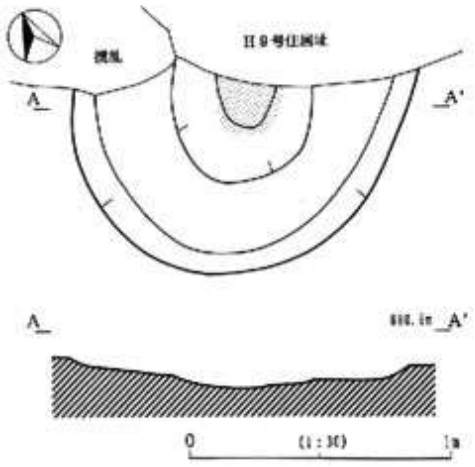
・住居址平面図→75ページ　　・遺物実測図→259ページ
・住居址写真→386・387ページ　　・遺物写真→468ページ

Y35号住居址



第88図　Y35号住居址実測図

Y35号住居址は、調査区の西側、ク・ケ－13・14グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、北東部4分の1をH9号住居址に、北西部を土採りによる撹乱



第89図　Y35号住居址炉実測図

により破壊される。

平面の形態は南北にやや長い方形と考えられ、規模は現存で南北359cm・東西392cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ13°ずれる。現存する床の面積は7.79㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割された。床面はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは破壊された部分を除き11.5～22.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴3個（P_1～P_3）が検出された。

炉は住居址のほぼ中央で検出された。平面の形態は楕円形と考えられ、現存する規模は131cm×75cm・深さ12.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

本住居址は、床面がかなり焼け、床面上全体に焦土と炭化材小片が認められた。住居址を廃棄時に焼却したか、火事にあったと考えられる。

遺物は、壷や甕・坏といった土器、石鏃・敲き石などが出土した。

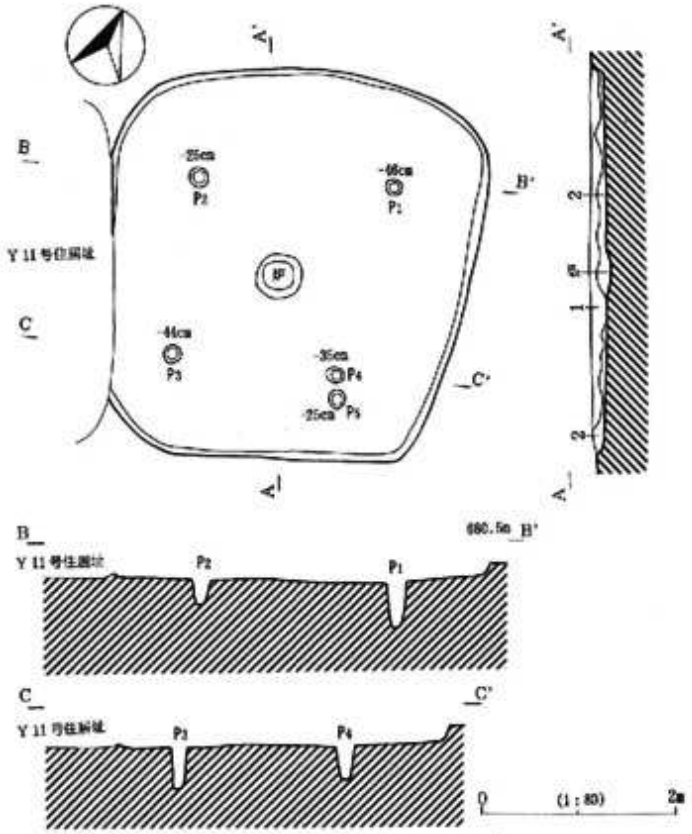
以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→76・77ページ　　・遺物実測図→260・261ページ
・住居址写真→387ページ　　・遺物写真→468・469ページ

Y36号住居址

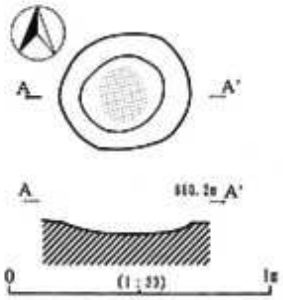
Y36号住居址は、調査区中央の北側、イ・ウ－24・25グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、西の壁部分をY11号住居址により破壊される。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い方形で、規模は南北403cm・東西は現存で391cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ21°ずれる。現存する床の面積は12.64㎡を測る。



1 暗褐色土層　炭化粒子・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。10YR3／3
2 黒褐色土層　炭化粒子・ローム粒子を微量含む。10YR2／3

第90図　Y36号住居址実測図

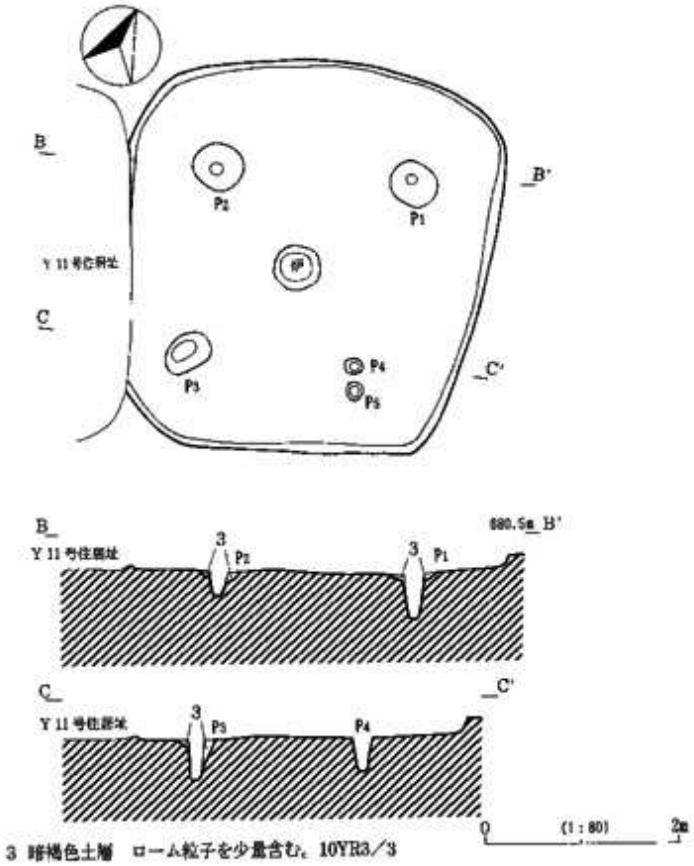


第91図　Y36号住居址炉実測図

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割された。床面はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは破壊された部分を除き7～17.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、補助柱穴1個（P_5）の計5個が検出された。

炉は住居址のほぼ中央で検出された。平面の形態は楕円



第92図　Y36号住居址実測図（ピット完掘）

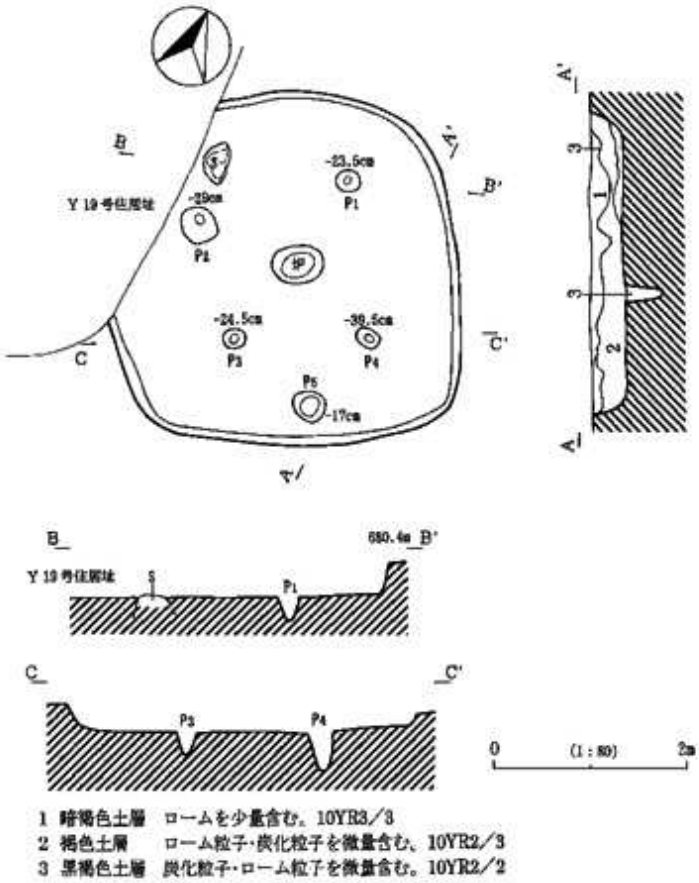
形で、規模は50cm×43.5cm・深さ4.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器、石鏃・砥石などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→78・79ページ　・遺物実測図→262・263ページ
・住居址写真→387ページ　・遺物写真→469ページ

Y37号住居址

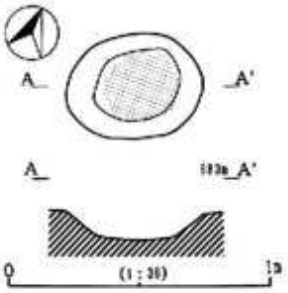


第93図　Y37号住居址実測図

Y37号住居址は、調査区の中央やや北寄り、カ・キ－26・27グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、北西部分をY19号住居址により破壊される。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北367cm・東西は366cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ29.5°ずれる。現存する床の面積は9.46㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は3層に分割された。床面はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは破壊された部分を除き11～33cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。



第94図　Y37号住居址炉実測図

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、貯蔵穴あるいは入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_5）の計5個が検出された。

炉は住居址のほぼ中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は53cm×40cm・深さ10.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器などが出土した。

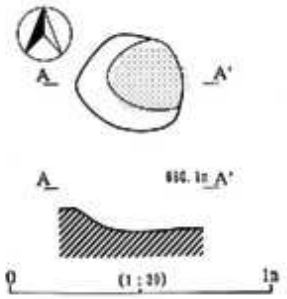
以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→80・81ページ　　・遺物実測図→264ページ
・住居址写真→388ページ　　・遺物写真→468・469ページ

Y38号住居址

Y38号住居址は、調査区の北側やや西寄り、ウ・エ－21・22グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、北と西側の壁の上部をY30号住居址により、南側の壁部分をH10号住居址により破壊される。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模はいずれも現存で南北421cm・東西は411cmを測る。住居址の向きは北西－南東方向を指し、北より西へ46.5°ずれる。現存する床の面積は15.18㎡を測る。

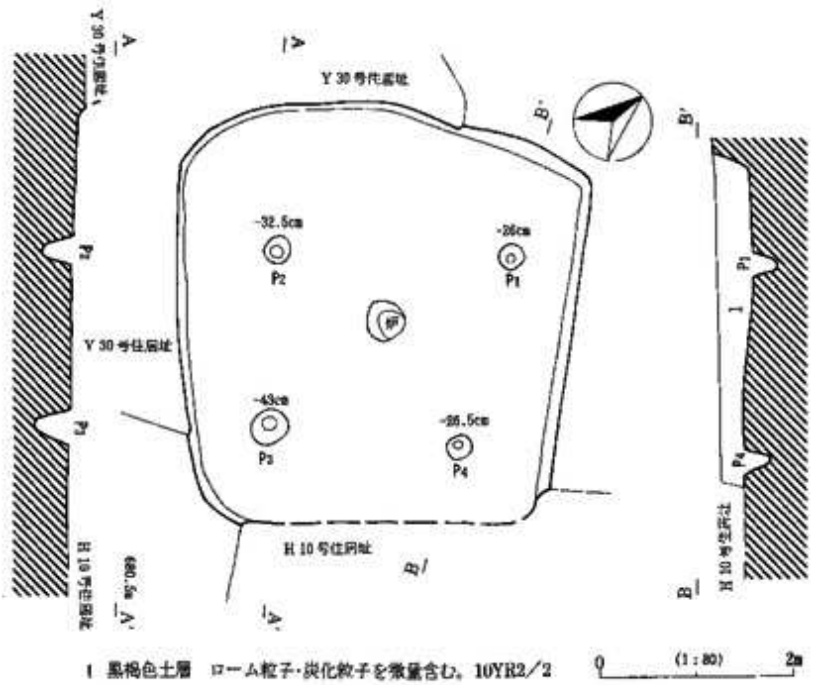


第95図　Y38号住居址炉実測図

住居址の検出面から床までの土層は1層のみが確認された。床面はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは破壊された部分を除き19～36cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）が検出された。

炉は住居址のほぼ中央で検出された。平面の形態は楕円形で、規模は40cm×38cm・深さ9～0cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。



第96図 Y38号住居址実測図

なお炉の西側周辺の床面が低くなっており、炉は西側に口をあけたようになっていた。

遺物は、壺や甕・坏といった土器などが出土した。

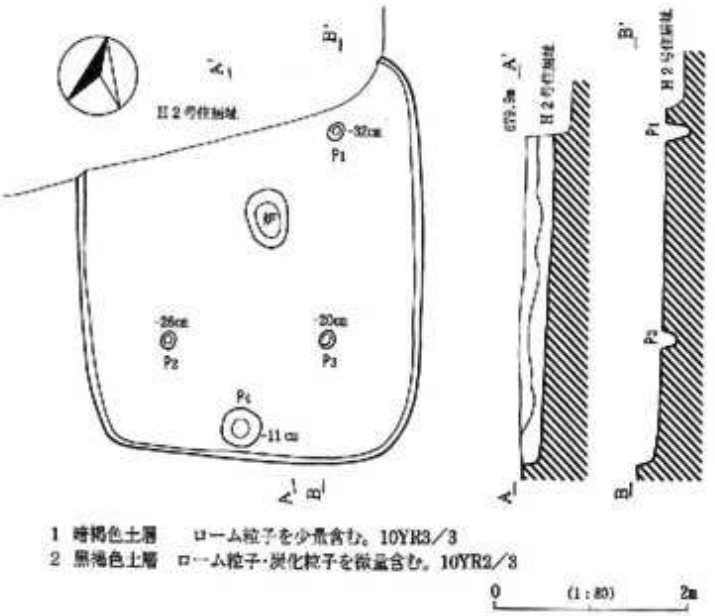
以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→81・82ページ　・遺物実測図→264・265ページ
・住居址写真→389ページ　・遺物写真→468・469ページ

Y39号住居址

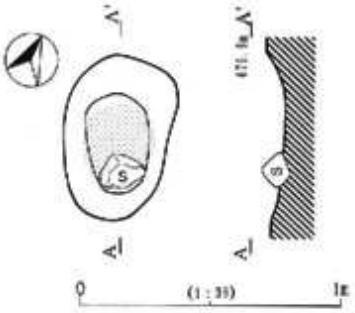
Y39号住居址は、調査区の北西、ウ・エ－34・35グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、北側の一部をH2号住居址により破壊される。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形と考えられ、規模は南北が現存で415cm・東西は355cmを測る。住居址の向きはほぼ南北方向を指し、北より西へ8°ずれる。現存する床の面積



第97図　Y39号住居址実測図

は10.84㎡を測る。



第98図　Y39号住居址炉実測図

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床面はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは破壊された部分を除き15～27cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴3個（P_1～P_3）、貯蔵穴あるいは入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_4）の計4個が検出された。

炉は住居址の中央やや北寄りで検出された。平面の形態は不整楕円形で、規模は62.5cm×40.5cm・深さ7.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に3mm以下で確認された。

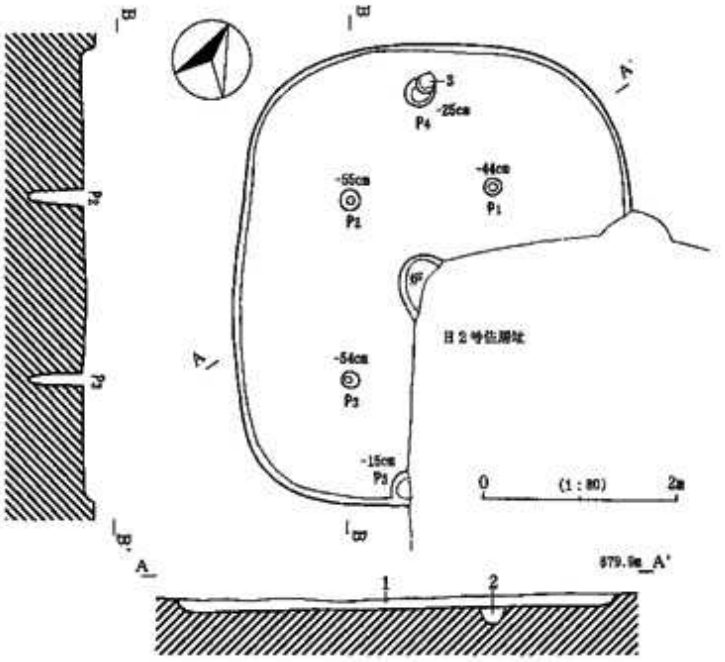
なお炉の西側周辺の床面が低くなっており、炉は西側に口をあけたようになっていた。

遺物は、壺や甕・坏といった土器、擦り石などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→83ページ　　・遺物実測図→265・266ページ
・住居址写真→389・390ページ

Y40号住居址



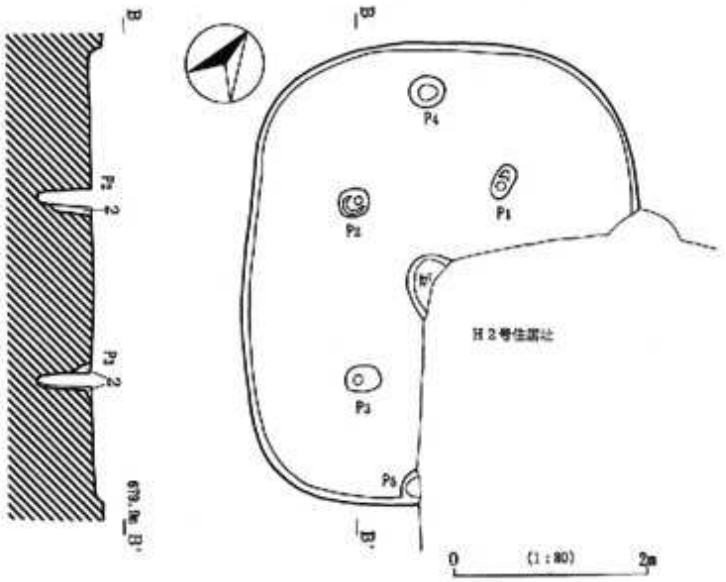
1 黒褐色土層　炭化粒子・ローム粒子を微量含む。10YR2/3
2 暗褐色土層　ローム粒子を少量含む。10YR3/3

第99図　Y40号住居址実測図

Y40号住居址は、調査区の北西、イ～エ－35・36グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、南東部の4分の1をH2号住居址により破壊される。

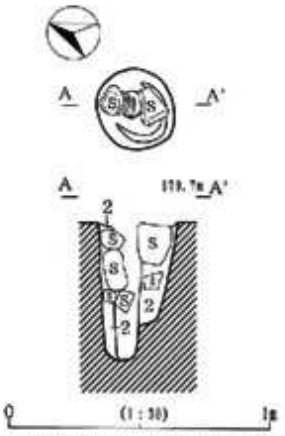
平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形と考えられ、規模は南北が475cm・東西は401cmを測る。住居址の向きはほぼ南北方向を指し、北より西へ25°ずれる。現存する床の面積は11.05㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は1層のみが確認された。床はおおむね平坦で、貼床は検出



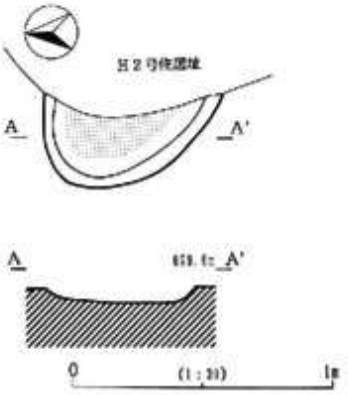
2 暗褐色土層　ローム粒子を少量含む。10YR3／3

第100図　Y40号住居址実測図（ピット完掘）



2 暗褐色土層 ローム粒子少量含む。
10YR3／3

第101図　Y40号住居址P₂実測図



第102図　Y40号住居址炉実測図

されなかった。検出面から床までの壁の高さは破壊された部分を除き7～14cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められな

かった。

ピットは主柱穴3個（P_1～P_3）、補助柱穴1個（P_4）、貯蔵穴あるいは入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_5）の計5個が検出された。この内P_2は図示したように柱を石により固定したと考えられる。またP4は棟持柱穴と考えられるが、P_2と同様に石で柱を固定したようである。

炉は住居址の中央やや北寄りで破壊をまぬがれた約半分のみが検出された。平面の形態は楕円形と考えられ、規模は現存で71cm×56cm・深さ7.5cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器、石鏃などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→84・85ページ　　・遺物実測図→267ページ
・住居址写真→390ページ　　・遺物写真→470ページ

Y41号住居址

Y41号住居址は、調査区の北西、ウ・エ－34・35グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、北西部をH2号住居址に、南東部をY39号住居址により破壊される。また床面のほぼ全面がY39号住居址の床面と同一のレベルで、炉の周囲など部分的に破壊を受けている。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形と考えられ、規模は現存推定で南北が502cm・東西は321cmを測る。住居址の向きはほぼ南北方向を指し、北より東へ16°ずれる。現存する床の面積は8.79㎡を測る。

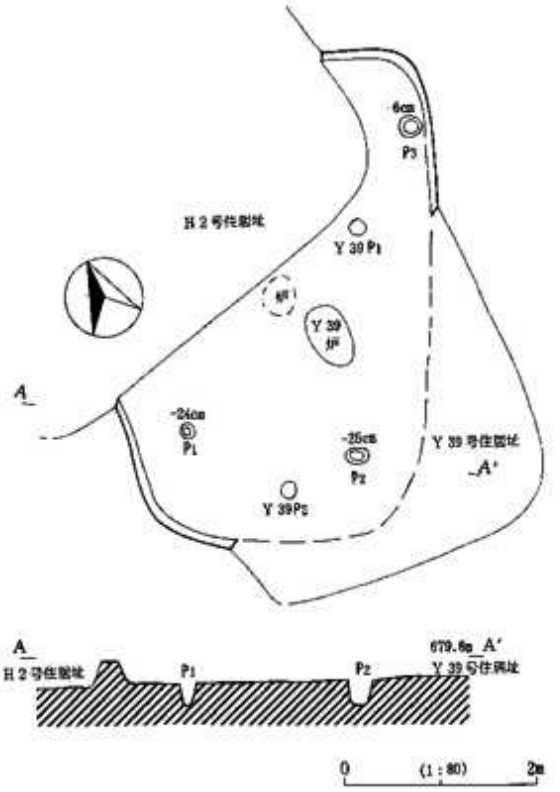
床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは破壊された部分を除き15～23cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴2個（P_1・P_2）、補助柱穴1個（P_3）の計3個が検出された。

炉は住居址の中央で破壊をまぬがれた火床のみが検出された。平面の形態は楕円形と考えられ、規模は現存推定で41cm×33cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。



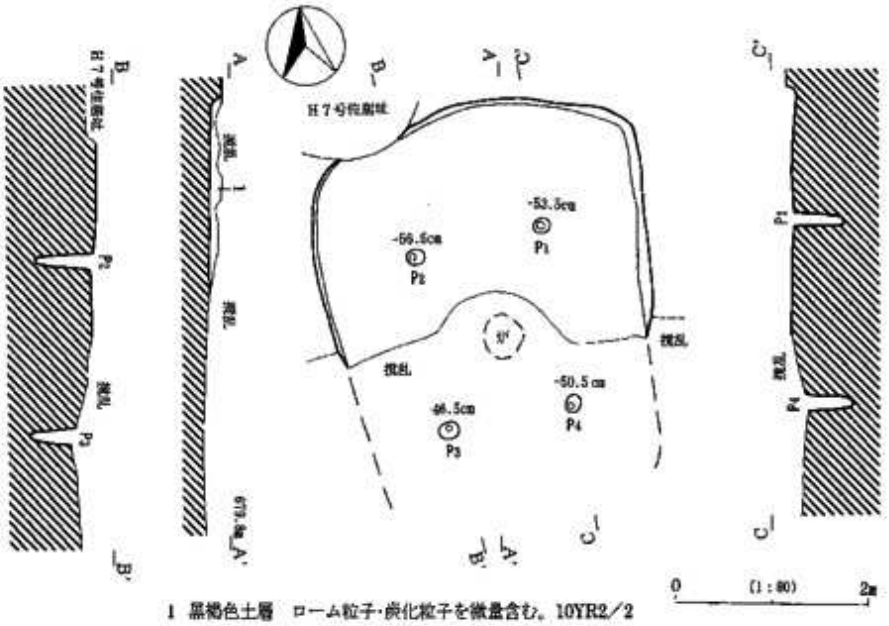
第103図　Y41号住居址実測図

・住居址平面図→87ページ
・住居址写真→389ページ

Y42号住居址

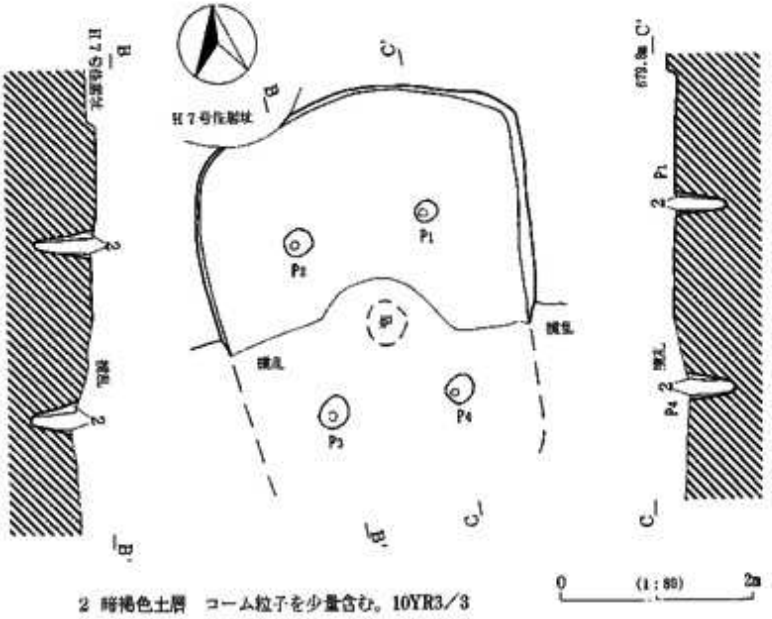
Y42号住居址は、調査区の西側の中央、チ・ツ－36・37グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、北西隅の一部をH7号住居址に、南半分を攪乱により破壊される。

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形と考えられ、規模は南北が現存推定で420cm（現存244cm）・東西は332cmを測る。住居址の向きはほぼ南北方向を指し、北より西へ3.5°ずれる。現存する床の面積は6.59㎡を測る。



1 黒褐色土層　ローム粒子・炭化粒子を微量含む。10YR2／2

第104図　Y42号住居址実測図



2 暗褐色土層　ローム粒子を少量含む。10YR3／3

第105図　Y42号住居址実測図（ピット完掘）

住居址の検出面から床までの土層は１層のみが確認された。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは破壊された部分を除き２～14cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）が検出された。

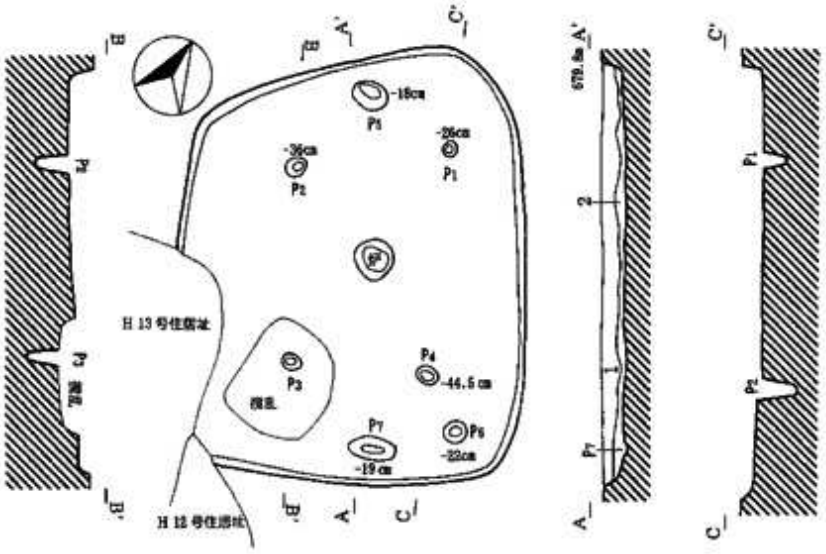
炉は住居址の中央で破壊をまぬがれた火床のみが検出された。平面の形態は楕円形と考えられ、規模は現存推定で45cm×42cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に２mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

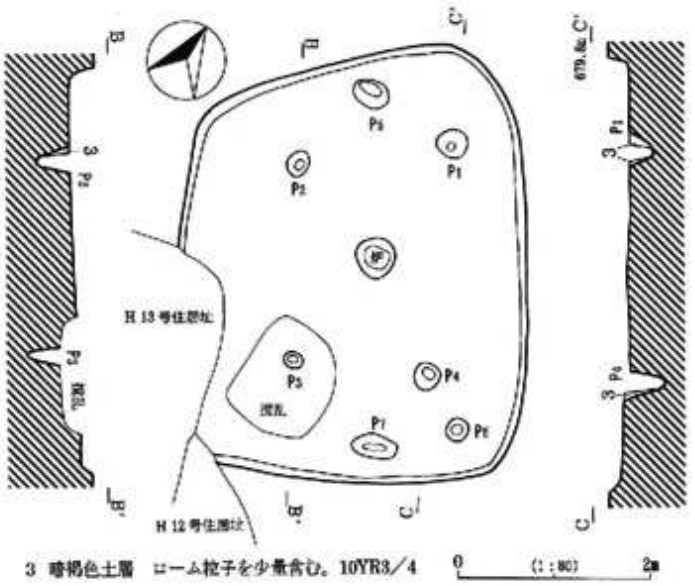
・住居址平面図→88ページ　　・遺物実測図→267ページ
・住居址写真→390・391ページ　　・遺物写真→470ページ

Ｙ43号住居址



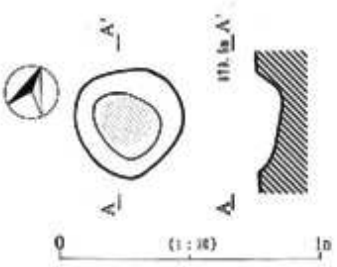
第106図　Ｙ43号住居址実測図

Y43号住居址は、調査区の北西部、イ～エ－37・38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、南西部から西壁の一部をH12号住居址・H13号住居址により破壊される。



第107図 Y43号住居址実測図（ピット完掘）

平面の形態は南北にやや長い隅の丸い長方形と考えられ、規模は南北が435cm・東西は361cmを測る。住居址の向きはほぼ南北方向を指し、北より西へ30°ずれる。現存する床の面積は12.74㎡を測る。



第108図 Y43号住居址炉実測図

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割され、床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。検出面から床までの壁の高さは破壊された部分を除き12～25cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。また周溝は認められなかった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、補助柱穴2個（P_5・P_6）、入口施設に伴うと考えられるピット（P_7）の計7個が検出された。この内P5は棟持柱穴と考えられる。

炉は住居址の中央で検出された。平面の形態は円形で、規模は42.5cm×41cmを測る。焦土および炭化層は底部を中心に2mm以下で確認された。

遺物は、壺や甕・坏といった土器、土製スプーン・ミニチュア土器・擦り石などが出土した。

以上より本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

・住居址平面図→89・90ページ　　・遺物実測図→268・269ページ

・住居址写真→390・391ページ　　・遺物写真→471ページ

Y9号住居址

Y9号住居址は、調査区の西側の中央、シ～セ－36・37グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壺などの土器が遺構確認トレンチ内を中心に出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S1号住居址

S1号住居址は、調査区の北西部、Z・ア・イ－37～39グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

本住居址は、焼失あるいは焼却住居址と考えられ、確認面および遺構確認トレンチ内より、多量の炭化材が確認された。

遺物は、甕・壺などの多量の土器が確認トレンチ内を中心に出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S2号住居址

S2号住居址は、調査区の中央部の北端、X・Y－27・28グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

本住居址は、焼失あるいは焼却住居址と考えられ、確認面で炭化材が確認された。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S 3号住居址

S3号住居址は、調査区の南西部の、テ・トー33・34グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S 4号住居址

S4号住居址は、調査区の西側の中央寄り、タ・チー33・34グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S 6号住居址

S6号住居址は、調査区の西側の中央寄り、シ・スー32・33グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S 7号住居址

S7号住居址は、調査区の西側の中央寄り、シ・スー32・33グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S 9 号住居址

S9号住居址は、調査区の東側の中央寄り、サ・シ－10・11グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S10号住居址

S10号住居址は、調査区の中央部、シ・ス－24・25グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

本住居址は、焼失あるいは焼却住居址と考えられ、確認面で炭化材が確認された。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S11号住居址

S11号住居址は、調査区の中央部、シ・ス－22～24グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

本住居址は、焼失あるいは焼却住居址と考えられ、確認面で炭化材が確認された。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S13号住居址

S13号住居址は、調査区の中央部、ス・セ－26・27グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

本住居址は、焼失あるいは焼却住居址と考えられ、確認面で炭化材が確認された。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S15号住居址

S15号住居址は、調査区の中央部、ソ－19～21グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S17号住居址

S17号住居址は、調査区の中央部、ソ・タ－17・18グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

本住居址は、焼失あるいは焼却住居址と考えられ、確認面で炭化材が確認された。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S18号住居址

S18号住居址は、調査区の中央部、ソ・タ－17・18グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出され、東側をS17号住居址により破壊されている。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S19号住居址

S19号住居址は、調査区の中央部やや西寄り、セ・ソ－15・16グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出され、上部を撹乱により破壊されている。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

本住居址は、焼失あるいは焼却住居址と考えられ、確認面で炭化材が確認された。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S20号住居址

S20号住居址は、調査区の中央部、タ・チ－26・27グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

本住居址は、焼失あるいは焼却住居址と考えられ、確認面で炭化材が確認された。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S22号住居址

S22号住居址は、調査区の中央部やや西寄り、チ・ツ－19～21グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出され、撹乱により南東部を破壊されている。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壺などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S23号住居址

S23号住居址は、調査区の中央部の南側、テ・ト－21・22グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壷などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S24号住居址

S24号住居址は、調査区の北西部、エ・オ－39・40グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出され、撹乱により西側上部を破壊されている。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壷などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

S26号住居址

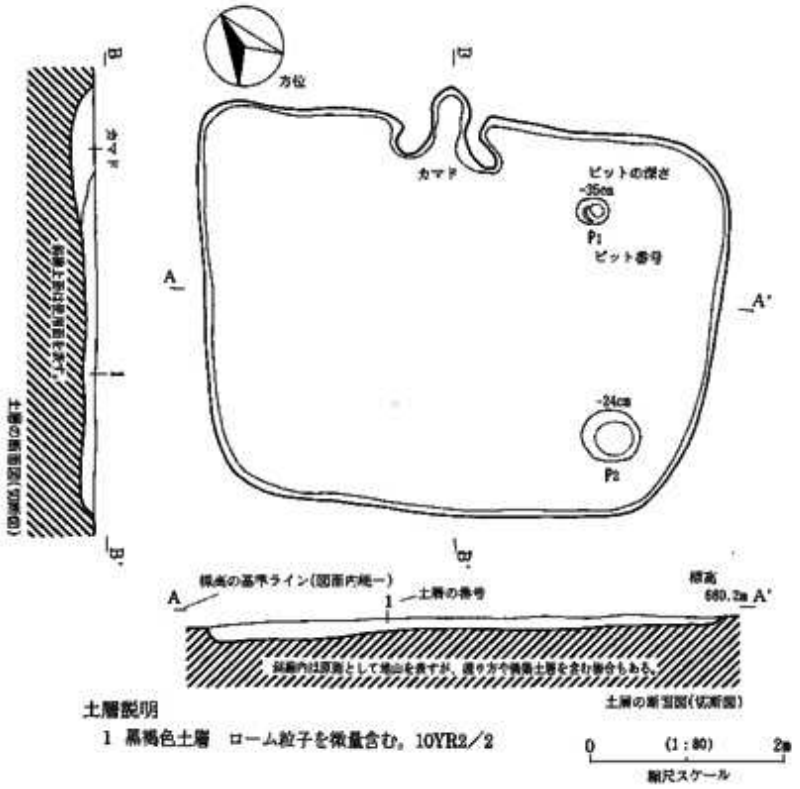
S26号住居址は、調査区の中央部、キ・ク－25・26グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

遺物は、甕・壷などの土器が出土した。

本住居址は、弥生時代の中期後半と考えられる。

2　古墳時代の後期の竪穴住居址

Ｈ８号住居址



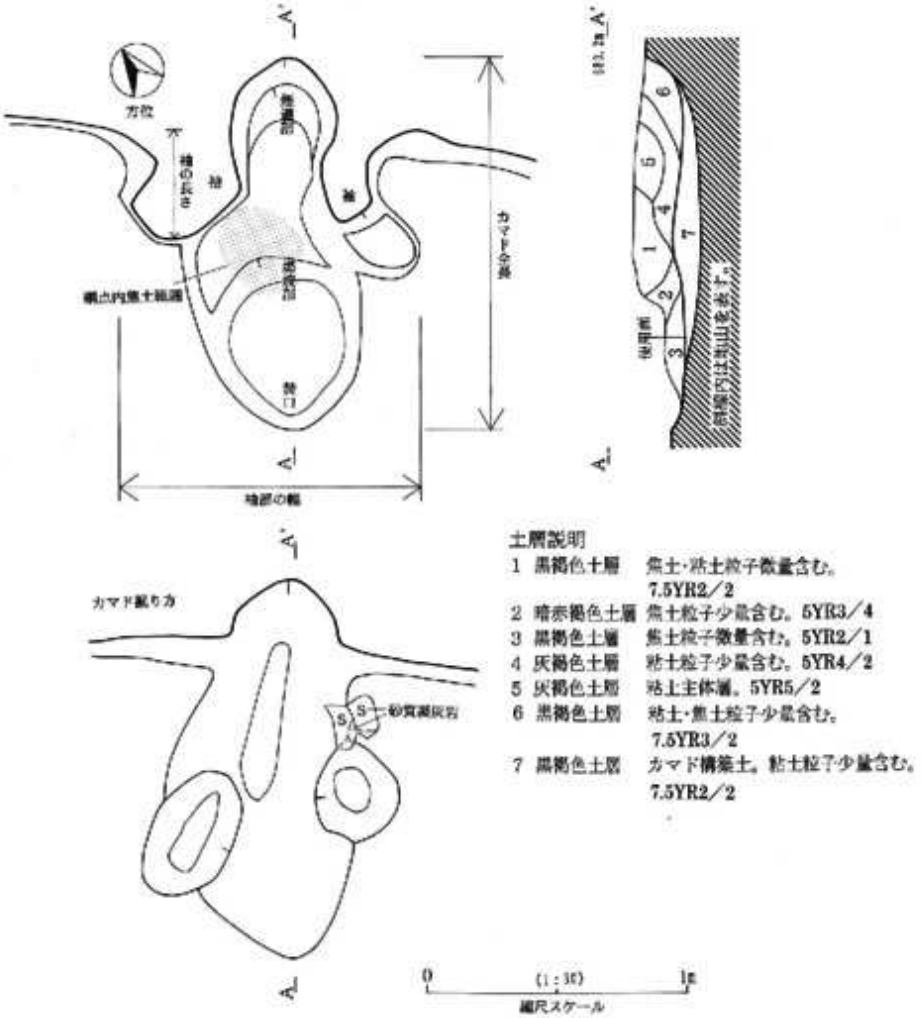
第109図　Ｈ８号住居址実測図

Ｈ８号住居址は、調査区の中央部やや北寄り、ク・ケ－29・30グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は東西にやや長い隅の丸い長方形で、規模は南北が411cm・東西は531cmを測る。なお規模はカマドの煙道突出部を含めない数値である。住居址の向きは北東－南西方向を指し、北より東へ39.5°ずれる。床の面積は18.92㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は１層のみが確認された。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは6.5～19.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴１個（P_1）、貯蔵穴１個（P_2）の計２個が検出された。



第110図　Ｈ８号住居址カマド実測図

カマドは住居址の北壁の中央で検出された。残存状況は悪く、左右の両袖が残るのみだった。規模は煙道出口から焚口までの全長が142cmで、袖部の幅が119cmを測る。また残存する右袖は長さ55cmで幅33cm、左袖は長さ43cmで幅49.5cmを測る。土層は全部で７層に分割され、この内第７層は構築土である。また第５層は煙道部の天井が崩落した層と考えられる。焦土および炭化層は燃焼部を中心に２mm以下で確認された。袖は粘土を中心に構築され、右袖は砂質凝灰岩を構築材として使用していた。なお袖石は残存していなかった。

遺物は、甕・坏といった土器などが出土した。

以上より本住居址は、古墳時代の後期と考えられる。

・住居址平面図→97・98ページ　　・遺物実測図→319ページ

・住居址写真→397ページ　　・遺物写真→504ページ

H９号住居址

H９号住居址は、調査区の西側、キ～ケ－12～14グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、Y35号住居址を破壊する。

平面の形態は南北にやや長い方形で、規模は南北が729cm・東西は697cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ２°ずれる。床の面積は44.94㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は５層に分割された。この内第３・４・５層はカマドの崩壊により成立した土層と考えられる。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは12～58cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）、入口施設に伴うと考えられるピット１個（P_5）、貯蔵穴１個（P_6）の計６個が検出された。ピットは貯蔵穴を除きいずれも掘り方が認められた。

カマドは住居址の北壁のほぼ中央で検出された。残存状況は比較的良好で、左右の両袖と煙道の天井部が残存していた。なお左袖の一部と袖天井石は残存していなかった。規模は煙道出口から焚口までの全長が163cmで、袖部の幅が131cmを測る。また残存する右袖は長さ110cmで幅40cm、左袖は長さ83cmで幅44cmを測る。土層は全部で９層に分割され、この内第６～９層は構築土である。袖は粘土を中心に構築され、右袖は砂質凝灰岩を袖石として、安山岩を構築材として使用していた。左袖の袖石は失われており、安山岩が構築材として使用されていた。また煙道天井部も粘土を中心に使用し、構築されていた。

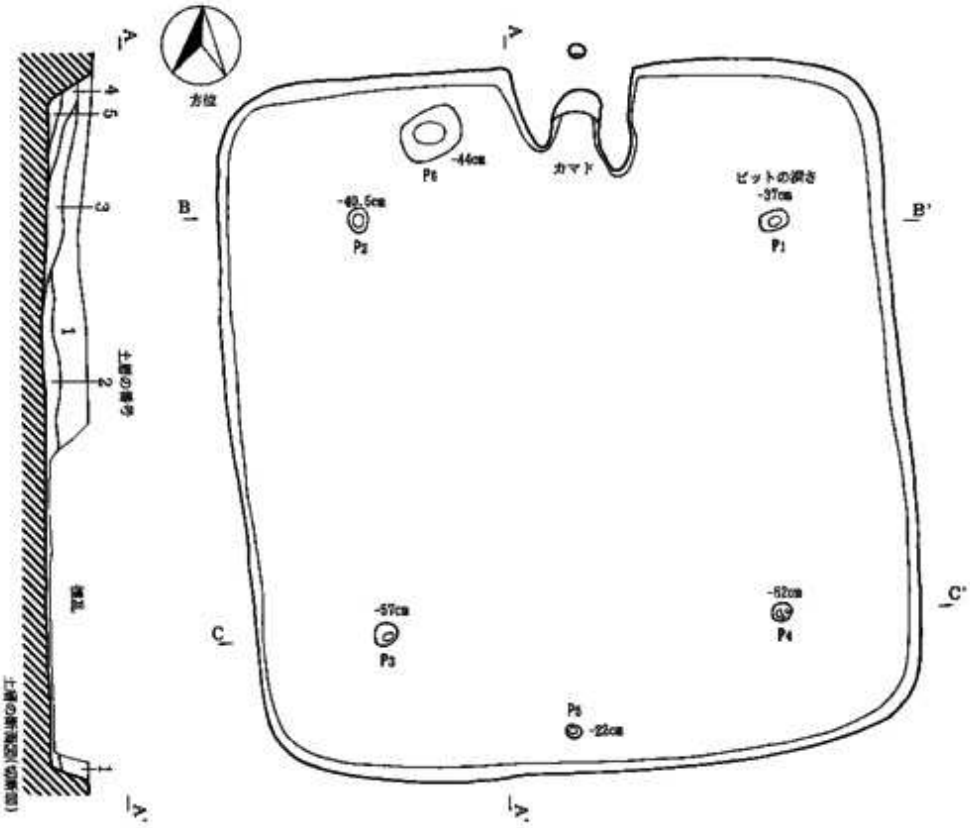
本住居址は、東側の壁の直下床面で炭化材が数本検出されている。また床面直上の数箇所に炭化層と焦土が確認されている。さらに坏は火熱を受け変色したり剥離しているものが見受けられる。よって本住居址は、火事により焼失したか、廃棄時に焼却したと考えられる。

遺物は、甕・甑・坏といった土師器、須恵器製の坏蓋、砥石・滑石製紡錘車などが出土した。

以上より本住居址は、古墳時代の後期と考えられる。

・住居址平面図→100～102ページ　　・遺物実測図→320～324ページ

・住居址写真→398ページ　　・遺物写真→505～511ページ

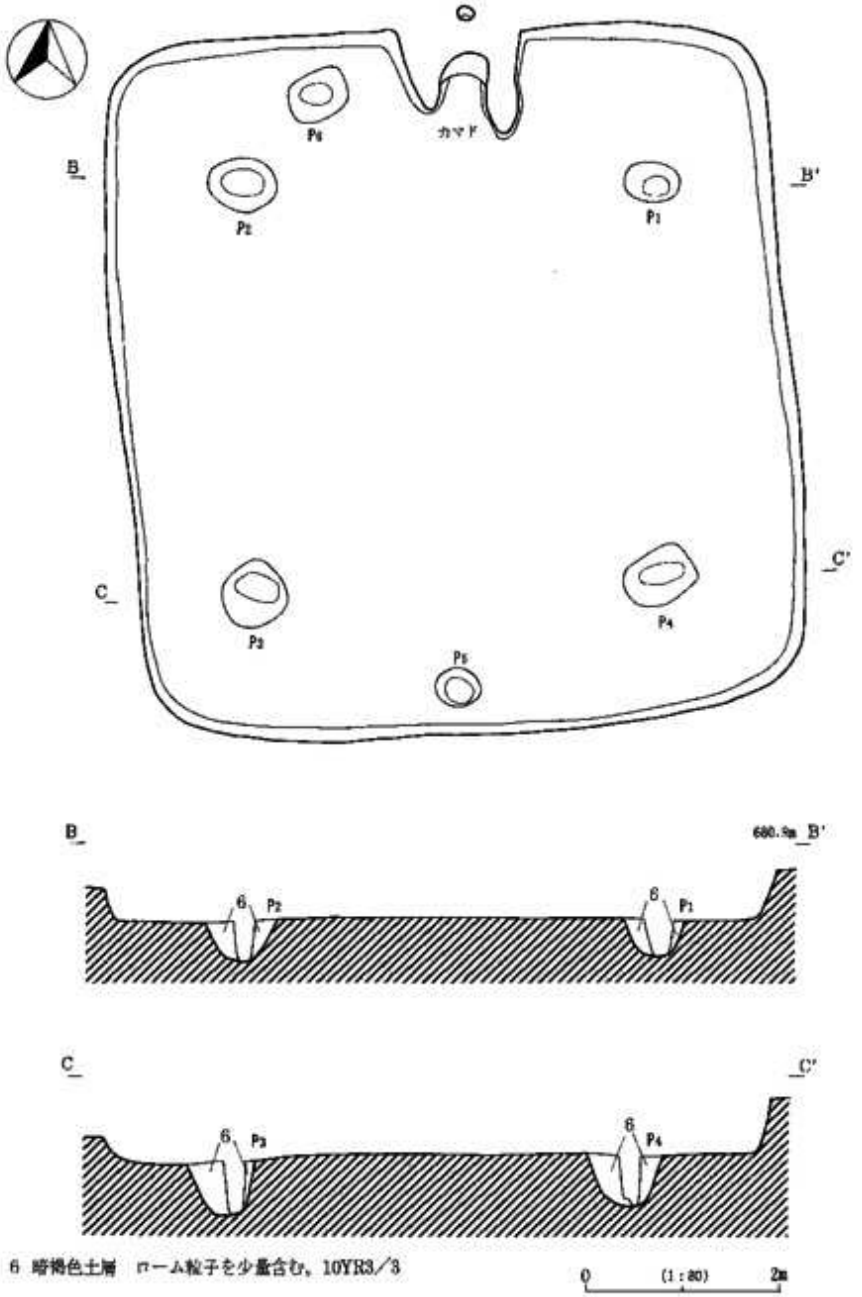


土層説明

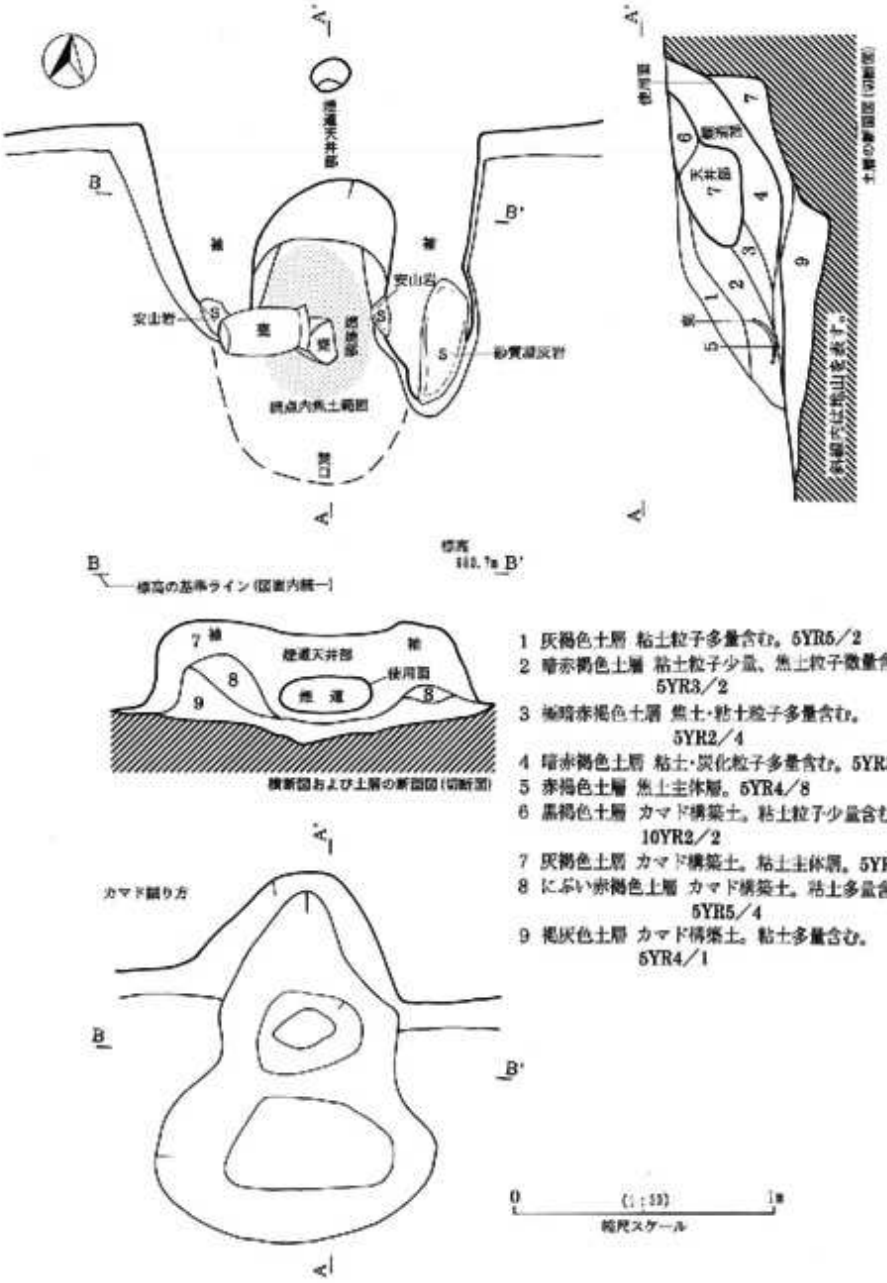
1 黒褐色土層　ローム粒子を微量含む。10YR2／2
2 暗褐色土層　ローム粒子を少量含む。10YR3／3
3 にぶい赤褐色土層　粘土粒子を少量含む。5YR4／3
4 灰褐色土層　粘土粒子を多量含む。5YR5／2
5 極暗赤褐色土層　粘土・焦土・炭化粒子微量含む。5YR2／3

0　(1：80)　2m
縮尺スケール

第111図　H９号住居址実測図



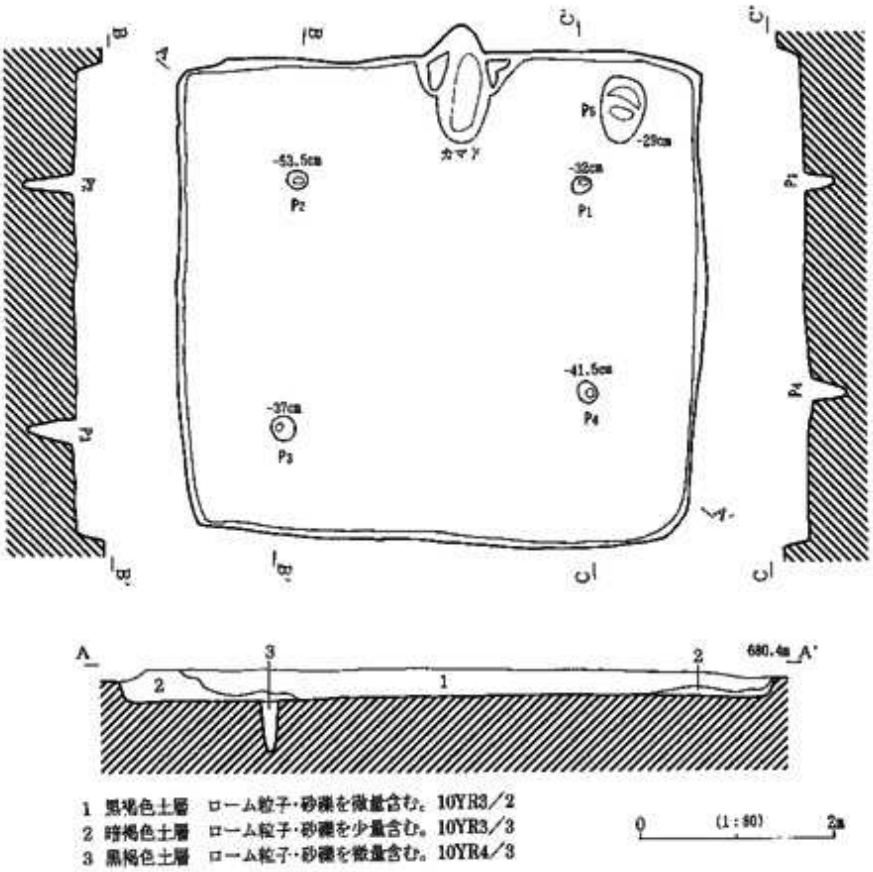
第112図　H 9 号住居址実測図（ピット完掘）



第113図　H９号住居址カマド実測図

H10号住居址

H10号住居址は、調査区の西側、ウ～オ－20～22グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、Y30号住居址を破壊する。

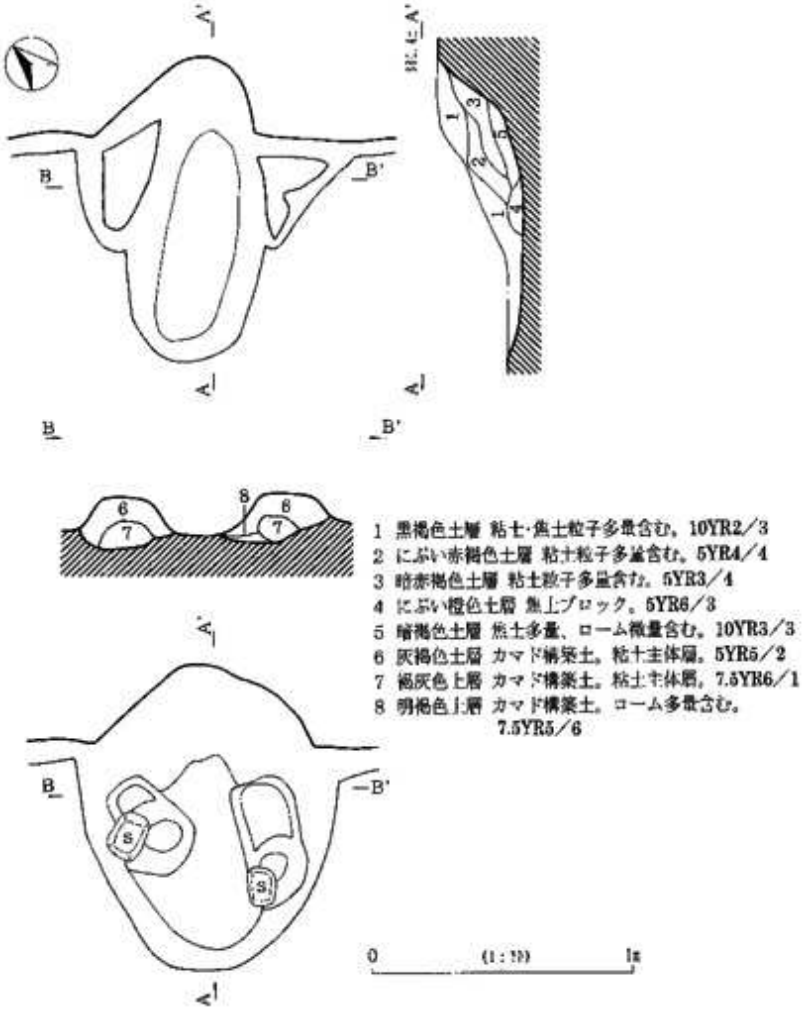


第114図　H10号住居址実測図

平面の形態は東西にやや長い方形で、規模は南北が510cm・東西は546cmを測る。住居址の向きは北東－南西方向を指し、北より東へ42.5°ずれる。床の面積は24.83㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は2層に分割された。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは21～33cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、貯蔵穴1個（P_5）の計5個が検出された。



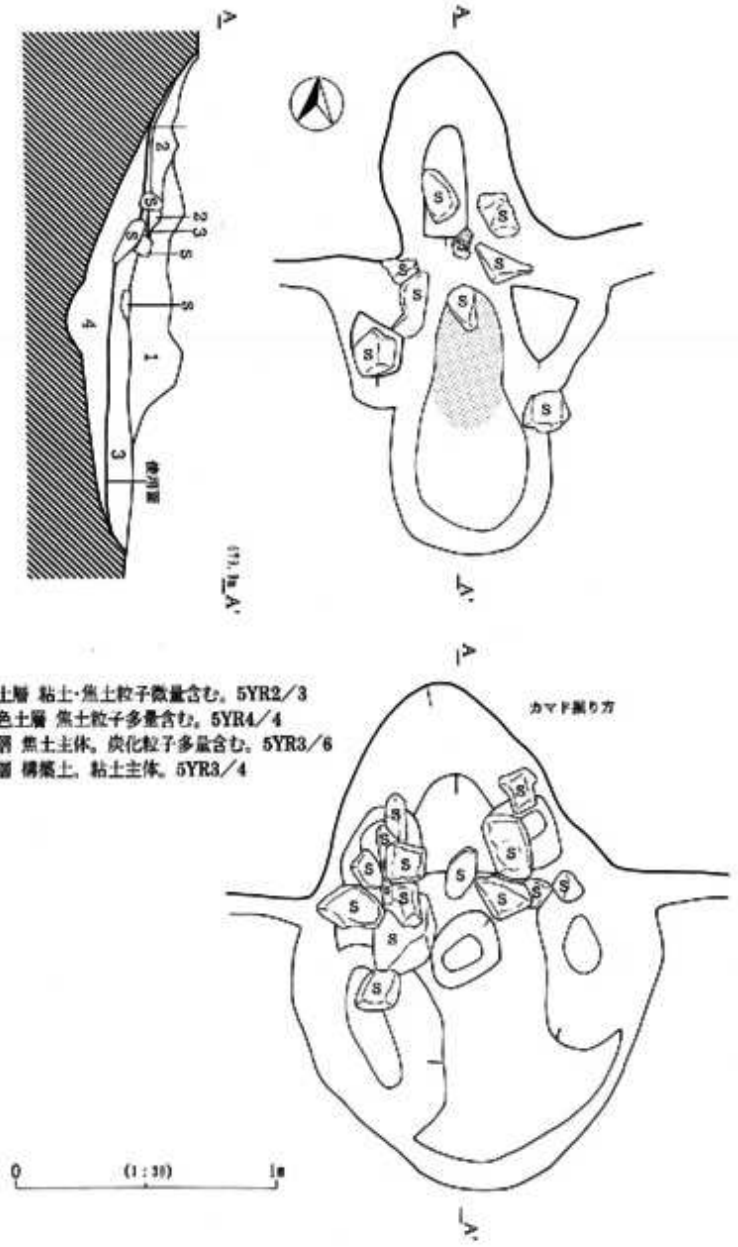
第115図　H10号住居址カマド実測図

カマドは住居址の北壁の中央やや東寄りで検出された。残存状況はきわめて悪く、左右の両袖の壁側が残存しているのみであった。規模は煙道出口から焚口までの全長が117cmで、袖部の幅が95cmを測る。また残存する右袖は長さ35cmで、左袖は長さ46cmを測る。上層は全部で8層に分割され、この内第6～8層は構築土である。袖は粘土を中心に構築され、左右ともに安山岩が構築材として使用されていた。

遺物は、甕・坏といった土師器、擦り石などが出土した。

以上より本住居址は、古墳時代の後期と考えられる。

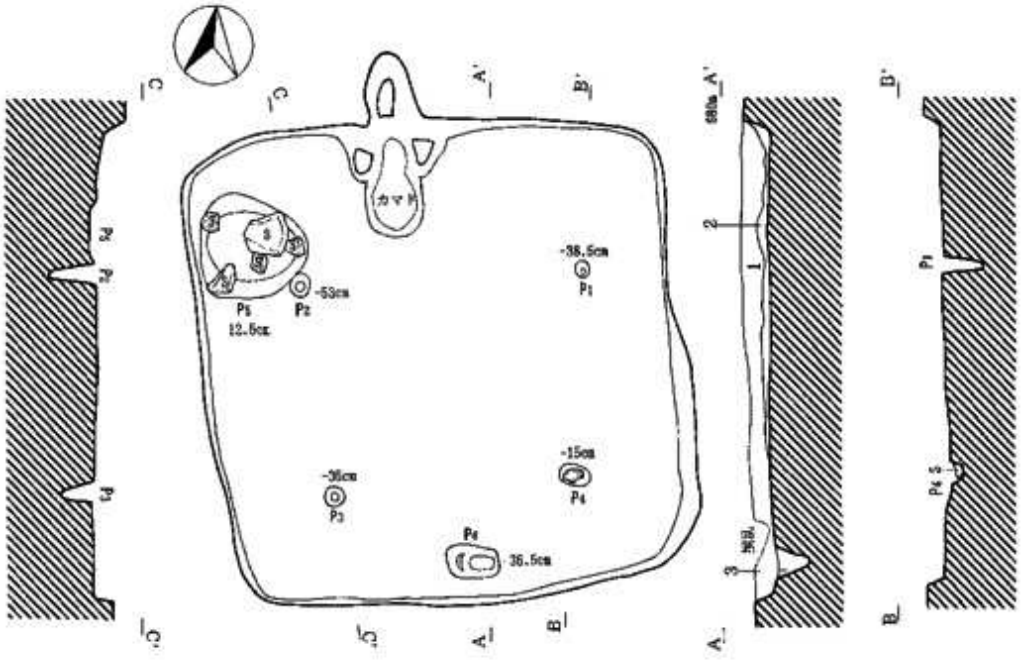
・住居址平面図→103・104ページ　　・遺物実測図→325ページ
・住居址写真→398・399ページ　　・遺物写真→511ページ



第116図　H１号住居址カマド実測図

3　平安時代の竪穴住居址

Ｈ１号住居址



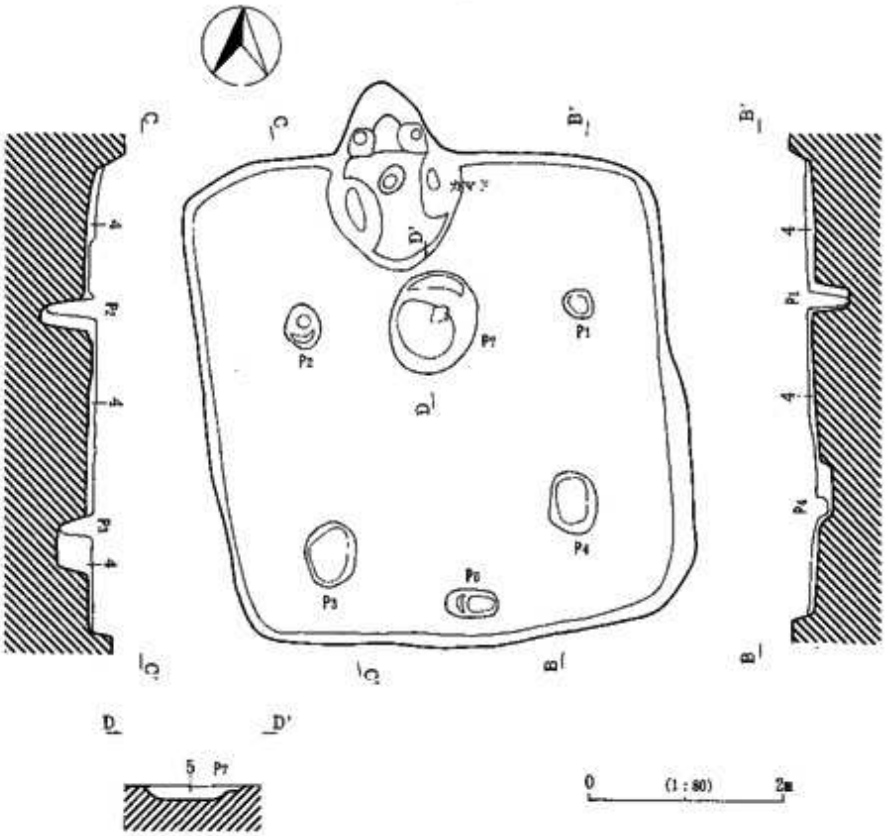
第117図　Ｈ１号住居址実測図

Ｈ１号住居址は、調査区の北西部、エ・カ－36・37グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北が504cm・東西は497cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ9.5°ずれる。床の面積は20.73㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は３層に分割された。床はおおむね平坦で、床面の全面にわたり貼床が検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは13～28cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）、貯蔵穴１個（P_5）、入口施設に伴うと考えられるピット１個（P_6）、床下土坑（ゆかしたどこう）１個（P_7）の計７個が検出された。ピットはP_7を除き、貼床に使用されたのと



4 暗褐色土層　コーム少量含む。10YR3/3
5 暗褐色土層　灰・炭化粒子多量含む。10YR2/2

第118図　H1号住居址実測図（掘り方）

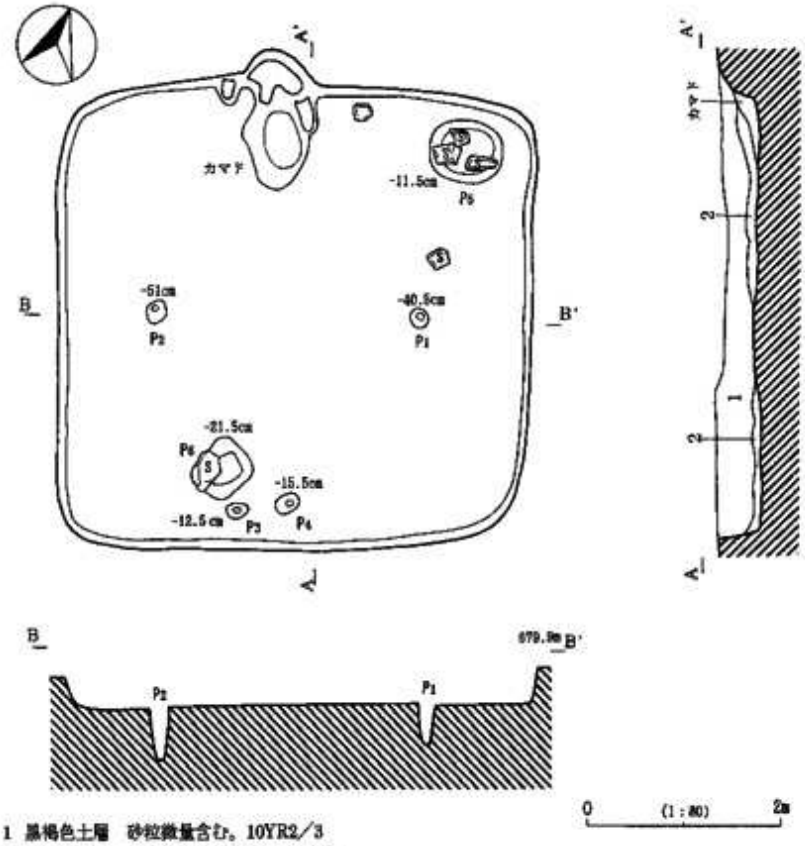
同じ土で柱を埋め込んでいる。またP_4には礎石（安山岩）が設けられていた。P_7は貼床の下から検出され、床下土坑と考えられる。本土坑は底部で甕状の植物を多量に燃やした後に第5層の土砂により人為的に埋められており、住居を掘削した直後に何らかの祭祀を行った可能性がある。

カマドは住居址の北壁の中央やや西寄りで検出された。残存状況はきわめて悪く、左右の両袖が残るのみだった。規模は煙道出口から焚口までの全長が191.5cmで、袖部の幅が103cmを測る。また残存する右袖は長さ54cmで幅38cm、左袖は長さ57cmで幅36cmを測る。土層は全部で4層に分割され、この内第4層は構築土である。袖は粘土を中心に構築され、両袖ともに安山岩を構築材として使用していた。なお袖石は残存していなかった。

遺物は、甕・坏といった土師器、須恵器製の甕・耳皿、灰釉陶器、擦り石などが出土した。
以上より本住居址は、平安時代の中期と考えられる。

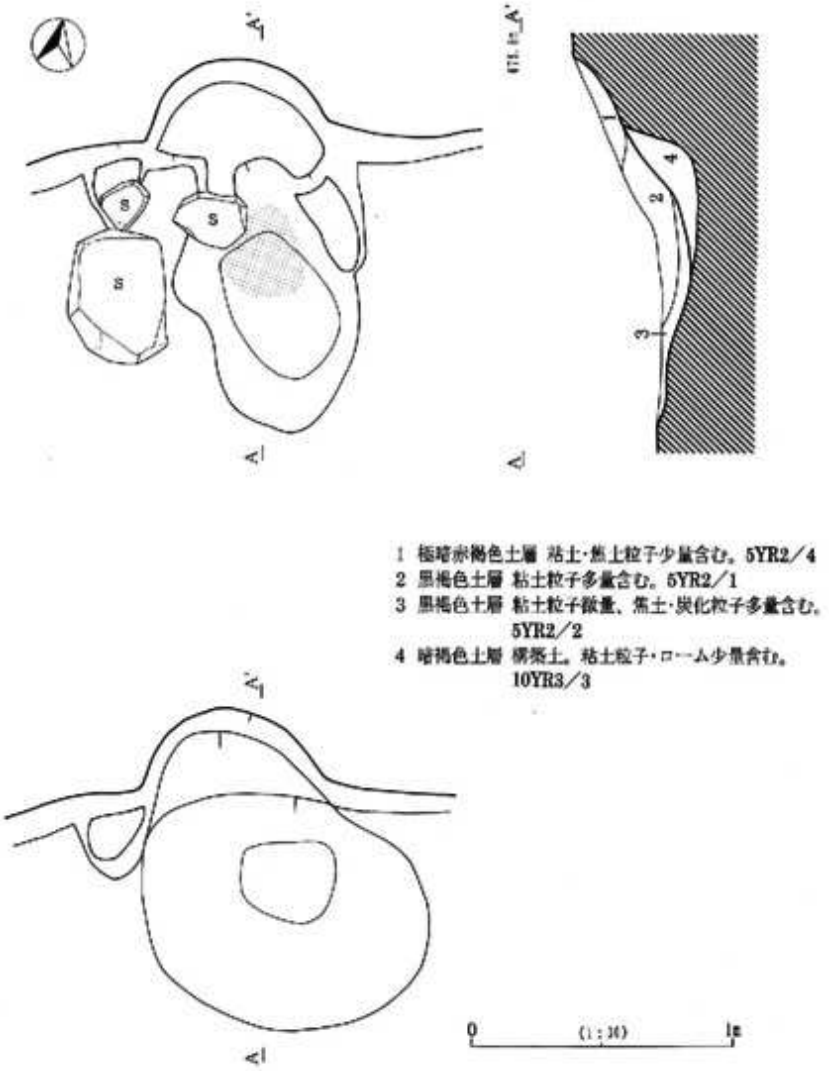
・住居址平面図→105～107ページ　・遺物実測図→289～296ページ
・住居址写真→392ページ　・遺物写真→486～489ページ

Ｈ２号住居址



1 黒褐色土層　砂粒微量含む。10YR2／3
2 暗褐色土層　ローム多量含む。10YR3／4

第119図　Ｈ２号住居址実測図



第120図　H２号住居址カマド実測図

H２号住居址は、調査区の北西部、ウ・エ－35・36グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、Y39・40・41号住居址を破壊する。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北が483cm・東西は492cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ23.5°ずれる。床の面積は20.76㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は２層に分割された。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは18.5～42cmを測る。壁は全体

層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴2個（P_1～P_2）、貯蔵穴2個（P_5・P_6）、入口施設に伴うと考えられるピット2個（P_3・P_4）の計6個が検出された。

カマドは住居址の北壁の中央やや西寄りで検出された。残存状況はきわめて悪く、左右の両袖の一部が残るのみだった。規模は煙道出口から焚口までの全長が144.5cmで、袖部の幅が103.5cmを測る。また残存する右袖は長さ57cmで幅26.5cm、左袖は長さ35cmで幅20.5cmを測る。土層は全部で4層に分割され、この内第4層は構築土である。袖は粘土を中心に構築され、左袖は安山岩を構築材として使用していた。なお袖石は残存していなかった。

遺物は、甕・坏といった土師器、須恵器製の坏、刀子・鉄鏃などが出土した。また覆土中より、馬歯と思われる獣骨が出土した。

以上より本住居址は、平安時代の前期と考えられる。

・住居址平面図→108・109ページ　・遺物実測図→297・298ページ
・住居址写真→393ページ　・遺物写真→489～491ページ

H3号住居址

H3号住居址は、調査区の西側の中央部、ケ・コ－36～38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北が488cm・東西は501cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より東へ1.5°ずれる。床の面積は21.33㎡を測る。

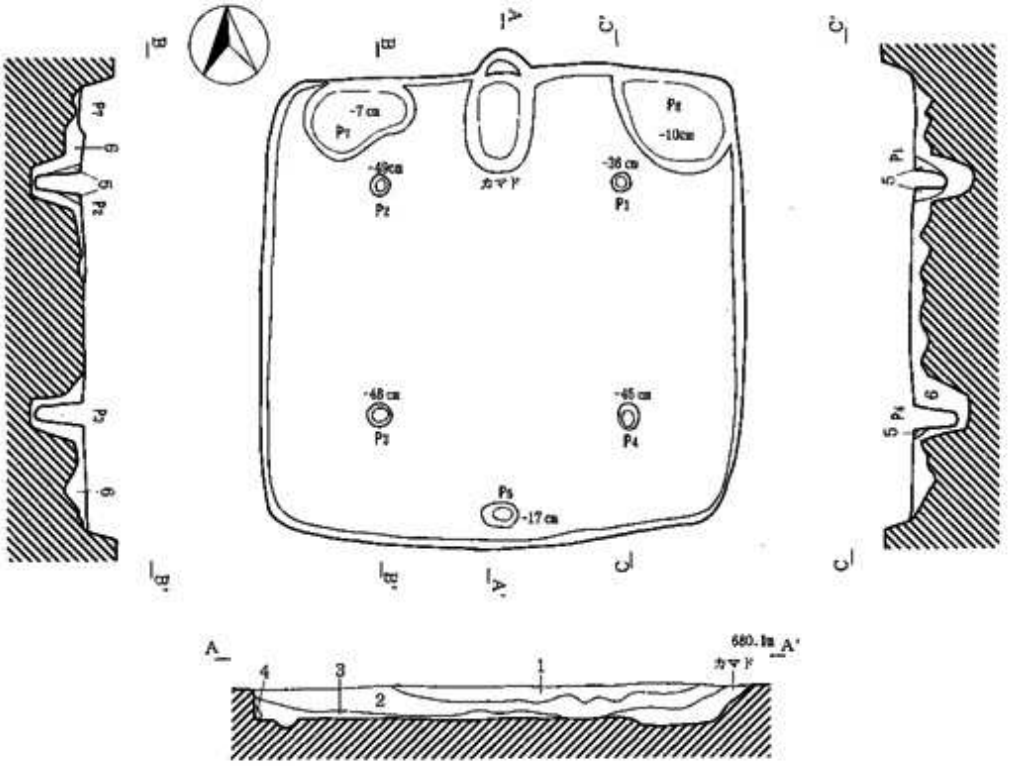
住居址の検出面から床までの土層は4層に分割された。床はおおむね平坦で、ほぼ床の全面にわたり貼床が検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは25～37cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、貯蔵穴2個（P_6・P_7）、入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_5）の計7個が検出された。主柱穴は掘り方が二重に確認された。ひとつは住居址を掘り込んだ時の掘り方で、もうひとつは住居址の床を貼った時の掘り方である。

カマドは住居址の北壁の中央で検出された。残存状況はきわめて悪く、袖は残存していなかった。規模は煙道出口から焚口までの全長が129cmで、燃焼部付近の掘り込みの幅が72cmを測る。土層は全部で4層に分割され、この内第3・4層は構築土である。

遺物は、甕・坏といった土師器、須恵器製の坏・蓋・甕、砥石などが出土した。

以上より本住居址は、平安時代の前期と考えられる。



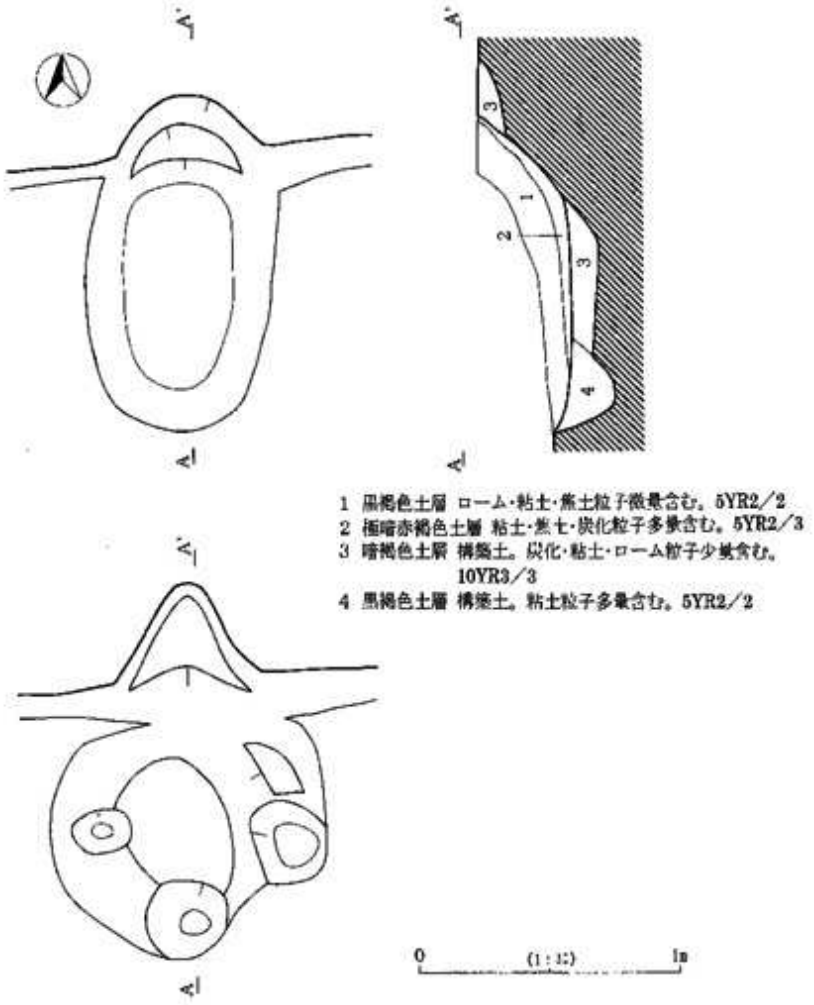
第121図　H３号住居址実測図

・住居址平面図→111・112ページ　　・遺物実測図→299・300ページ
・住居址写真→394ページ　　・遺物写真→491ページ

H４号住居址

H４号住居址は、調査区の西側の中央部、ス・セ－38～39グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、H11号住居址を破壊する。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北が373cm・東西は424cmを測る。住居址の向きは南北

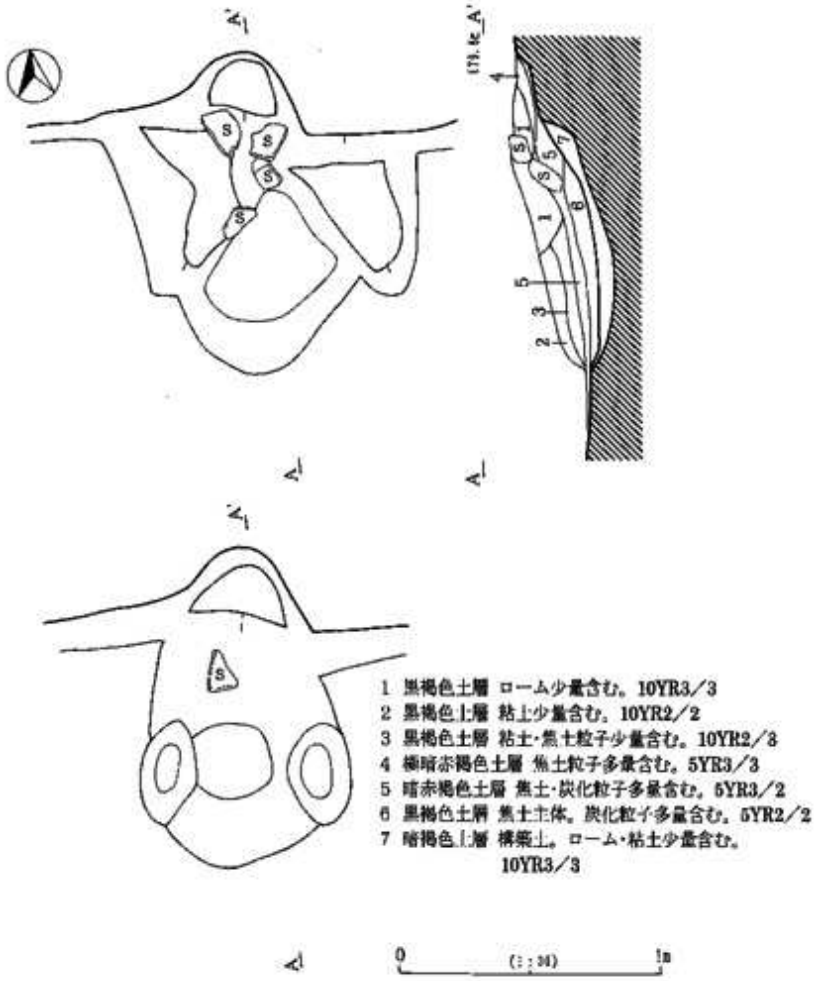


第122図　H 3 号住居址カマド実測図

方向を指し、北より東へ8°ずれる。床の面積は13.54㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は3層に分割された。この内第3層はカマドの上層である。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは21～36cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、入口施設に伴うと考えられるピット1個（P_5）の計5個が検出された。

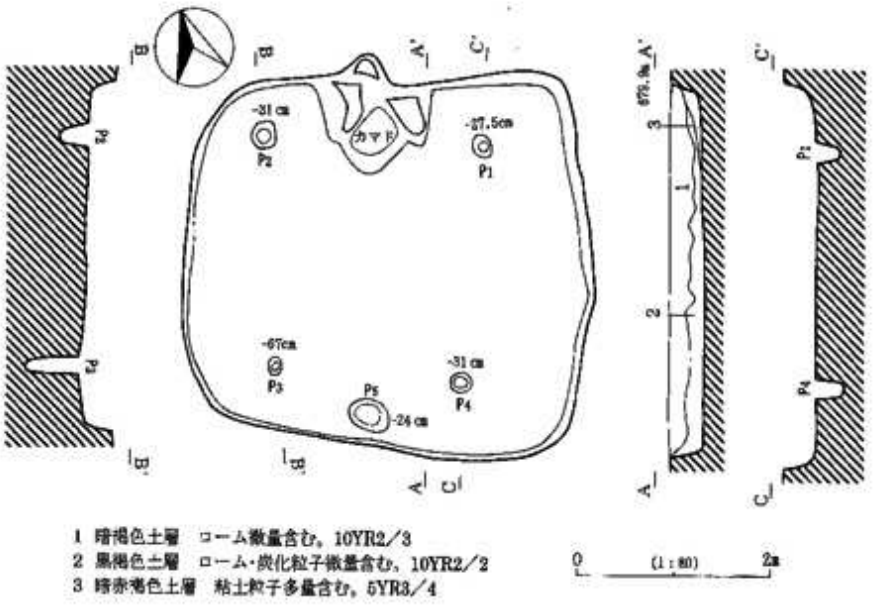


第123図　H４号住居址カマド実測図

カマドは住居址の北壁の中央やや西寄りで検出された。残存状況はきわめて悪く、両袖の一部が残存しているのみであった。規模は煙道出口から焚口までの全長が123cmで、袖部の幅が110.5cmを測る。また残存する右袖は長さ63cmで幅42cm、左袖は長さ73cmで幅45cmを測る。土層は全部で７層に分割され、この内第７層は構築土である。袖は粘土を中心に構築され、左袖は安山岩を構築材として使用していた。なお袖石は残存していなかった。

遺物は、甕・坏といった土師器、須恵器製の坏、灰釉陶器、刀子、砥石などが出土した。

以上より本住居址は、平安時代の中期と考えられる。



第124図　H 4 号住居址実測図

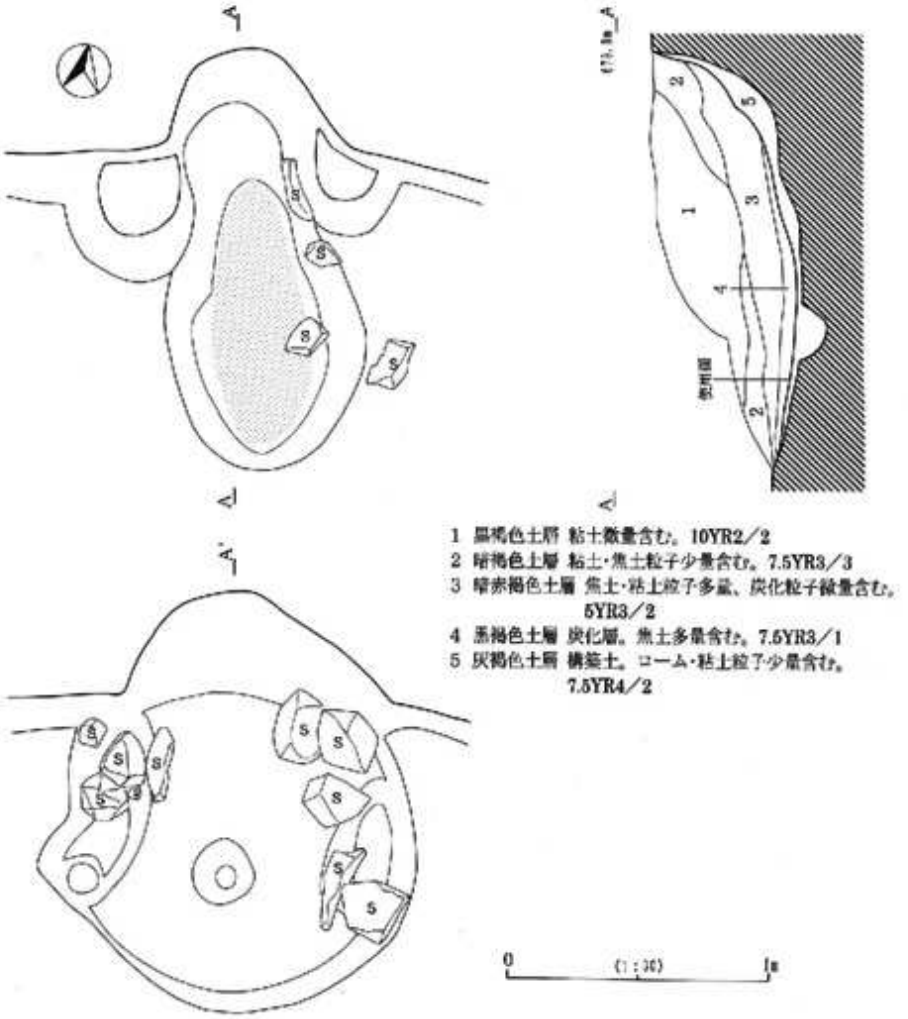
・住居址平面図→113・114ページ　　・遺物実測図→301～303・305ページ
・住居址写真→394・395ページ　　・遺物写真→492～494ページ

H 5 号住居址

H 5 号住居址は、調査区の北西部、カ～クー36・37グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北が558cm（南側張り出し部を含めると581cm）・東西は483cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ8°ずれる。床の面積は23.26㎡を測る。

住居址の検出面から床までの十層は4層に分割された。この内第4層はカマドの上層である。床はおおむね平坦で、床の全面にわたり貼床が検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは33.5～45.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

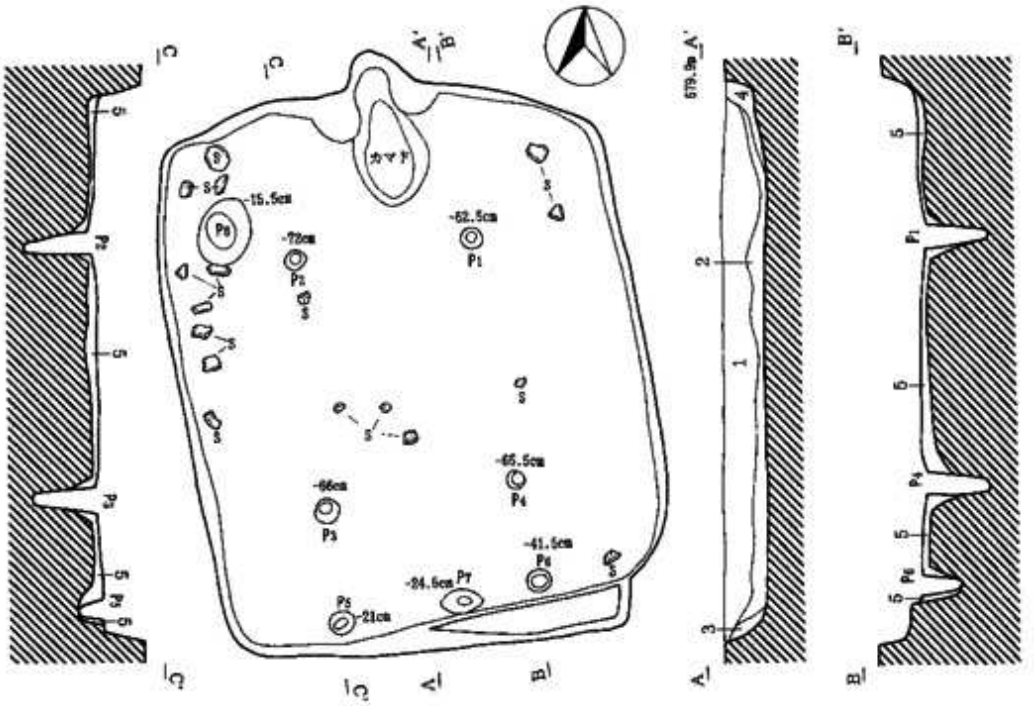


第125図　H５号住居址カマド実測図

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）、補助柱穴２個（P_5・P_6）、入口施設に伴うと考えられるピット１個（P_7）、貯蔵穴１個（P_8）の計８個が検出された。

図中の床面に散在する安山岩は、すべて床面に食い込んでおり、何らかの意図をもって設置されたと考えられる。

カマドは住居址の北壁の中央で検出された。残存状況はきわめて悪く、両袖の一部が残存しているのみであった。規模は煙道出口から焚口までの全長が161㎝で、袖部の幅が123㎝を測る。



1 黒褐色土層　砂粒を微量含む。10YR2／2
2 黒褐色土層　砂粒・炭化粒子を微量含む。10YR2／3
3 暗褐色土層　ローム少量含む。10YR3／3
4 暗赤褐色土層　ローム少量含む。5YR3／2
5 にぶい黄褐色土層　貼床。ローム多量含む。10YR4／3

第126図　H５号住居址実測図

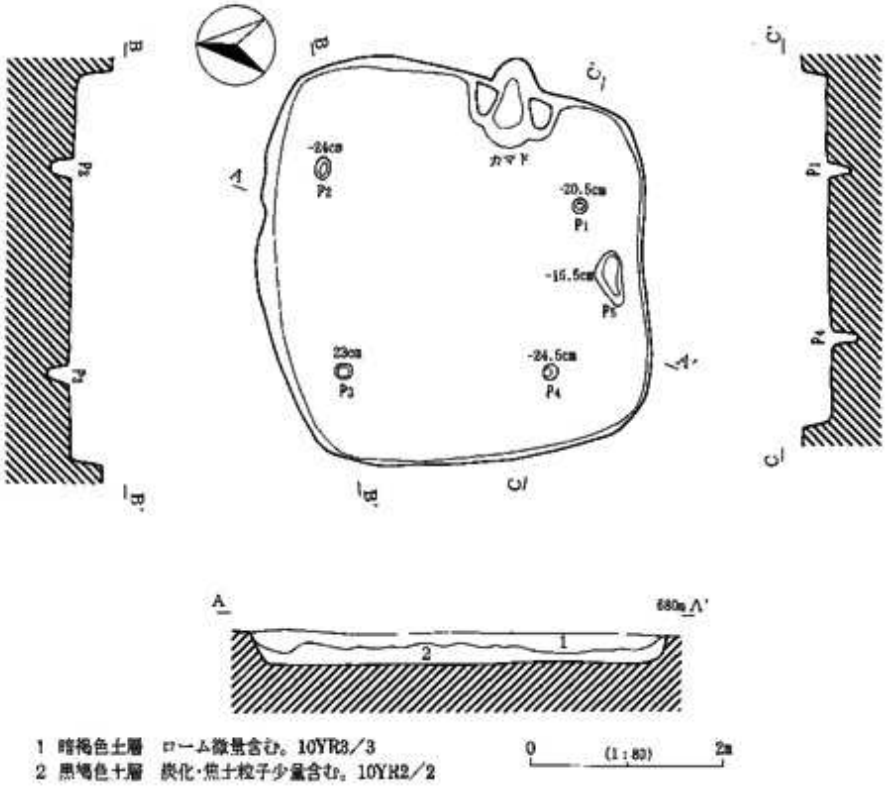
また残存する右袖は長さ34cmで幅44cm、左袖は長さ51cmで幅49.5cmを測る。土層は全部で５層に分割され、この内第５層は構築土である。袖は粘土を中心に構築され、両袖ともに安山岩を構築材として使用していた。

遺物は、甕・坏といった土師器、須恵器製の坏・甕、灰柚陶器、刀子、鎌、砥石などが出土した。

以上より本住居址は、平安時代の中期と考えられる。

・住居址平面図→115・116ページ　　・遺物実測図→306～313ページ
・住居址写真→395ページ　　・遺物写真→495～500ページ

Ｈ６号住居址



第127図　Ｈ６号住居址実測図

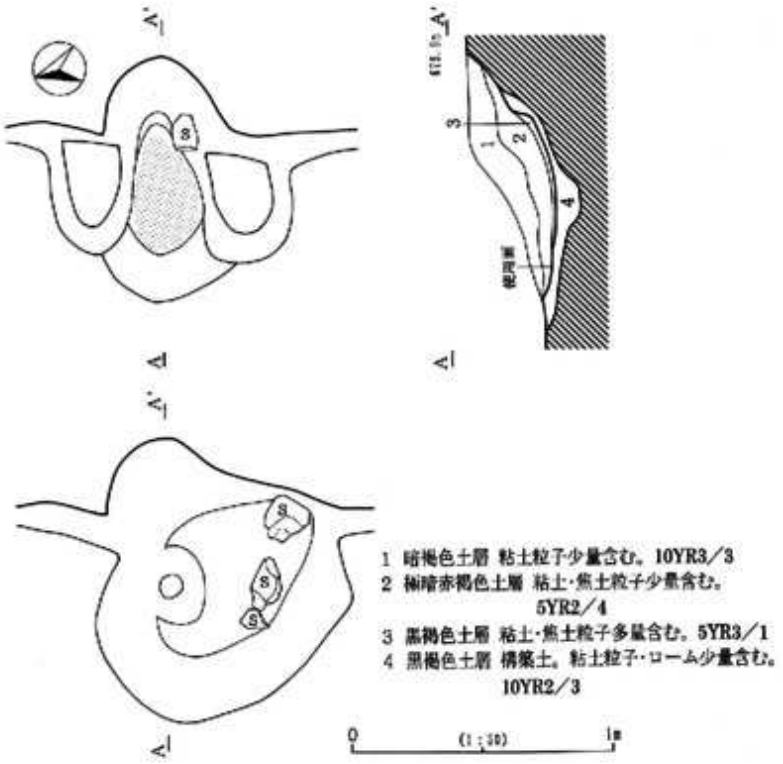
Ｈ６号住居址は、調査区の北西部、ス・セ－36・37グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、Ｙ１号・Ｙ９号住居址を破壊する。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北が403cm・東西は401cmを測る。住居址の向きは東西方向を指し、東より北へ２°ずれる。床の面積は13.25㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は２層に分割された。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは16～37cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）、入口施設に伴うと考えられるピット１個（P_5）の計５個が検出された。

カマドは住居址の東壁の中央やや南寄りで検出された。残存状況はきわめて悪く、両袖の一部



第128図　H６号住居址カマド実測図

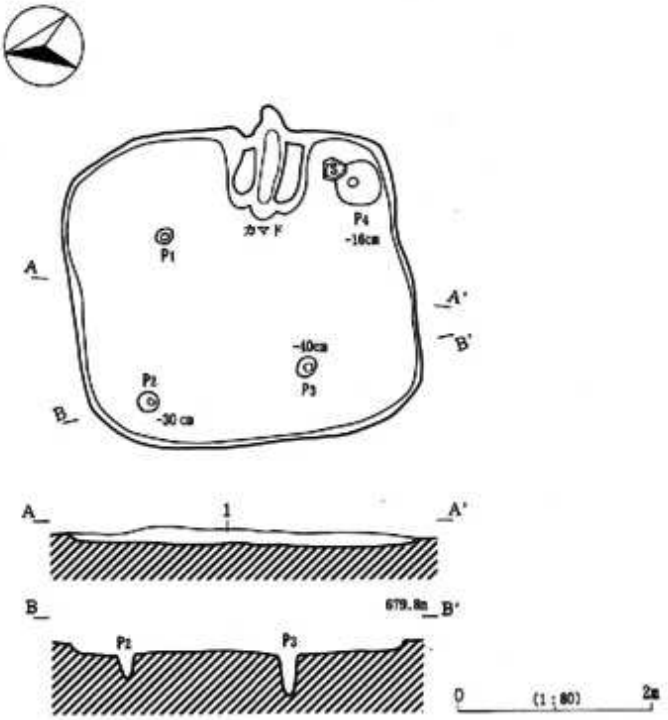
が残存しているのみであった。規模は煙道出口から焚口までの全長が93cmで、袖部の幅が91.5cmを測る。また残存する右袖は長さ48cmで幅35cm、左袖は長さ42.5cmで幅32cmを測る。土層は全部で４層に分割され、この内第４層は構築土である。また焦土・炭化層は燃焼部を中心に３mm以下で確認された。袖は粘土を中心に構築され、右袖は安山岩を構築材として使用していた。

遺物は、甕・坏といった土師器、須恵器製の坏、擦り石などが出土した。

以上より本住居址は、平安時代の中期と考えられる。

・住居址平面図→117・118ページ　　・遺物実測図→313・314・316ページ
・住居址写真→396ページ　　・遺物写真→500～502ページ

Ｈ７号住居址



1 黒褐色土層　焦土・炭化粒子・炭化材小片少量、ローム微量含む。10YR2／2

第129図　Ｈ７号住居址実測図

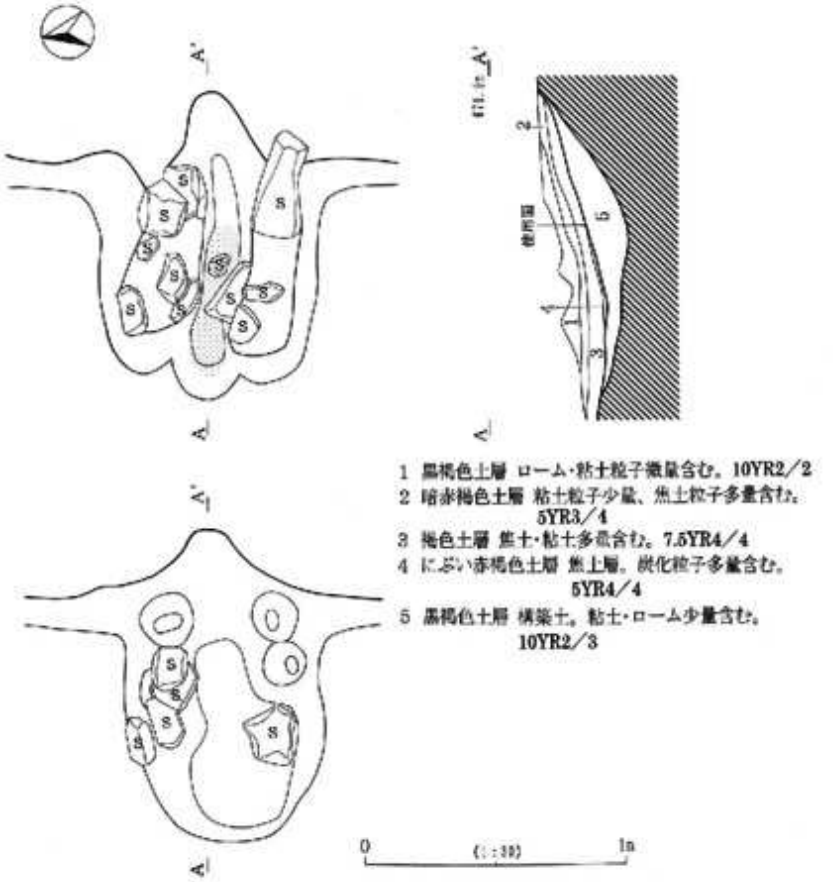
Ｈ７号住居址は、調査区の西側、タ・チ－37・38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、Y42号住居址を破壊する。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北が343cm・東西は328cmを測る小型の住居址である。住居址の向きは東西方向を指し、東より南へ5.5°ずれる。床の面積は9.49㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は１層のみが確認された。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは３～13.5cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴３個（P_1～P_3）、貯蔵穴１個（P_4）の計４個が検出された。

カマドは住居址の東壁の中央やや南寄りで検出された。残存状況は悪く、両袖が残存している



第130図　H７号住居址カマド実測図

のみであった。規模は煙道出口から焚口までの全長が117cmで、袖部の幅が83.5cmを測る。また残存する右袖は長さ82cmで幅30cm、左袖は長さ82cmで幅39cmを測る。土層は全部で５層に分割され、この内第５層は構築土である。袖は粘土を中心に構築され、両袖ともに多くの安山岩を構築材として使用していた。

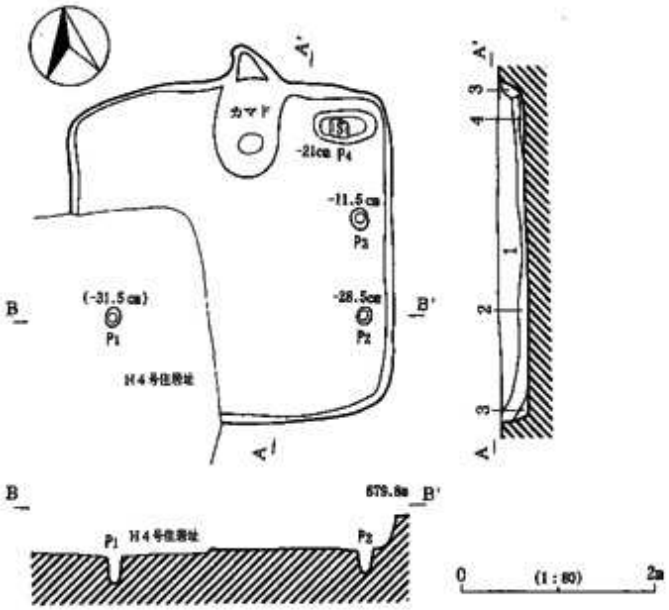
本住居址は、覆土中に焦土や炭化材の小片を含み、床面の直上に焦土と炭化層が0.5～１cm以下で確認された。また土器の中にも火熱を受けたものが認められる。よって本住居址は、焼失あるいは焼却されたと考えられる。

遺物は、甕・坏といった土師器、灰釉陶器などが出土した。

以上より本住居址は、平安時代の中期と考えられる。

・住居址平面図→119・120ページ　　・遺物実測図→316・317ページ
・住居址写真→396・397ページ　　・遺物写真→502～504ページ

H11号住居址



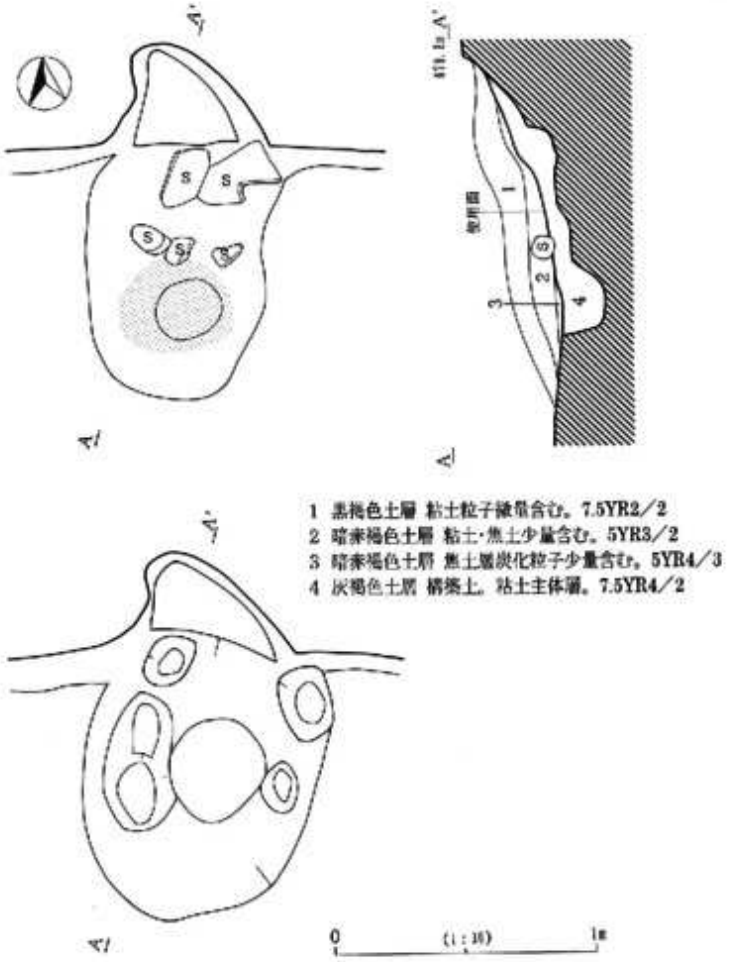
1 暗褐色土層　ローム微量含む。10YR3/3
2 黒褐色土層　ローム・炭化・焦土粒子微量含む。10YR2/3
3 褐色土層　ローム多量含む。10YR4/6
4 極暗赤褐色土層　粘土粒子多量含む。5YR2/4

第131図　H11号住居址実測図

H11号住居址は、調査区の西側、ス・セー38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、H4号住居址により南西部を破壊される。

平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北が354cm・東西は329cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より東へ6°ずれる。現存する床の面積は7.42㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は4層に分割された。この内第4層はカマドの土層である。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床まで



第132図　H11号住居址カマド実測図

の高さは現存部分で23.5～32cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴3個（P_1～P_3）、貯蔵穴1個（P_4）の計4個が検出された。

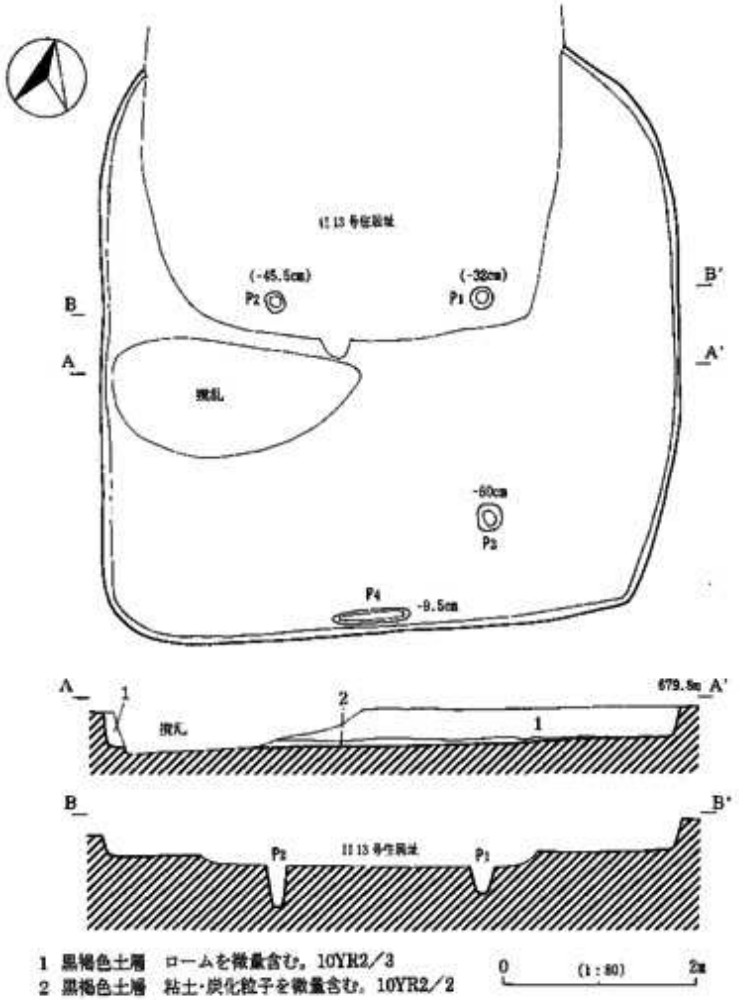
カマドは住居址の北壁の中央やや東寄りで検出された。残存状況はきわめて悪く、燃焼部が残存しているのみであった。規模は煙道出口から焚口までの全長が131cmを測る。土層は全部で4層に分割され、この内第4層は構築土である。

遺物は、甕・坏といった土師器などが出土した。

以上より本住居址は、平安時代の中期と考えられる。

・住居址平面図→121・122ページ　・遺物実測図→326・327ページ
・住居址写真→399ページ　・遺物写真→512ページ

H12号住居址



第133図　H12号住居址実測図

H12号住居址は、調査区の北西部、エ・オ－37～39グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、H13号住居址により北側を破壊される。

平面の形態は隅の丸い方形と考えられ、規模は南北が現存で585cm・東西は594cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ16°ずれる。現存する床の面積は20.765㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は２層に分割された。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは現存部分で28.5～46cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴３個（P_1～P_3）、入口施設に伴うと考えられるピット１個（P_4）の計４個が検出された。

遺物は、甕・坏といった土師器、須恵器製の坏・甕、灰柚陶器、土錘（どすい）、麻引（おびき）金具、擦り石などが出土した。また覆土中より馬の歯と考えられる獣骨が出土した。

以上より本住居址は、平安時代の中期と考えられる。

・住居址平面図→123ページ　　・遺物実測図→328～336ページ
・住居址写真→400ページ　　・遺物写真→512～520ページ

H13号住居址

H13号住居址は、調査区の北西部、ウ・エ－37～39グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本住居址は、H12号住居址を破壊する。

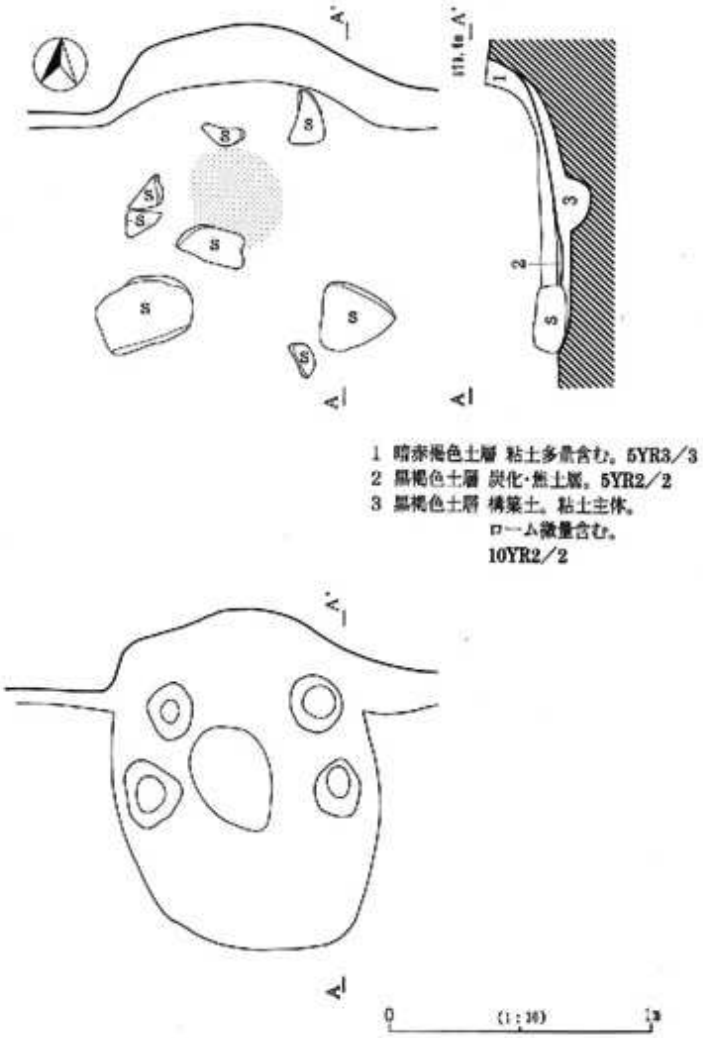
平面の形態は南北に長い隅の丸い長方形で、規模は南北が494cm・東西は439cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より西へ8.5°ずれる。また床の面積は18.195㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は１層のみが確認された。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは４～45cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴４個（P_1～P_4）、補助柱穴１個（P_5）、入口施設に伴うと考えられるピット１個（P_6）、貯蔵穴１個（P_7）の計７個が検出された。

カマドは住居址の北壁の中央やや東寄りで検出された。残存状況はきわめて悪く、燃焼部が残存しているのみで、袖の構築材と考えられる安山岩が燃焼部を中心に散乱していた。規模は煙道出口から焚口までの全長が推定で120cm前後を測る。上層は全部で３層に分割され、この内第３層は構築土である。

遺物は、甕・坏といった土師器、須恵器製の坏・甕、灰柚陶器、鉄鏃などが出土した。

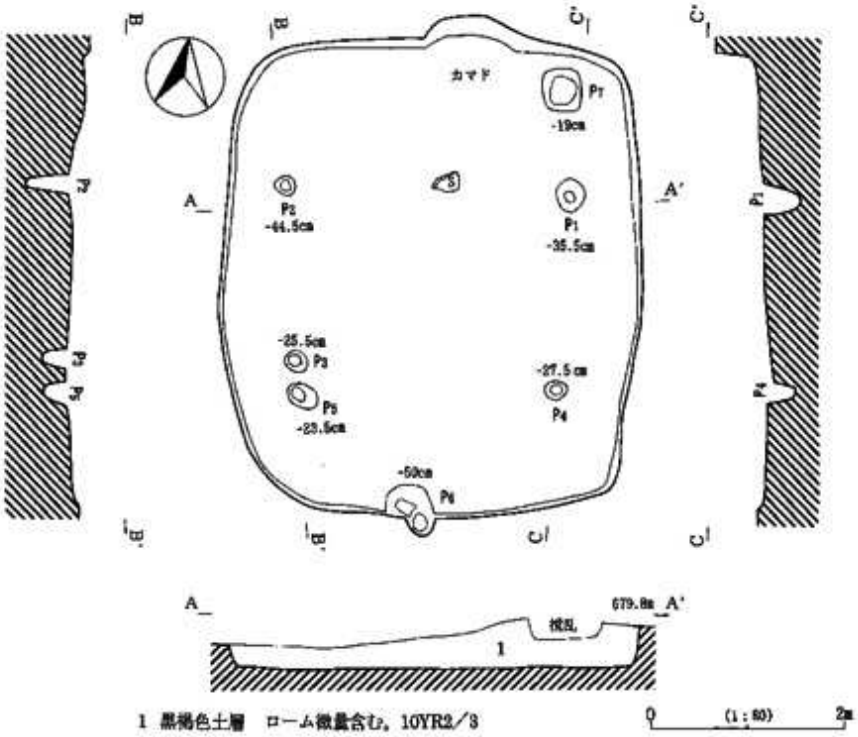


第134図　H13号住居址カマド実測図

以上より本住居址は、平安時代の中期と考えられる。

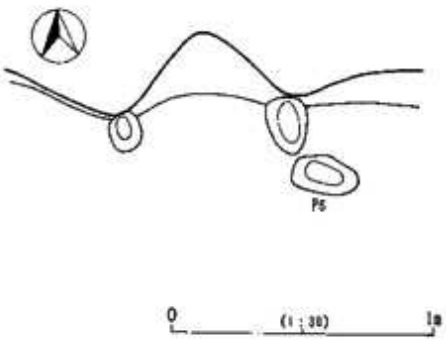
・住居址平面図→125・126ページ　　・遺物実測図→336～340ページ

・住居址写真→400ページ　　・遺物写真→521～523ページ

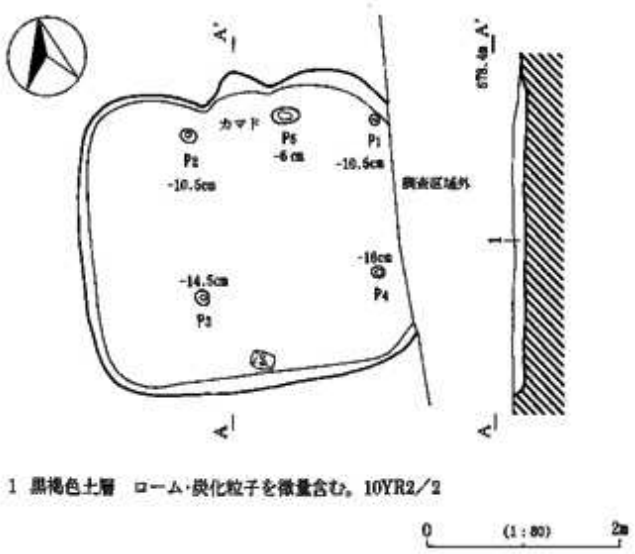


第135図　H13号住居址実測図

H14号住居址



第136図　H14号住居址カマド実測図



第137図　H14号住居址実測図

H14号住居址は、調査区の最西端（全体図参照）に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は隅の丸い方形で、規模は南北が316cm・東西は調査値で328cmを測る。住居址の向きは南北方向を指し、北より東へ6°ずれる。また床の面積は調査値で8.77㎡を測る。

住居址の検出面から床までの土層は1層のみが確認された。床はおおむね平坦で、貼床は検出されなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床までの高さは2～20cmを測る。壁は全体層序第Ⅲ層の黄褐色砂質ロームを利用し、平滑であるが軟弱であった。

ピットは主柱穴4個（P_1～P_4）、補助柱穴1個（P_5）の計5個が検出された。

カマドは住居址の北壁の中央で検出された。残存状況はきわめて悪く、燃焼部が残存しているのみであった。

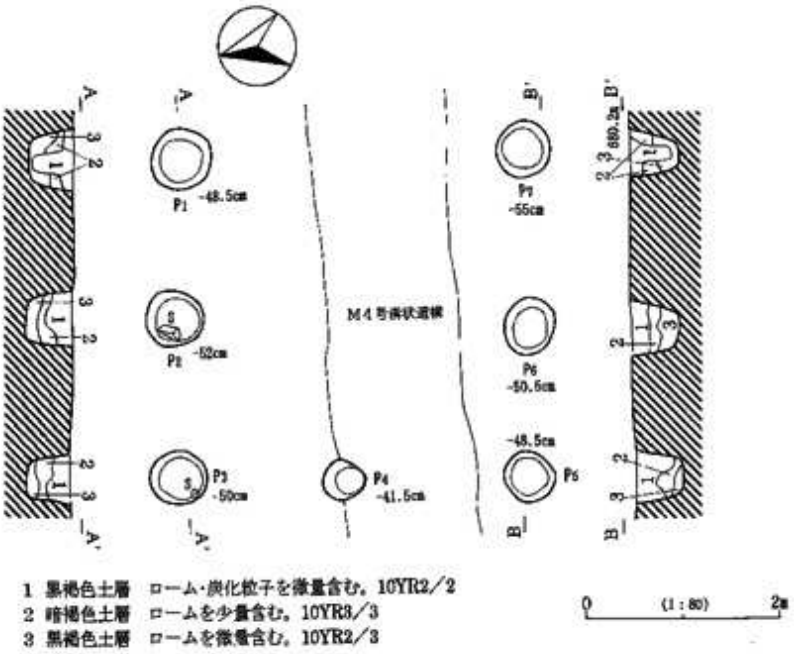
遺物は、甕・坏といった土師器などが出土した。

以上より本住居址は、平安時代の前期と考えられる。

・住居址平面図→126・127ページ　　・遺物実測図→340ページ
・住居址写真→401ページ　　・遺物写真→523ページ

4　掘立柱建物址

Ｆ１号掘立柱建物址



第138図　Ｆ１号掘立柱建物址実測図

Ｆ１号掘立柱建物址は、調査区の中央部、シ・ス－27・28グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本建物址は、Ｍ２号溝状遺構により中央部を破壊される。

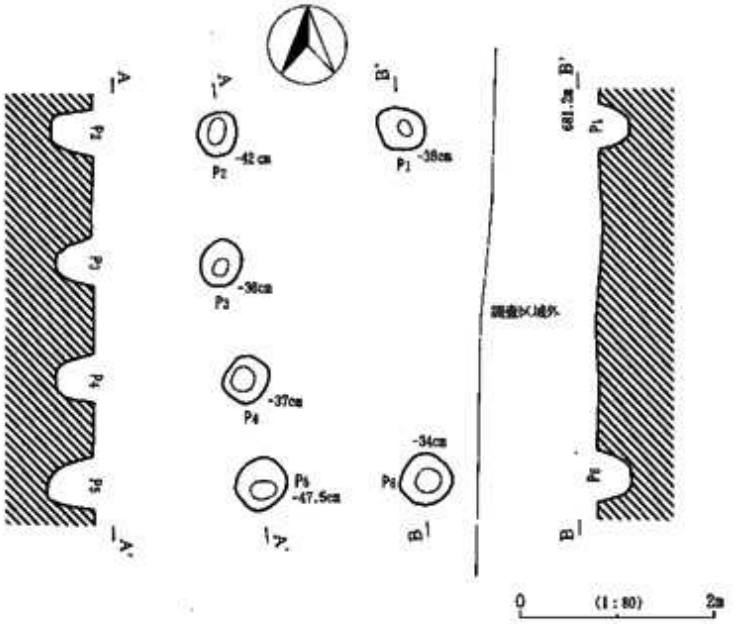
本址は、２間×２間の掘立柱建物址と考えられる。主たる柱間は、P_1－P_3で329cm、P_3－P_5で364cm、P_5－P_7で340cm、P_1－P_7で358cmを測る。建物址の向きは南北を指し、北より東へ６°ずれる。

遺物は、弥生時代の中期の土器片が出土しているが混入遺物と考えられる。

本建物址の所産期は、古墳時代あるいは平安時代と考えられる。

・建物址平面図→128ページ
・建物址写真→401ページ

Ｆ２号掘立柱建物址



第139図　Ｆ２号掘立柱建物址実測図

Ｆ２号掘立柱建物址は、調査区の中央部、コ・サ－３・４グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

主たる柱間は、P_2－P_5で374cm、P_1－P_6で363cm、建物址の向きは南北を指し、北より西へ８°ずれる。

遺物は、弥生時代の中期の土器片が出土しているが混入遺物と考えられる。

本建物址の所産期は、古墳時代あるいは平安時代と考えられる。

・建物址平面図→129ページ
・建物址写真→402ページ

Ｓ28号掘立柱建物址

S28号掘立柱建物址は、調査区の中央部、シ・ス－25・26グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ

層上面において検出された。

遺物は、弥生時代の中期の土器片が出土しているが混入遺物と考えられる。

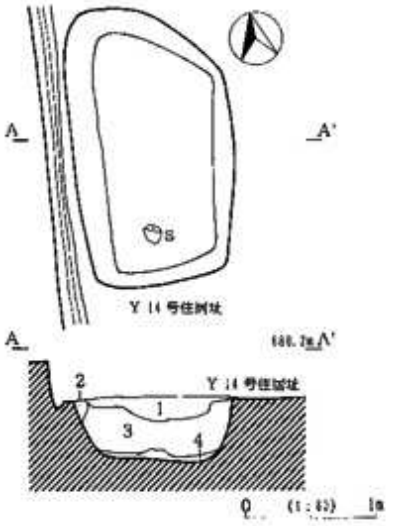
本建物址の所産期は、古墳時代あるいは平安時代と考えられる。

S29号掘立柱建物址

S29号掘立柱建物址は、調査区の東側、コ・サー6グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

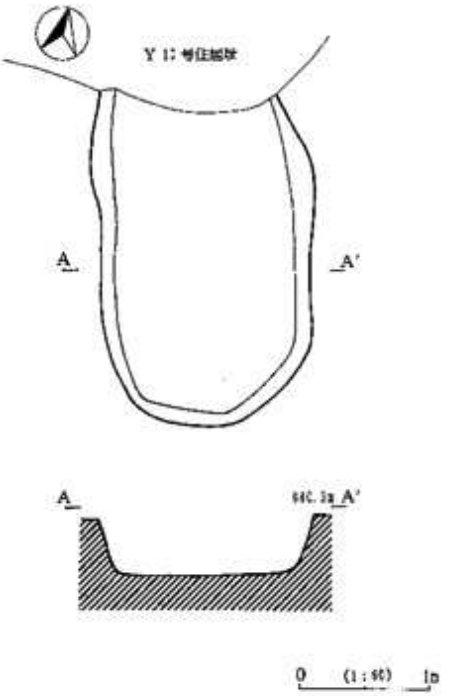
遺物は、弥生時代の中期の土器片が出土しているが混入遺物と考えられる。

本建物址の所産期は、古墳時代あるいは平安時代と考えられる。



1 黒褐色土層 ローム微量含む。人為的埋土。10YR2／3
2 褐色土層 ローム多量含む。人為的埋土。10YR6／4
3 黒褐色土層 炭化・焦土粒子少量、炭化材小片微量含む。人為的埋土。5YR2／2
4 暗赤褐色土層 焦土主体。炭化材小片多量含む。Y 14 号覆土第4層と同じ。5YR3／4

第140図 D 1 号土坑実測図



第141図 D 2 号土坑実測図

5　土坑

Ｄ１号土坑

Ｄ１号土坑は、調査区の北側の中央、キ－29・30グリッド内に位置し、Y14号住居址内より検出された。

平面の形態は南北に長い隅の丸い不整長方形で、規模は南北が210cm・東西は124cmを測る。土坑の向きは南北方向を指し、北より東へ16°ずれる。

検出面から床までの土層は４層に分割された。第１層～第３層までは人為的に埋められた土砂で、第４層はY14号住居址の覆土第４層と同一層である。

本土坑は、Y14号住居址が焼却される直前に掘り込まれており、掘り込んだ際に出た土砂が本土坑東側のY14号住居址の床面に平らにならされた状態で堆積していた。この土砂の直上と本土坑の最下層で炭化材が検出され、土砂は火熱を受け変色していた。また骨は検出されなかったが、住居址内という特殊性や、土層の様子、住居址の焼却後に土坑のみ人為的に埋められている点などから、Y14号住居址に関係の深い人物を埋葬した墓坑ではないかと推測される。

遺物は甕・壺・坏といった土器片やミニチュア土器などが出土している。

以上より本土坑の所産期は、弥生時代の中期の後半と考えられる。

・平面図→130ページ

Ｄ２号土坑

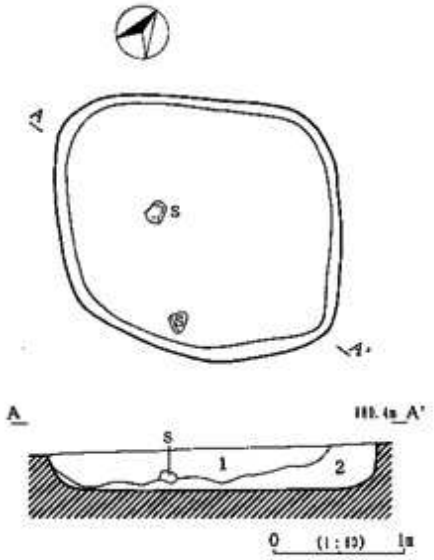
Ｄ２号土坑は、調査区の北側の中央、オ－28・29グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本土坑はY10号住居址により北側の一部を破壊される。北東隅においてY31号住居址と重複関係にあるが、ごくわずかの重複のため新旧は不明である。

平面の形態は南北に長い長楕円形で、規模は南北が現存で239cm・東西は162cmを測る。土坑の長い軸の向きは南北方向を指し、北より西へ16.5°ずれる。

遺物は弥生時代の中期の甕・壺・坏といった土器片や凹み石、砥石などが出土している。

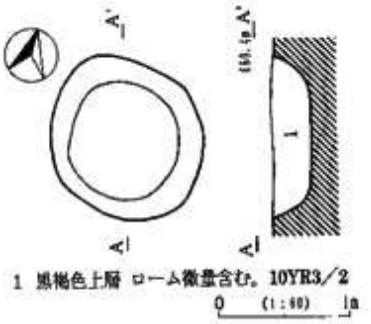
以上より本土坑の所産期は、弥生時代の中期の後半と考えられる。

・平面図→130ページ



1 暗褐色土層 ローム少量含む。10YR3／3
2 黒褐色土層 炭化・ローム粒子微量含む。10YR2／2

第142図　D３号土坑実測図



1 黒褐色土層 ローム微量含む。10YR3／2

第143図　D４号土坑実測図

D３号土坑

D３号土坑は、調査区の東側、キー19・20グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は東西に長い隅の丸い不整長方形で、規模は南北が198cm・東西は216cmを測る。土坑の長い軸の向きは北東ー南西方向を指し、北より西へ33°ずれる。

検出面から床までの土層は２層に分割された。

遺物は弥生時代の中期の甕・壺・坏といった土器片などが出土している。

以上より本土坑の所産期は、弥生時代の中期の後半と考えられる。

・平面図→132ページ

D４号土坑

D４号土坑は、調査区の東側、オー22・23グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は円形で、規模は直径115～132cmを測る。

検出面から床までの土層は１層のみが確認された。

遺物は弥生時代の中期の甕・壺・坏といった土器などが出土している。

以上より本土坑の所産期は、弥生時代の中期の後半と考えられる。

・平面図→132ページ

Ｄ５号土坑

Ｄ５号土坑は、調査区の西側、ソ－37グリッド内に位置し、Ｙ１号住居址検出面において検出された。本土坑はＹ１号住居址の一部を破壊する。

平面の形態は東西に長い楕円形で、規模は南北が101cm・東西が159cmを測る。土坑の長い軸の向きは東西方向を指し、東より北へ１°ずれる。

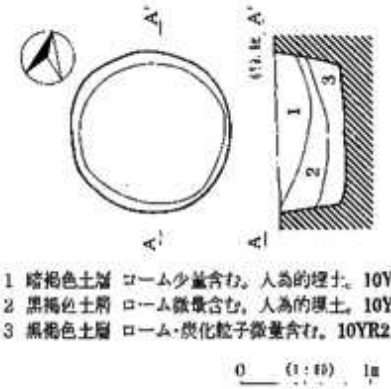
検出面から床までの土層は１層のみが確認された。

遺物は弥生時代の中期の甕・壺・高坏・片口鉢といった土器などが出土している。

以上より本土坑の所産期は、弥生時代の中期の後半と考えられる。

・平面図→133ページ

第144図　Ｄ５号土坑実測図



第145図　Ｄ７号土坑実測図

Ｄ７号土坑

Ｄ７号土坑は、調査区の西側、ソー38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面およびＹ６号住居址検出面において検出された。本土坑はＹ６号住居址の一部を破壊する。

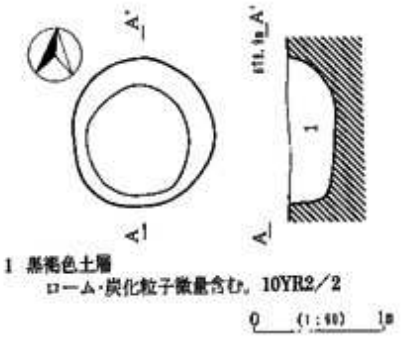
平面の形態は円形で、規模は直径121～124cmを測る。

検出面から床までの上層は３層に分割され、いずれの層も人為的に埋められた土砂である。

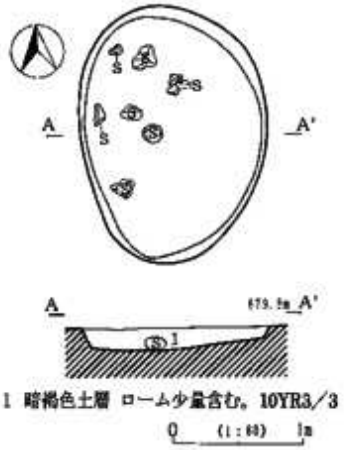
遺物は弥生時代の中期の甕・壺といった土器などが出土している。

以上より本土坑の所産期は、弥生時代の中期の後半と考えられる。

・平面図→133ページ



第146図　Ｄ８号土坑実測図



第147図　Ｄ９号土坑実測図

Ｄ８号土坑

Ｄ８号土坑は、調査区の西側、セ・ソー37・38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は円形で、規模は直径108～113cmを測る。

検出面から床までの土層は１層のみが確認された。

遺物は弥生時代の中期の甕・壺といった土器や土錘などが出土している。

以上より本土坑の所産期は、弥生時代の中期の後半と考えられる。

・平面図→134ページ

Ｄ９号土坑

Ｄ９号土坑は、調査区の北西部、エー36グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

平面の形態は南北に長い楕円形で、規模は南北が192cm・東西が143cmを測る。土坑の長い軸の向きは南北方向を指し、北より西へ５°ずれる。

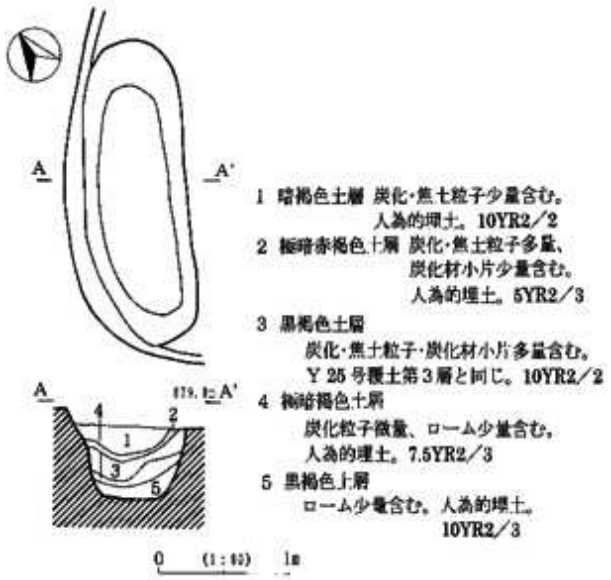
検出面から床までの土層は１層のみが確認された。

遺物は弥生時代の中期の甕・壷といった土器などが出土している。

以上より本土坑の所産期は、弥生時代の中期の後半と考えられる。

・平面図→134ページ

Ｄ10号土坑



第148図　Ｄ10号土坑実測図

Ｄ10号土坑は、調査区の南側の中央、ソ・ター31グリッド内に位置し、Ｙ25号住居址内より検出された。

平面の形態は南北に長い不整楕円形で、規模は南北が231cm・東西は92cmを測る。土坑の向きは南北方向を指し、北より西へ30°ずれる。

検出面から床までの土層は５層に分割された。第１・２・４・５層までは人為的に埋められた土砂で、第３層はY25号住居址の覆土第３層と同一層である。

本土坑は、Y25号住居址が焼却される直前に掘り込まれており、掘り込んだ際に出た土砂が本土坑東側のY25号住居址の床面に平らにならされた状態で堆積していた。この土砂の直上と本土坑の第３層中で炭化材が検出され、土砂は火熱を受け変色していた。また骨は検出されなかったが、住居址内という特殊性やその位置、土層の様子、住居址の焼却後に土坑のみ人為的に埋められている点などから、Y25号住居址に関係の深い人物を埋葬した墓坑ではないかと推測される。なお第４層と第５層をうめた上に遺体を安置したと考えられる。

遺物は甕・壺・坏といった土器片などが出土している。

以上より本土坑の所産期は、弥生時代の中期の後半と考えられる。

・平面図→135ページ

Ｓ５号土坑

Ｓ５号土坑は、調査区の中央部の西寄り、セ・ソ－32・33グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本土坑は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

平面の形態は楕円形と考えられる。

弥生時代の中期の後半の土器片が出土しているため、所産期はそのあたりであろう。

Ｓ８号土坑

Ｓ８号土坑は、調査区の中央部の北寄り、コ－17・18グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本土坑は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

平面の形態は円形である。

弥生時代の中期の後半の土器片が出土しているため、所産期はそのあたりであろう。

Ｓ12号土坑

S12号土坑は、調査区の中央部、シ－27グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検

出された。本土坑は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

平面の形態は楕円形である。

弥生時代の中期の後半の土器片が出土しているため、所産期はそのあたりであろう。

S14号土坑

S14号土坑は、調査区の中央部の、セ・ソー23・24グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本土坑は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

平面の形態は楕円形である。

弥生時代の中期の後半の土器片が多量に出土しているため、所産期はそのあたりであろう。

S16号土坑

S16号土坑は、調査区の中央部の、ソー19グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本土坑は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

平面の形態は楕円形と考えられる。

弥生時代の中期の後半の土器片が多量に出土しているため、所産期はそのあたりであろう。

S21号土坑

S21号土坑は、調査区の中央部の、チー24グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本土坑は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。

平面の形態は円形である。

弥生時代の中期の後半の土器片が出土しているため、所産期はそのあたりであろう。

S25号土坑

S25号土坑は、調査区の北西部の、オ・カー35・36グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面

において検出された。本土坑は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。その結果H1号住居址より古いことが判明した。

平面の形態は楕円形と考えられる。

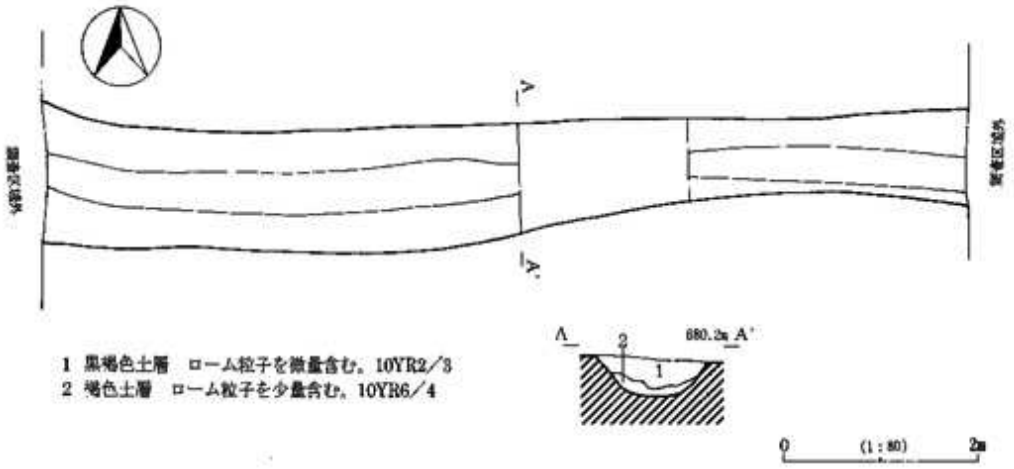
弥生時代の中期の後半の土器片が出土しているため、所産期はそのあたりであろう。

S27号土坑

S27号土坑は、調査区の北側の中央、ク・ケ－25・26グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。本土坑は調査区域外にあるため、プランの確認調査のみ行った。その結果S26号住居址より新しいことが判明した。

平面の形態は楕円形と考えられる。

弥生時代の中期の後半の土器片が出土しているため、所産期はそのあたりであろう。



第149図　M1号溝状遺構実測図

6　溝状遺構

Ｍ１号溝状遺構

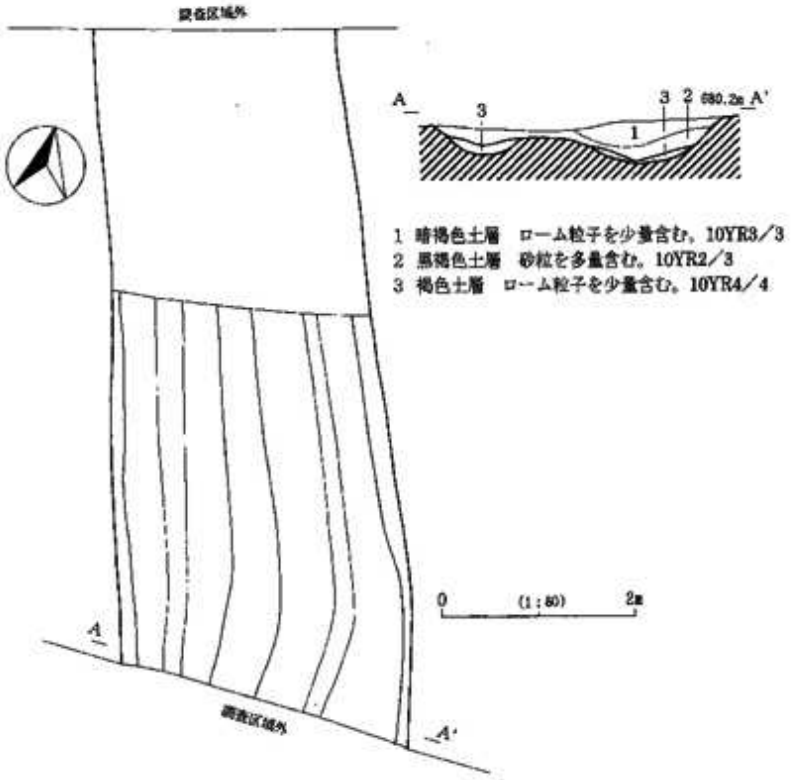
Ｍ１号溝状遺構は、調査区の西側、ク－37・38グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

本遺構は東西方向に展開し、規模は、全長950cm（確認値）・最大幅124cmを測る。底面のレベル値は高低差がなく、底面は水平である。

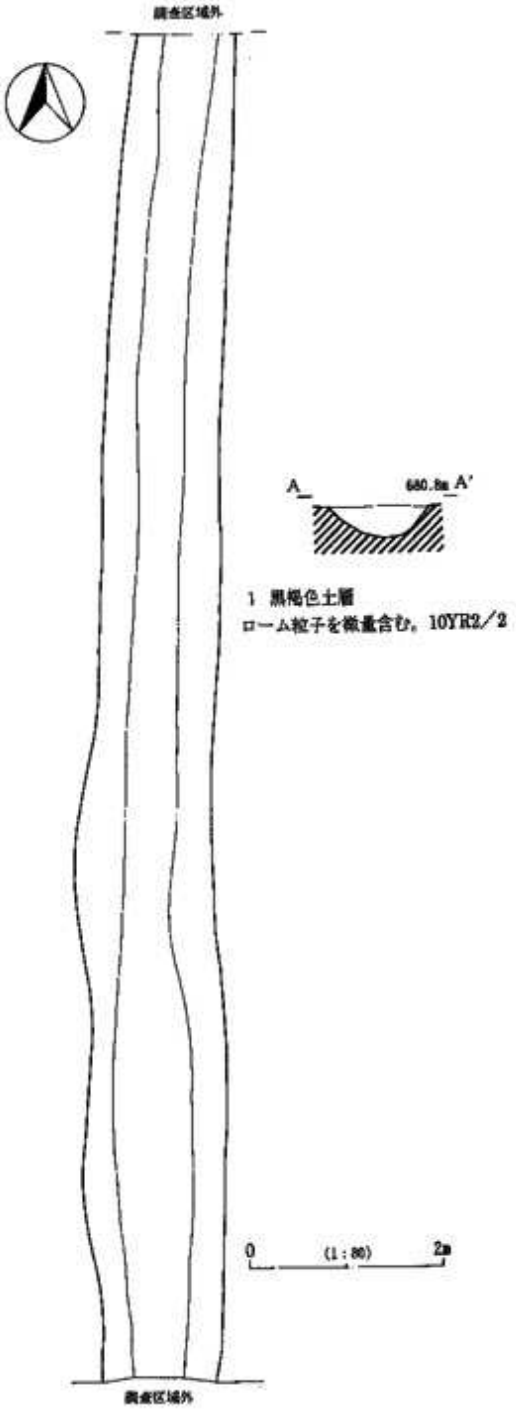
遺物は、弥生時代の中期と平安時代の上器片が出土している。

本遺構の所産期は、平安時代と考えられる。

・平面図→138ページ



第150図　Ｍ５号溝状遺構実測図



第151図　M２号溝状遺構実測図

Ｍ２号溝状遺構

Ｍ２号溝状遺構は、調査区の東側、キ～サ－10グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

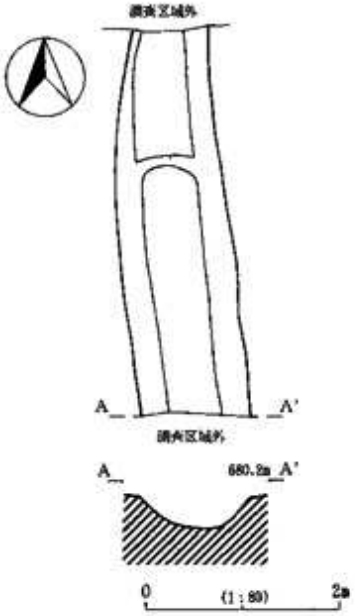
本遺構は南北方向に展開し、規模は、全長1385cm（確認値）・最大幅143cmを測る。底面のレベル値は10cm内外で高低を繰り返すが全体的には差がなく、底面は水平である。

遺物は、弥生時代の中期と平安時代の土器片が出土している。

本遺構の所産期は、平安時代と考えられる。

・平面図→140ページ

Ｍ３号溝状遺構



第152図　Ｍ３号溝状遺構実測図

Ｍ３号溝状遺構は、調査区の北側、ウ～オ－30・31グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

本遺構は南北方向に展開し、規模は、全長396cm（確認値）・最大幅121cmを測る。底面のレベル値は10cm内外で高低を繰り返すが全体的には差がなく、底面は水平である。

遺物は、弥生時代の中期と平安時代の土器片が出土している。

本遺構の所産期は、平安時代と考えられる。

・平面図→141ページ

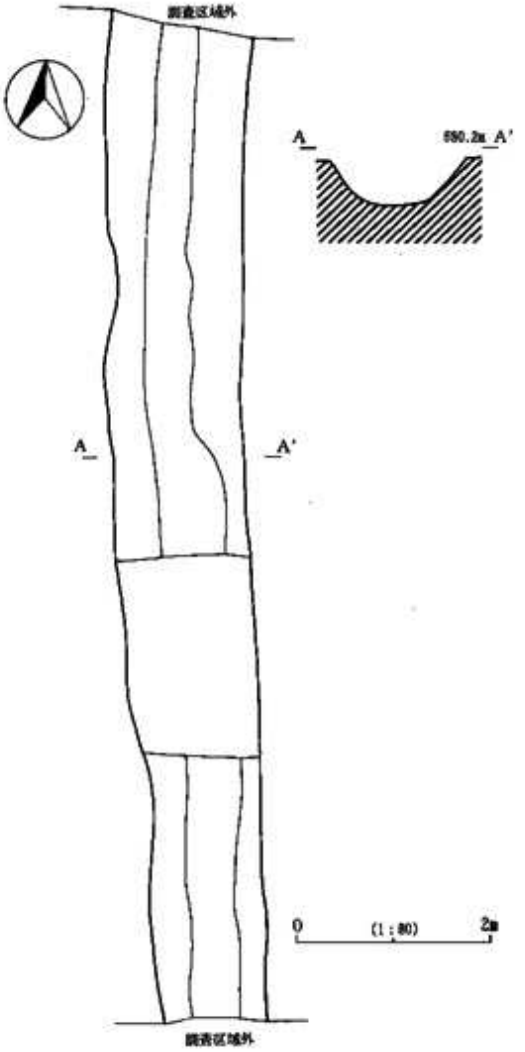
Ｍ４号溝状遺構

Ｍ４号溝状遺構は、調査区の中央部、ス－27～29グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面に

おいて検出された。本遺構はＦ１号掘立柱建物址を破壊する。

本遺構は東西方向に展開し、規模は、全長1042cm（確認値）・最大幅144cmを測る。底面のレベル値は10cm内外で高低を繰り返すが全体的には差がなく、底面は水平である。

遺物は、弥生時代の中期と平安時代の土器片が出土している。



第153図　Ｍ４号溝状遺構実測図

本遺構の所産期は、平安時代と考えられる。

・平面図→142ページ

M５号溝状遺構

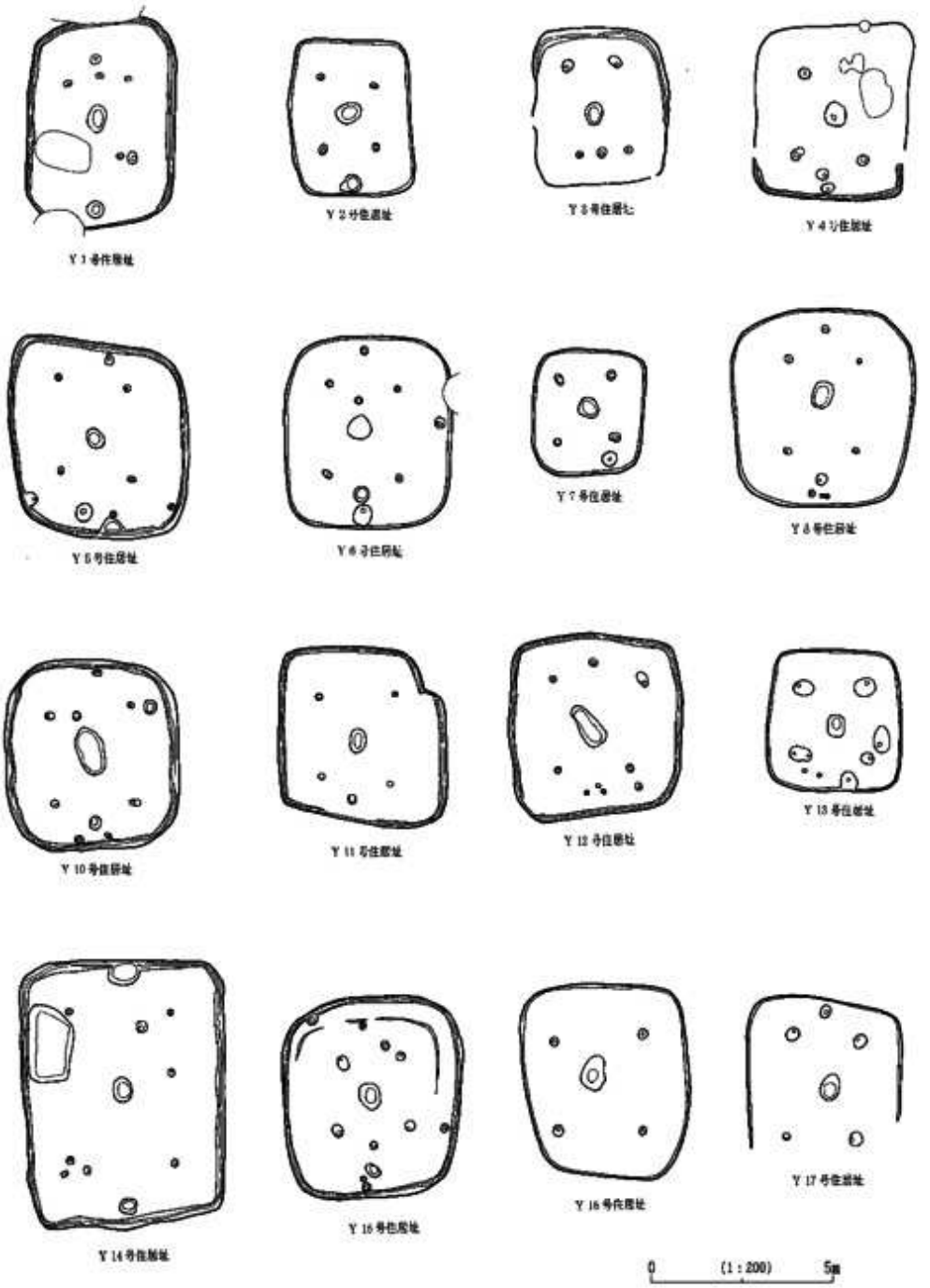
M５号溝状遺構は、調査区の西側、ノ・ハ－51・52グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

本遺構は南北方向に展開し、規模は、全長731cm（確認値）・最大幅302cmを測る。底面のレベル値は南から北に向かい低下している。勾配率は48%～28%である。

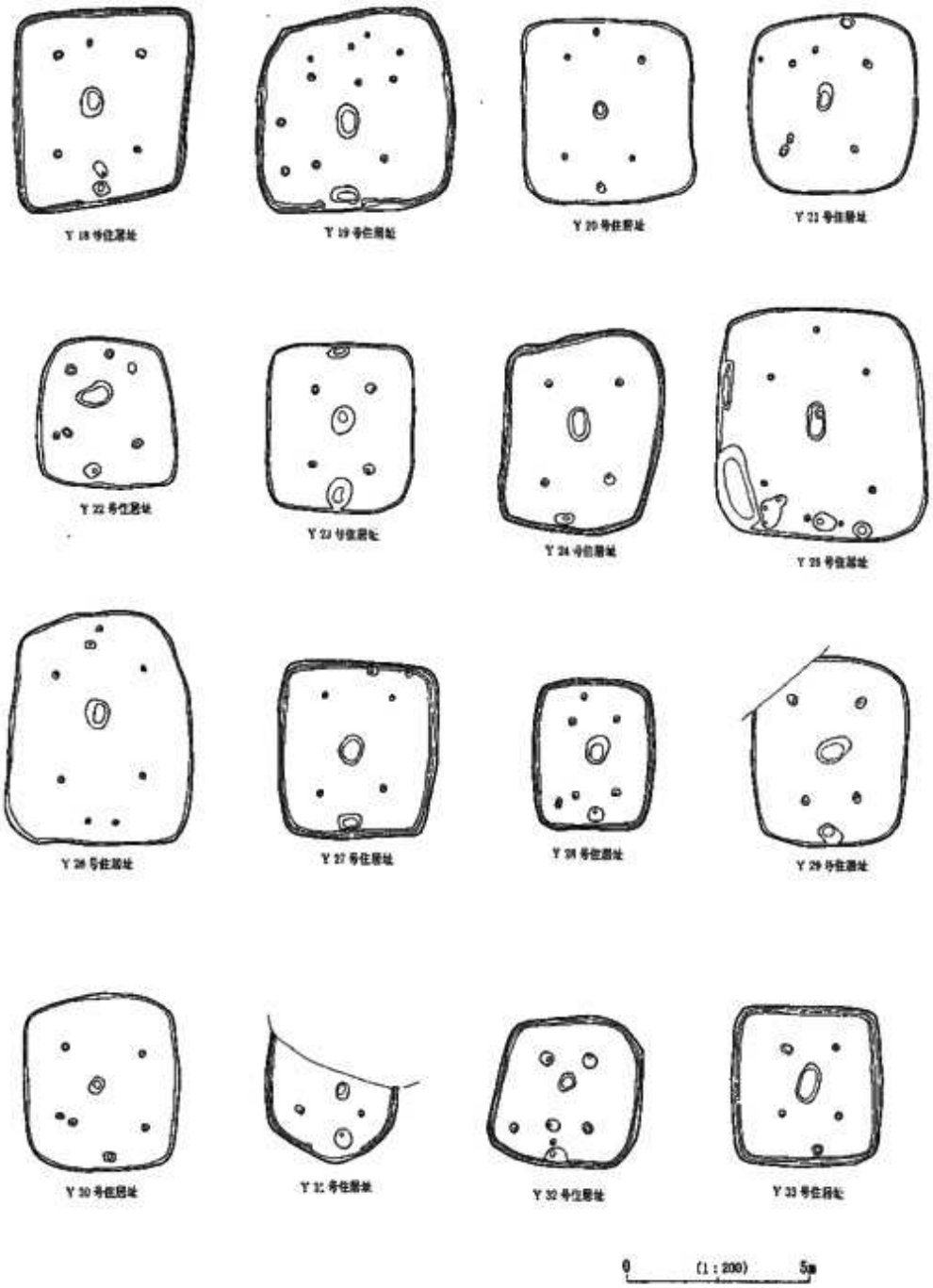
遺物は、弥生時代の中期と平安時代の土器片が出土している。

本遺構の所産期は、平安時代と考えられる。

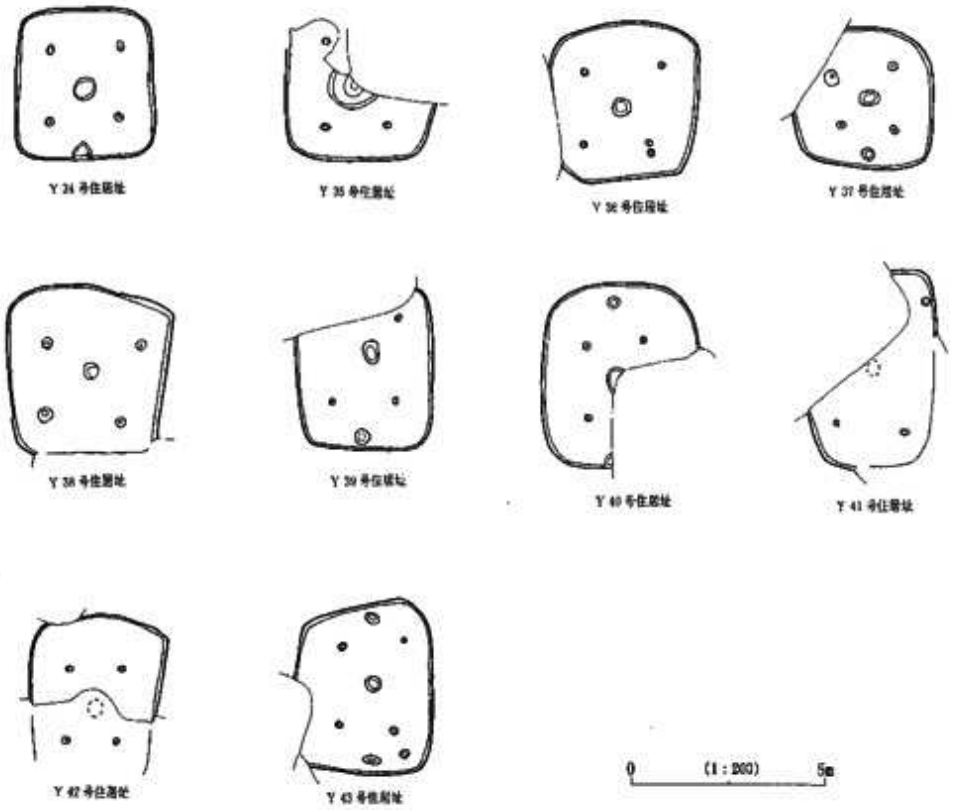
・平面図→139ページ



第154図　弥生時代中期後半住居址一覧図

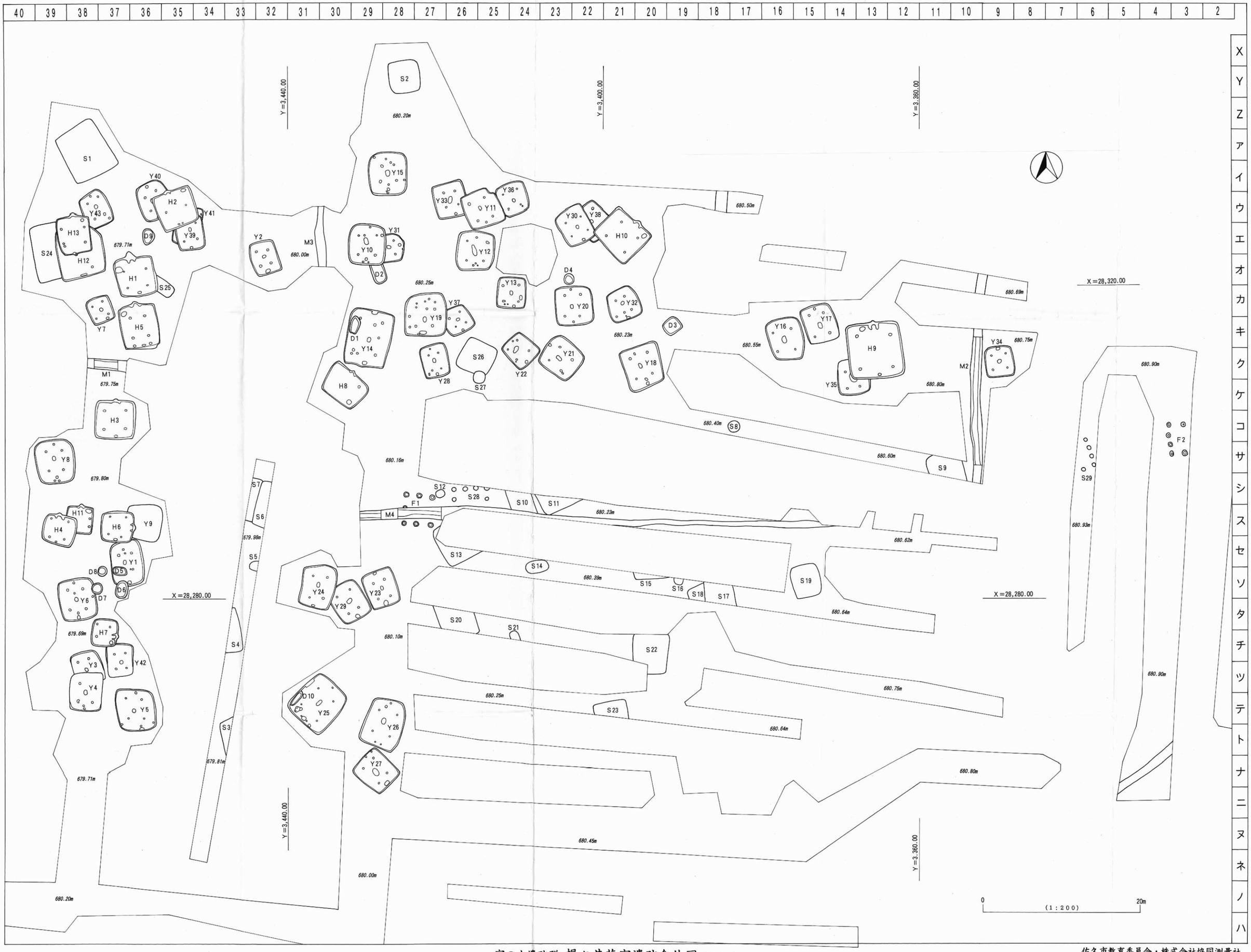


第155図　弥生時代中期後半住居址一覧図



第156図　弥生時代中期後半住居址一覧図

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第49集
宮の上遺跡群　根々井芝宮遺跡
本文遺構編
１９９８年３月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市大字中込3056
埋蔵文化財課
〒385-0006　長野県佐久市大字志賀5953
TEL. 0267－68－7321
印刷所　㈱佐久印刷所



宮の上遺跡群 根々井芝宮遺跡全体図 (1:200)

佐久市教育委員会・株式会社協同測量社